

成 田 市

林北遺跡・長山遺跡

—一般県道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書II—

1 9 8 9

千 葉 県 土 木 部
財団法人 千葉県文化財センター

成 田 市

はやし きた なが やま
林北遺跡・長山遺跡

—一般県道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書II—

1 9 8 9

千 葉 県 土 木 部
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

成田市は、利根川・印旛沼などの自然条件に恵まれているところから、原始・古代をはじめ、中・近世に至るまで貴重な歴史的文化遺産を多く残していることで知られており、また、古くから信仰の地、門前町として栄えてきた町でもあります。更に、近年は、日本の空の表玄関である新東京国際空港の開港とともに成長の一途をたどり、近代的都市として変貌しつつあります。

千葉県土木部は、新東京国際空港周辺の道路整備の一環として、一般県道成田下総線の道路改良事業を計画しました。そこで、千葉県教育委員会では、同事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて千葉県土木部をはじめ、関係諸機関と協議を重ねてまいりました。その結果、路線の変更等ができるだけ保存の方向をとりましたが、やむを得ず路線内にかかる遺跡については、発掘調査による記録保存の措置をとることで協議が整い、千葉県教育委員会の指名により財団法人千葉県文化財センターが実施することとなりました。発掘調査は、昭和58年6月～7月、昭和62年10月～12月にそれぞれ実施しました。

昭和58年度調査の芦田台1・2号塚につきましては、「成田市 芦田台1・2号塚」としてすでに刊行されております。

そしてこのたび、成田市内に所在する林北遺跡・長山遺跡の整理作業が終了し、報告書として刊行する運びとなりました。本書に収載した林北遺跡では、縄文時代早期の焼土遺構17基、中期の住居跡1軒を検出し、早期から前期にかけての土器が多数出土しました。また、長山遺跡では、縄文時代早期の陥し穴や弥生時代後期の住居跡を検出しました。これらの遺構や出土遺物は、下総台地の歴史を解明していくうえで重要なものです。

本書が学術資料としてはもとより、歴史に対する理解を深める資料として広く活用されることを望む次第です。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで、種々御指導いただいた、千葉県教育委員会をはじめ、千葉県土木部・千葉県成田土木事務所・成田市教育委員会・地元関係諸機関各位の御指導・御協力に御礼申し上げるとともに、発掘調査及び整理作業に協力された多くの調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和63年10月

財団法人 千葉県文化財センター

岩瀬良三

凡　　例

1. 本書は、千葉県土木部による一般県道成田下総線建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、文化庁及び千葉県教育委員会の指導のもとに財団法人千葉県文化財センターが行った。
3. 本書に収載された遺跡は林北遺跡（成田市土室753-2他）、長山遺跡（成田市土室740他）である。遺跡コードは、林北遺跡（211-047）・長山遺跡（211-048）である。
4. 発掘調査（昭和62年10月19日～昭和62年12月25日）は、調査部長堀部昭夫、部長補佐古内茂、班長矢戸三男の指導のもとに、主任調査研究員郷畠英司、調査研究員鈴木文雄が担当した。
5. 整理作業（昭和63年6月1日～昭和63年10月31日）は、調査部長堀部昭夫、部長補佐古内茂、班長矢戸三男の指導のもとに、主任調査研究員小久賀隆史、調査研究員石橋宏克が担当した。
6. 本書の執筆は、遺構の説明と弥生時代以降を主に小久賀が担当し、それ以外の執筆及び編集は石橋が行った。
7. 写真撮影は、遺構関係を各発掘担当者が行い、整理作業に伴う遺物の撮影は石橋が担当した。
8. 繩文時代早期から前期の繊維土器について、土器に含まれる繊維の量により次の2種類のスクリントーンを使用した。



繊維の量が少ないもの



繊維の量が多いもの

9. 発掘調査から報告書刊行に至るまで、下記諸機関、諸氏の御指導・御協力をいただき、深く謝意を表する次第であります。千葉県教育庁文化課、千葉県土木部道路建設課、成田土木事務所、成田市教育委員会、木川邦夫氏、原田昌幸氏、小倉均氏、野内秀明氏、高橋誠氏、西山太郎氏、栗田則久氏、新田浩三氏、寺内博之氏、青木 司氏、高野安夫氏

本文目次

序文	
凡例	
I. 調査の概要	6
1. 発掘調査に至る経緯	6
2. 発掘調査の方法と経過	6
II. 遺跡の立地と環境	8
1. 遺跡の位置	8
2. 周辺の遺跡	8
3. 林北遺跡・長山遺跡の基本層序	10
III. 林北遺跡の調査	11
1. 遺構・遺物の概要	11
2. 検出された遺構と遺物	14
縄文時代	14
弥生時代	54
平安時代	54
IV. 長山遺跡の調査	55
1. 遺構・遺物の概要	55
2. 検出された遺構と遺物	56
旧石器時代	56
縄文時代	57
弥生時代	61
V. まとめ	64
1. 縄文時代	64
2. 弥生時代	70

挿図目次

第1図 遺跡位置図 (1/25000).....	7
第2図 林北遺跡・長山遺跡周辺地形図 (1/5000).....	9
第3図 林北遺跡・長山遺跡土層柱状図	10
第4図 林北遺跡出土縄文土器時期別数量比	11
第5図 林北遺跡確認トレンチ配置図 (1) (1/1000).....	12
第6図 林北遺跡確認トレンチ配置図 (2) (1/1000).....	13
第7図 林北遺跡遺構配置図 (1/400)	14
第8図 022号住居跡.....	15
第9図 022号住居跡出土土器.....	16
第10図 003～007号焼土跡.....	19
第11図 009～012, 015～019, 023～025号焼土跡.....	20
第12図 008, 013, 014, 020, 021号土壤.....	22
第13図 焼土跡・土壤内出土土器.....	24
第14図 包含層出土縄文土器分布図 (1)	26
第15図 包含層出土縄文土器分布図 (2)	27
第16図 包含層出土縄文土器 (1)	29
第17図 包含層出土縄文土器 (2)	31
第18図 包含層出土縄文土器 (3)	33
第19図 包含層出土縄文土器 (4)	35
第20図 包含層出土縄文土器 (5)	37
第21図 包含層出土縄文土器 (6)	39
第22図 包含層出土縄文土器 (7)	40
第23図 包含層出土縄文土器 (8)	41
第24図 包含層出土縄文土器 (9)	42
第25図 包含層出土縄文土器 (10)	43
第26図 包含層出土縄文土器 (11)	44
第27図 包含層出土縄文土器 (12)	46
第28図 包含層出土縄文土器 (13)	47
第29図 包含層出土土製品・ミニチュア土器.....	49
第30図 包含層出土石器 (1)	51
第31図 包含層出土石器 (2)	53

第32図 グリッド出土弥生土器	54
第33図 グリッド出土土師器	54
第34図 長山遺跡確認トレンチ配置図及び遺構配置図 (1/1000)	55
第35図 旧石器時代石器出土グリッド東壁土層図	56
第36図 旧石器時代確認グリッド配置図及び遺物出土グリッド位置図	56
第37図 出土石器	56
第38図 002号陥し穴	57
第39図 002号陥し穴出土土器	58
第40図 包含層出土縄文土器	59
第41図 包含層出土石器	60
第42図 001号住居跡	61
第43図 001号住居跡出土土器	62
第44図 グリッド出土弥生土器	63

図版目次

図版1 林北遺跡	図版9 林北遺跡
1. 遺跡近景	包含層出土縄文土器
2. 遺跡全景	図版10 林北遺跡
図版2 林北遺跡	包含層出土縄文土器
1. 002号住居跡	図版11 林北遺跡
2. 土器出土状況及び出土土器	包含層出土土製品及び石器
図版3 林北遺跡	図版12 長山遺跡
焼土跡・土壤	1. 遺跡全景
図版4 林北遺跡	2. 旧石器時代確認グリッド
焼土跡・土壤出土土器	図版13 長山遺跡
図版5 林北遺跡	1. 002号陥し穴
包含層出土縄文土器	2. 002号陥し穴出土土器
図版6 林北遺跡	図版14 長山遺跡
包含層出土縄文土器	包含層出土土器及び石器
図版7 林北遺跡	図版15 長山遺跡
包含層出土縄文土器	1. 001号住居跡
図版8 林北遺跡	2. 001号住居跡出土土器
包含層出土縄文土器	

I. 調査の概要

1. 発掘調査に至る経緯

千葉県土木部では、成田市周辺の交通量の増加に伴う道路網整備の一環として一般県道成田下総線建設事業を計画した。この道路が計画された成田市北部から下総町にかけての地域は、埋蔵文化財が数多く所在する地域でもあった。このため、成田下総線の建設に先立ち、千葉県教育委員会では千葉県土木部道路建設課と慎重な協議を重ねた。その結果、路線内に所在する埋蔵文化財については、記録保存の措置がとられることになり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、昭和58年度に一部実施され、成田市に所在する遺跡のうち芦田台1・2号塚については既に報告書も刊行されている。成田市林北遺跡・長山遺跡については、昭和62年度事業として実施された。

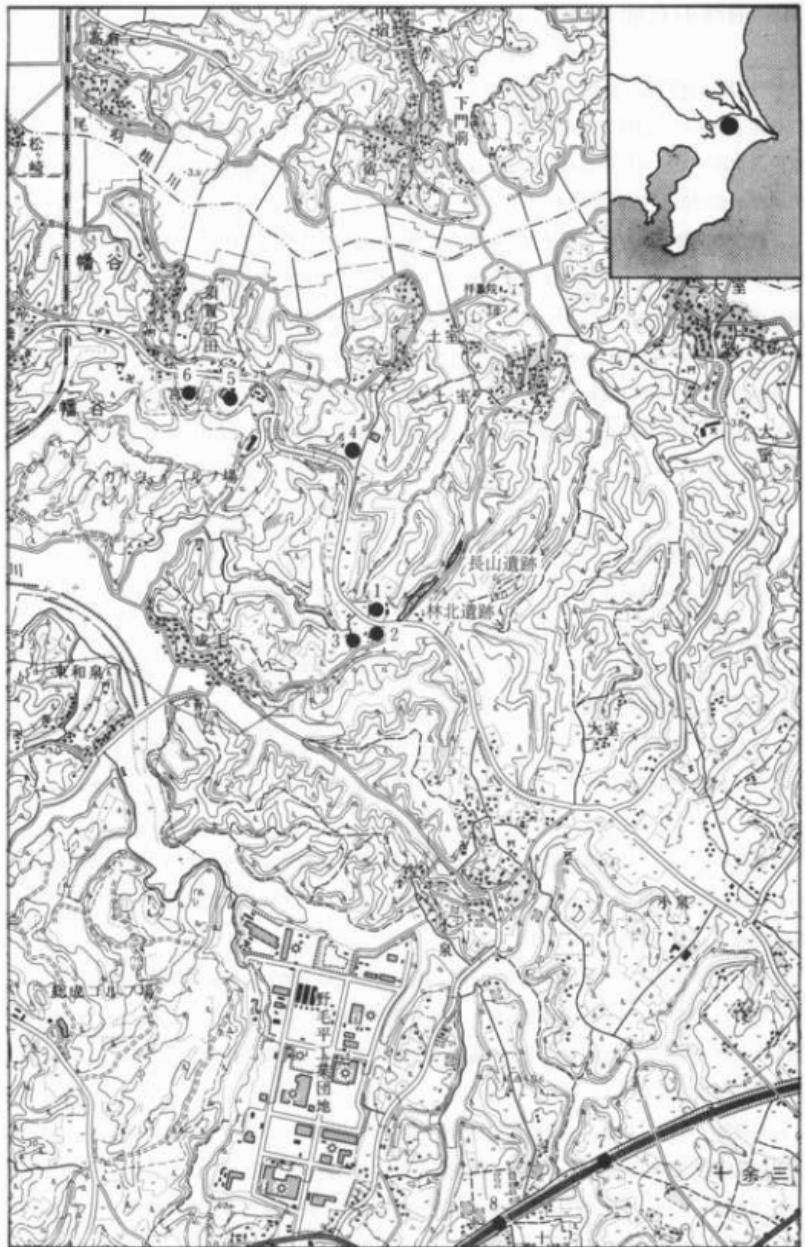
2. 発掘調査の方法と経過

成田市林北遺跡および長山遺跡の調査は、昭和62年10月19日から12月25日にわたって実施した。以下、調査の方法と経過について記載する。

環境整備が遅れたことにより、調査の開始が遅れ、10月19日から長山遺跡の調査に入り、器材の搬入・設営等を行ったのち発掘区を設定し、確認調査を開始した。調査区は南北に細長いため調査区の方向に合わせた任意のトレンチを4ヶ所に設定した。トレンチ内からは第4トレンチで陥し穴が検出された。また、調査区北側では、道路の法面部分で住居跡が検出されたため調査を行った。引き続き、旧石器時代の調査を行った結果、第3トレンチで第VII層中から石器が1点出土した。

10月の終わりから林北遺跡の調査へ移行した。林北遺跡も長山遺跡と同様、南北に細長いため調査区に合わせた任意のトレンチを設定し、確認調査を行った。その結果、調査区北側で繩文土器が集中する部分があったため本調査を実施し、多くの遺構が検出された。その後、旧石器時代の確認調査を行ったが、遺構・遺物は検出されなかったため埋め戻しを行い、12月25日に調査を終了した。

調査対象面積は、長山遺跡が350m²、林北遺跡が2,850m²で、林北遺跡ではそのうち530m²について本調査を実施した。



第1図 遺跡位置図 (1/25000)

II. 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置（第1図、第2図）

林北遺跡・長山遺跡は、成田市の東部に位置し、利根川までの最短距離は北へ約5km、新東京国際空港までの最短距離は南へ約8kmであり、行政的には林北遺跡が成田市土室753-2他、長山遺跡が成田市土室740他である。

これらの遺跡が所在する下総台地は標高約20～50mで、千葉県を中心に茨城県・埼玉県などの関東平野東部に広がる洪積世台地である。そのうち、利根川中流域から下流域にかけての下総台地を特に北総台地と呼んでおり、印旛沼・手賀沼などの湖沼をはじめ、利根川に流れる中小河川の侵食による開析谷の発達が著しく、複雑な地形を呈している。

遺跡は下総台地の北縁部中央にあたり、利根川に流れ込む根本名川の一主流で、新東京国際空港周辺に源を発する尾羽根川と小泉地先に源を発する荒海川の両河川によって挟まれた東西に細長い台地上に立地する。この台地も河川による侵食が著しく、樹枝状の地形を呈している。

2. 周辺の遺跡（第1図）

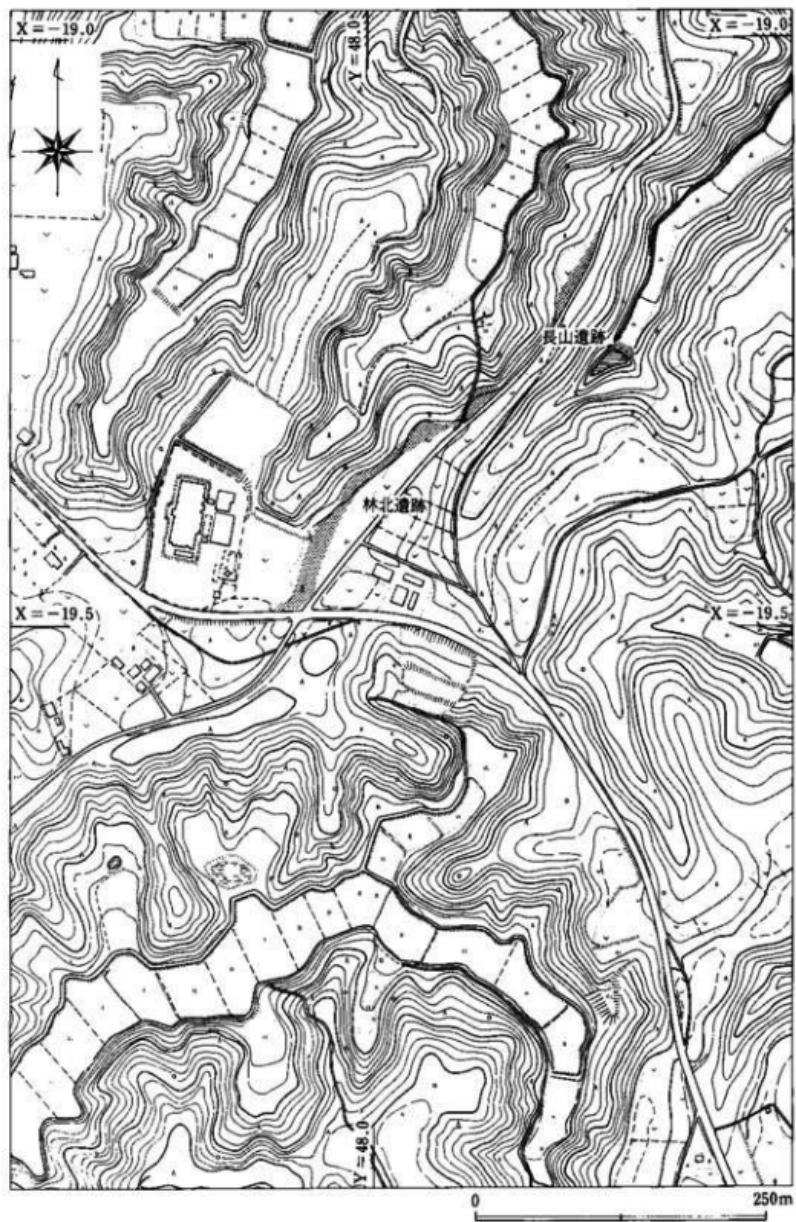
林北遺跡・長山遺跡のある台地上は、平坦な台地が少なく、比較的幅狭な舌状台地が展開している。これより荒海川・尾羽根川を通っていくにつれて、台地は大きく広がっていく。これらの河川の流域には多くの遺跡が残され、特に、上流の新東京国際空港周辺では旧石器時代から縄文時代早期の遺跡が集中して発見されている。また、下流域では、著名な荒海貝塚を始めとして大原野貝塚等の後期・晩期の貝塚等が点在する。遺跡の位置する中流域でも旧石器時代から奈良・平安時代までの多くの遺跡が所在している事が近年の分布調査や発掘調査によって明らかとなっている。

林西遺跡（1） 林北遺跡の谷を挟んだ北側に位置する遺跡である。発見された遺構は塙・溝等であった。遺物は縄文時代早期の条痕文系土器・前期の黒浜式土器・中期の加曾利E式土器等の縄文土器片が断片的に出土している。

間野台遺跡（2） 林北遺跡・長山遺跡と同一台地上に立地し、林北遺跡の西側に位置する。発見された遺構は、平安時代の住居跡・土壙・溝等である。遺物としては、縄文時代早期の条痕文系土器・中期の加曾利E式土器・後期の安行II式土器・晩期の姥山II式土器・同前浦式土器・同荒海式土器・同大洞系土器である。

右田遺跡（3） 奈良・平安時代の竪穴住居跡が検出されている。その他に断片的ながら縄文時代草創期の有舌尖頭器と早期から後期にかけての土器が出土している。

土室遺跡（4） 縄文時代前期の黒浜期の竪穴住居跡6軒が検出され、黒浜式土器を多数出土した遺跡である。その他に前期～晩期にいたる土器が出土している。



第2図 林北遺跡・長山遺跡周辺地形図 (1/5000)

旧久住中南遺跡（5） 古墳時代から奈良・平安時代にかけての堅穴住居跡が検出された。その他に断片的ながら縄文時代早期から後期にかけての土器が出土している。

桜谷津遺跡（6） 縄文時代早期から後期にかけての遺跡で、炉穴・住居跡・土壙等が検出されている。特に、縄文時代早期の沈線文系土器や後期の堀之内式土器は良好な資料である。

瓜生池遺跡（7） ソフトローム層中から旧石器時代の剝片が出土した遺跡で、遺跡の規模はあまり大きくなかった。検出された遺構としては溝状遺構があげられる。

四本木遺跡（8） 旧石器時代のユニットが3地点で検出された。製品は少なく、剝片が多く出土した。また、縄文時代早期の燃糸文系土器が集中して出土している。

参考文献

- 藤下昌信 1974 「土室遺跡発掘概報」 「成田市の文化財第5輯」
柿沼修平・田川良 1976 「成田市林西遺跡発掘調査報告書」
浜名徳永他 1976 「旧久住中南・右田両遺跡発掘調査報告書」
田川良 1977 「桜谷津」
柿沼修平他 1979 「成田市間野台遺跡発掘調査報告書」
斎木勝他 1985 「東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ-成田地区-」 財団法人千葉県文化財センター
伊藤智樹 1985 「成田市芦田台1・2号塚」 財団法人千葉県文化財センター

3. 林北遺跡・長山遺跡の基本層序

I層 表土（耕作土）

II層 橙褐色土層、所謂新期テフラを含む層である。林北遺跡では2層に分けられ、上層がIIa層にあたり、それより若干暗い暗褐色土層がIIb層に比定できる。

III層 黄褐色軟質ローム層、所謂ソフトロー

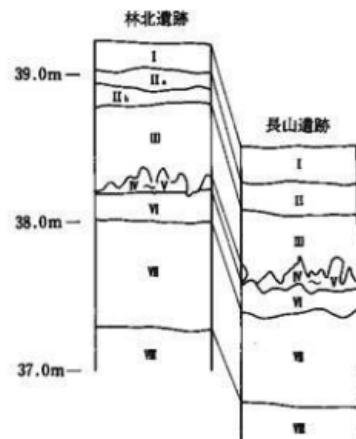
ム層で、樹枝状にIV～V層まで軟化して
いる。

IV～V層 黄褐色硬質ローム層、所謂ハード ローム層で第1黒色帯にあたる層である。

VI層 明褐色硬質ローム層、始良Tn火山灰 層で、上部に黄白色のブロックが目立つ。

VII層 暗黄褐色ローム層、第2黒色帯で、赤 色スコリアを多く含む。

VIII層 暗褐色ローム層、上層に比べ灰色を呈 し、赤色スコリアを若干含む。立川ロー ム最下層である。



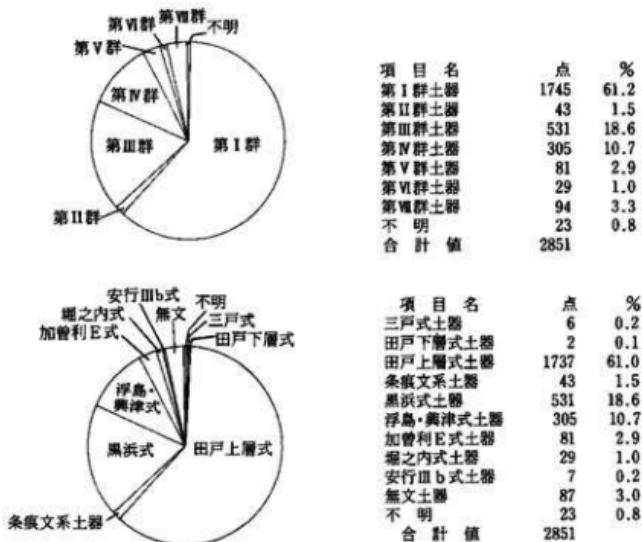
第3図 林北・長山遺跡土層柱状図 (S=1/40)

III. 林北遺跡の調査

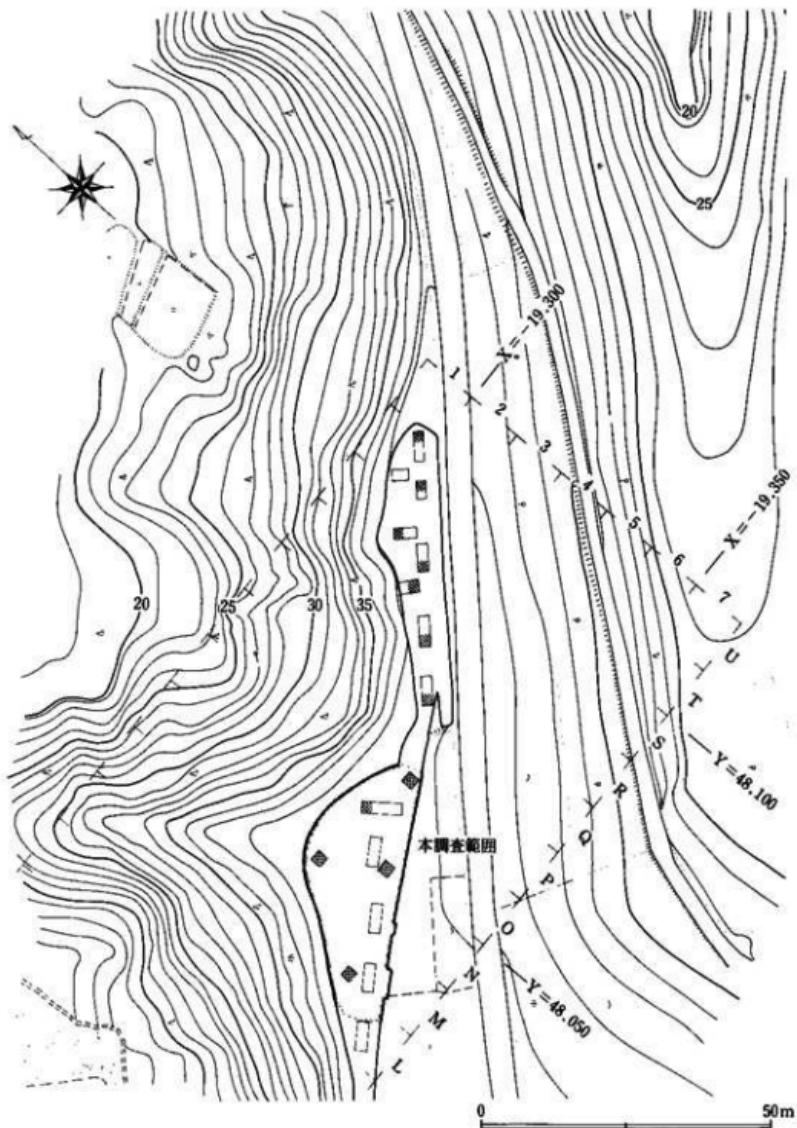
1. 遺構・遺物の概要（第4図～第6図）

林北遺跡からは縄文時代早期中葉から後期に至る各期の遺物が出土し、また、僅ながら弥生時代後期の土器、平安時代の土器が出土した。遺構が検出された場所は限定されおり、遺構の時期は全て縄文時代のものと考えられる。検出された遺構は竪穴住居跡1軒、焼土遺構17基、土壙5基、であるが、そのうち、時期が明らかな遺構は、早期中葉の焼土跡3基、土壙2基、中期の竪穴住居跡1軒である。その他の焼土遺構・土壙からは細片の土器が出土しただけで、時期を決定するに至っていない。なお、遺構の集中する地点は調査区の中央、僅かに舌状に伸びた台地の先端部で遺物が最も多く出土した地点にあたる。

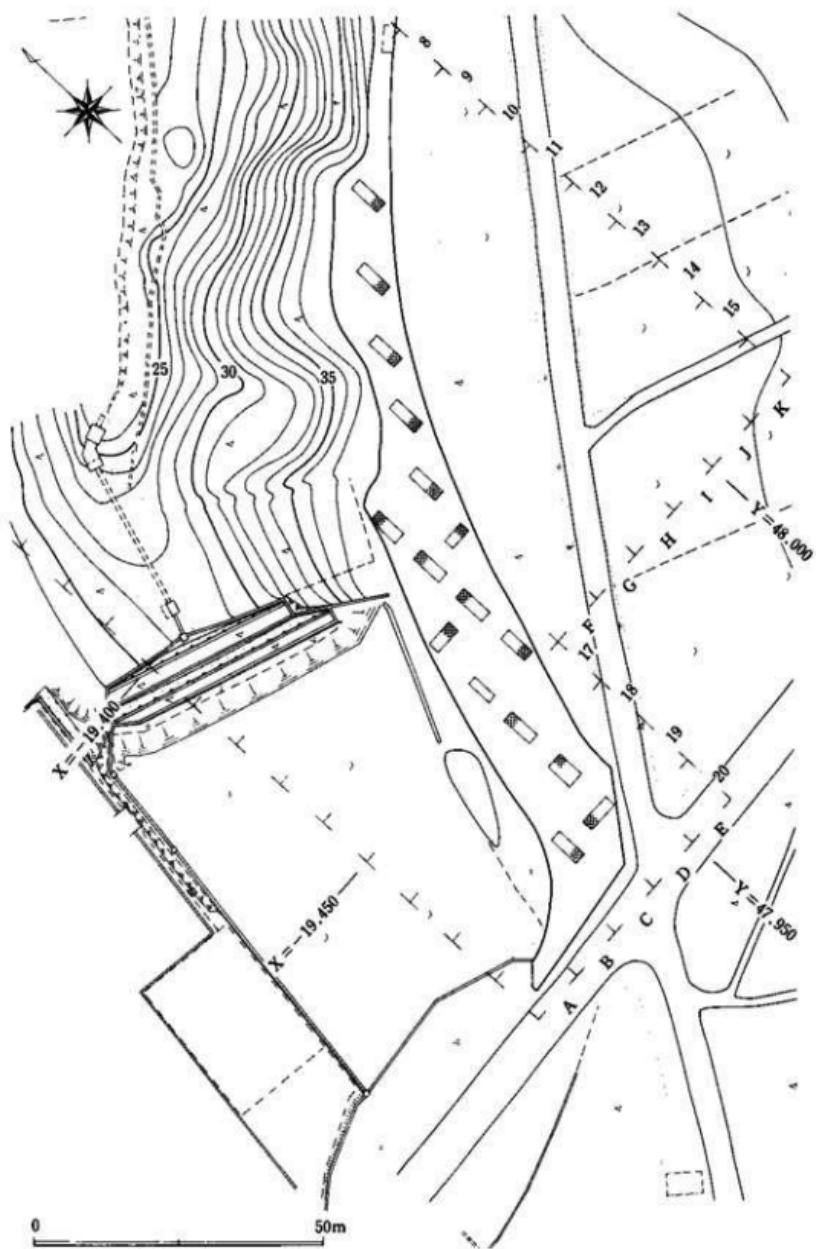
一方、出土遺物は、遺構出土の遺物を含め、その全てについて資料の分類を行った結果、時期別可能な土器片2828点を確認した。その他に細別不可能な小破片が23点ある。資料は縄文時代早期中葉の沈線文系土器1745点、そのうち無文土器が1691点である。早期後半の条痕文系土器43点、前期前半の黒浜式土器531点、前期後半の浮島・興津式土器・諸磯式土器305点、中期後半の加曾利E式土器81点、後期前半の土器29点、晩期の土器94点である。早期中葉の沈線文系土器が約61.2%を占め、本遺跡の主体をなしている。



第4図 林北遺跡出土縄文土器時期別数量比



第5図 林北遺跡確認トレンチ配置図(1) (1/1000)



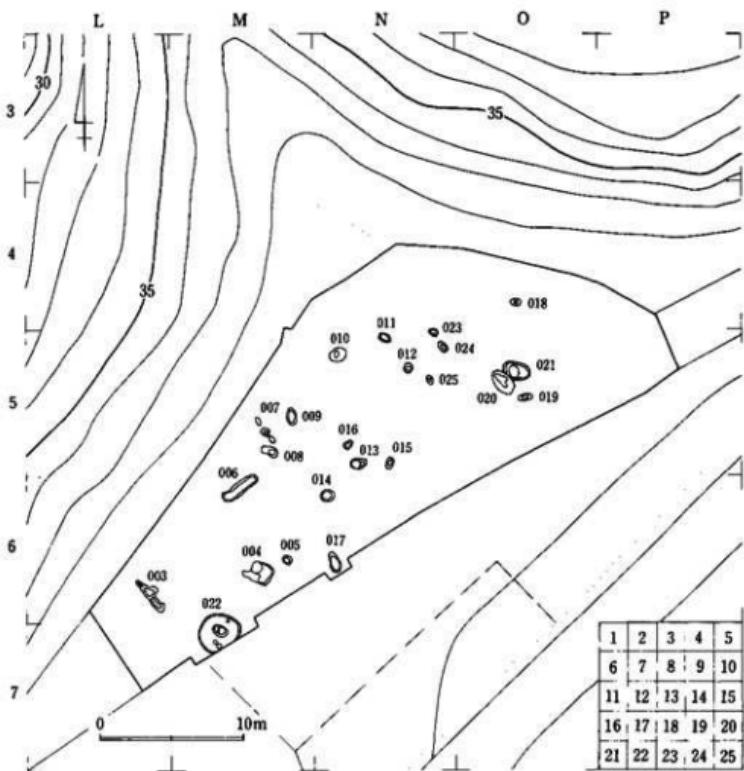
第6図 林北遺跡確認トレンチ配置図(2) (1/1000)

2. 検出された遺構と遺物 (第7図)

縄文時代

本遺跡の調査区中央(L 7～P 4 グリッド周辺)，北側に僅かに張り出した舌状台地上に遺物を多數出土する地点が確認された。その地点について本調査を行った結果，縄文時代早期の遺物包含層と早期から中期にわたる遺構が確認された。遺構は中期の竪穴住居跡1軒，焼土遺構17基，土壙5基であった。

なお，本遺跡は，調査前は畑地であったが，耕作等による深耕が殆どなく踏査時には表面に遺物の散布がなかった。また，第II層の堆積が比較的厚かったために，遺物の包含状態が良好であった。

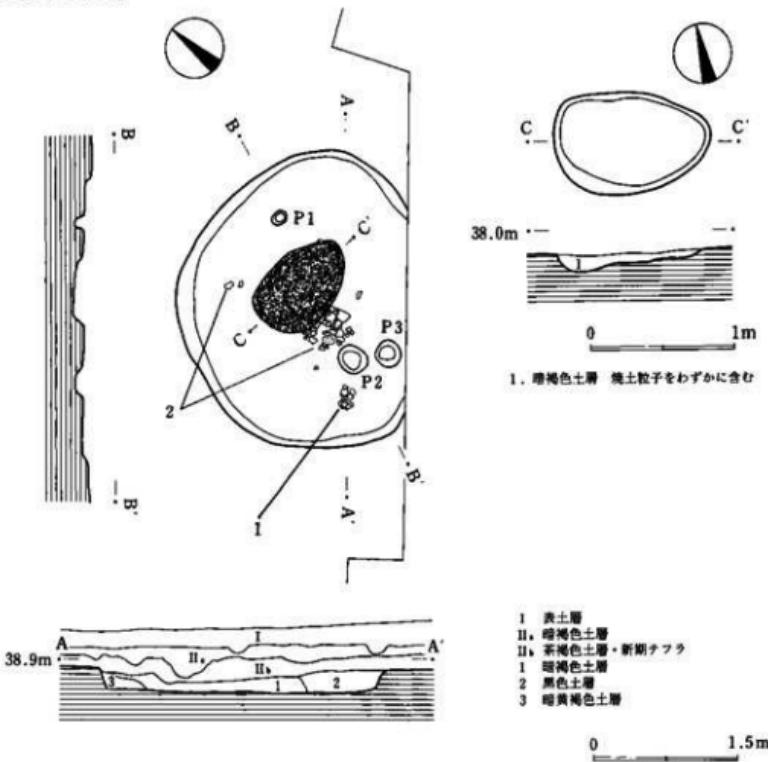


第7図 林北遺跡遺構配置図 (1/400)

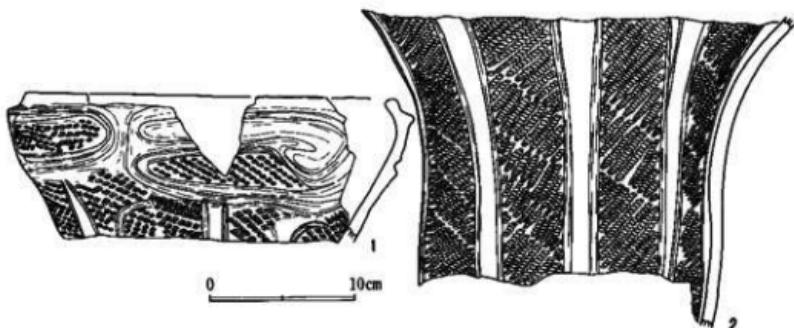
(1) 住居跡 (第8図・第9図、図版2)

022号住居跡 (第8図)

調査区北側の本調査部分の南端で検出した住居跡である。包含層 (第II b層) を調査中に、やまとまつた状態で縄文土器が出土したため、精査して検出したものである。検出したのは住居跡の4/5程で、東側1/5は調査範囲外へ広がっている。プランは、径約2.7mの不整な円形を呈する。壁は比較的遺存が良く、壁高は約0.22mを測る。壁溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦であるが、全体にやや軟弱である。ピットは3本検出した。P-1は径0.2m、深さ0.1m、P-2は径0.35m、深さ0.1m、P-3は径0.25m、深さ0.25mを測る。ピットの位置は不規則で、掘込みも浅く、柱穴といえるかどうか疑問が残る。炉跡は住居跡のほぼ中央で検出した。長径1.1m、短径0.7mの梢円形を呈する。掘り込みは西側が深くなる。炉跡内の覆土は暗褐色土の単一層で、焼土粒を僅かに含むもので、底面も殆ど焼けていない。住居跡の覆土は3層に分けられた。



第8図 022号住居跡



第9図 022号住居跡出土土器

出土土器（第9図1～2、図版2）

本住居跡から出土した土器は、縄文時代早期の無文土器と中期の加曾利E III式土器である。無文土器は10点であり、全て流れ込んだものと考えられる。加曾利E III式土器は2個体認められた。

1は住居跡の南側コーナー、P2付近から出土したものである。床面から約10cm浮いた状態で出土した。土器は口縁部の約1/3が残存し、表面や断面には炭化物が多く付着している。器形は口縁部は平縁で、口縁部直下から頸部にかけて湾曲を示す、所謂、キャリバー状を呈する。頸部以下は欠損しているため、全体の形は判然としないが胸部で僅かに膨らみ底部へと移行する深鉢形土器と思われる。胎土には砂粒子を多く含んでおり、焼成は良好である。内面の調整はミガキである。文様は、口縁部直下には複節縄文を横位・斜位に施し、胸部は斜位に施す。縄文を地文として口縁部直下には隆帯による渦巻き文等を貼り付けている。胸部には2本1単位の縦位沈線を器面に6単位施す。できあがった胴部分帶には波状の縦位沈線文をそれぞれに施す。

2は住居跡のほぼ中央、炉跡の周辺より出土した土器である。床面から5cm～10cm浮いた状態で出土した。土器は口縁部と底部を欠くが胸部は約80%現存する。表面に炭化物の付着が僅かに認められる。頸部の土器断面を観察すると土器は粘土帯で割れており、割れ口が擦られている。この事から口縁部と底部は意識的に割られたものと考えられる。器形は口縁部が欠損するため判然としないがおそらく1と同様なキャリバー状を呈し、胸部で僅かに膨らみ底部へと移行する深鉢形土器と考えられる。胎土には砂粒子を多く含み、内面の調整はミガキである。二次的な焼成を受けているため脆くなっている。文様は単節縄文(LR)を器面全体に施した後に、それを地文として2本1単位の縦位沈線を11単位施す。できあがった分帶には1にみられる波状の沈線は認められない。

(2) 焼土遺構 (第10図～第11図)

本遺跡では22基の土壌状の遺構が検出された。これらの遺構は出土遺物がほとんどなく時期の特定は難しい。しかし、これらの遺構分布と縄文土器の分布はほぼ一致しており、これらの遺構は縄文時代早期のものと思われる。これらの遺構のうち覆土中に焼土または焼土粒を含むものを、いわゆる炉穴と区別する意味で焼土遺構として報告する。

003号焼土跡

本調査区の南西端で検出した。プランは西側が擾乱を受けているが、 $3.1 \times 0.5m$ ほどの不整な長楕円形を呈するものと思われる。深さは0.1mほどで、底面はやや凹凸に富む。覆土は5層に分けられ、第2層に焼土粒を含む。第3層は焼土層である。遺物は若干の縄文土器が検出されており、2点図示することができた。

004号焼土跡

003号跡の東6mに位置する。プランは一辺が約1.5mの隅丸方形を呈し、西側に径約0.7～0.8mの不整な円形のピットが検出され、その西側には長楕円形の張り出し部を有する。深さは約0.1mで、西側のピットの部分がやや深くなる。覆土は2層に分けられ、第2層に焼土粒を含む。遺物は検出されなかった。

005号焼土跡

004号跡の東1mに位置する。プランは $0.6 \times 0.5m$ のやや不整な楕円形を呈する。深さは0.1mで、底面はほぼ平坦である。覆土は焼土粒を含む淡赤褐色土の単一層であった。遺物は縄文土器の細片が若干検出されたが、図示できるものはない。

006号焼土跡

004号跡の北4mに位置する。プランは $2.7 \times 0.7m$ の不整な隅丸の長方形を呈する。深さは0.2mほどだが、中央部がやや深く掘り込まれ、深さは0.4mを測る。覆土は4層に分けられ、第3層に焼土粒を含む。遺物は検出されなかった。

007号焼土跡

006号跡の北東に位置する。プランは径0.5～0.6mの円形ピットが3本並ぶ形態をとる。両端のピットはほぼ同様の形態で、深さ0.1mを測り、底面はほぼ平坦である。中央のピットはやや深く掘り込まれ、深さは0.2mを測る。覆土は3層に分けられ、第2、3層に焼土粒を含む。遺物は検出されなかった。

009号焼土跡

007号跡の東1.5mに位置する。プランは $1.1 \times 0.75m$ の不整な楕円形を呈する。深さは0.1mを測り、底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分けられ、第1層に焼土粒を含む。遺物は検出されなかった。

010号焼土跡

009号跡の北東4.5mに位置する。プランは $1.2 \times 0.95\text{m}$ の楕円形を呈する。深さは0.25mを測り、底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分けられ、第1層に焼土粒を含む。第2層は焼土層である。遺物は検出されなかった。

011号焼土跡

010号跡の北東2.5mに位置する。プランは $0.9 \times 0.6\text{m}$ の不整な楕円形を呈する。深さは0.1mを測り、底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分けられ、第1層に焼土粒を含む。遺物は検出されなかった。

012号焼土跡

011号跡の南東2mに位置する。プランは径 0.6m の円形を呈する。深さは0.2mを測り、底面はほぼ平坦である。覆土は焼土粒を含む赤褐色土の単一層であった。遺物は若干の縄文土器の細片が検出されたが、図示できるものはない。

015号焼土跡

012号跡の南6mに位置する。プランは $0.8 \times 0.5\text{m}$ の不整な楕円形を呈する。深さは0.2mを測り、底面はほぼ平坦である。覆土は焼土粒を含む淡赤褐色土の単一層であった。遺物は検出されなかった。

016号焼土跡

015号跡の北西3mに位置する。プランは $0.6 \times 0.5\text{m}$ の不整な楕円形を呈する。深さは0.06mと極めて浅い。底面はほぼ平坦である。覆土は焼土粒を含む赤褐色土の単一層であった。遺物は検出されなかった。

017号焼土跡

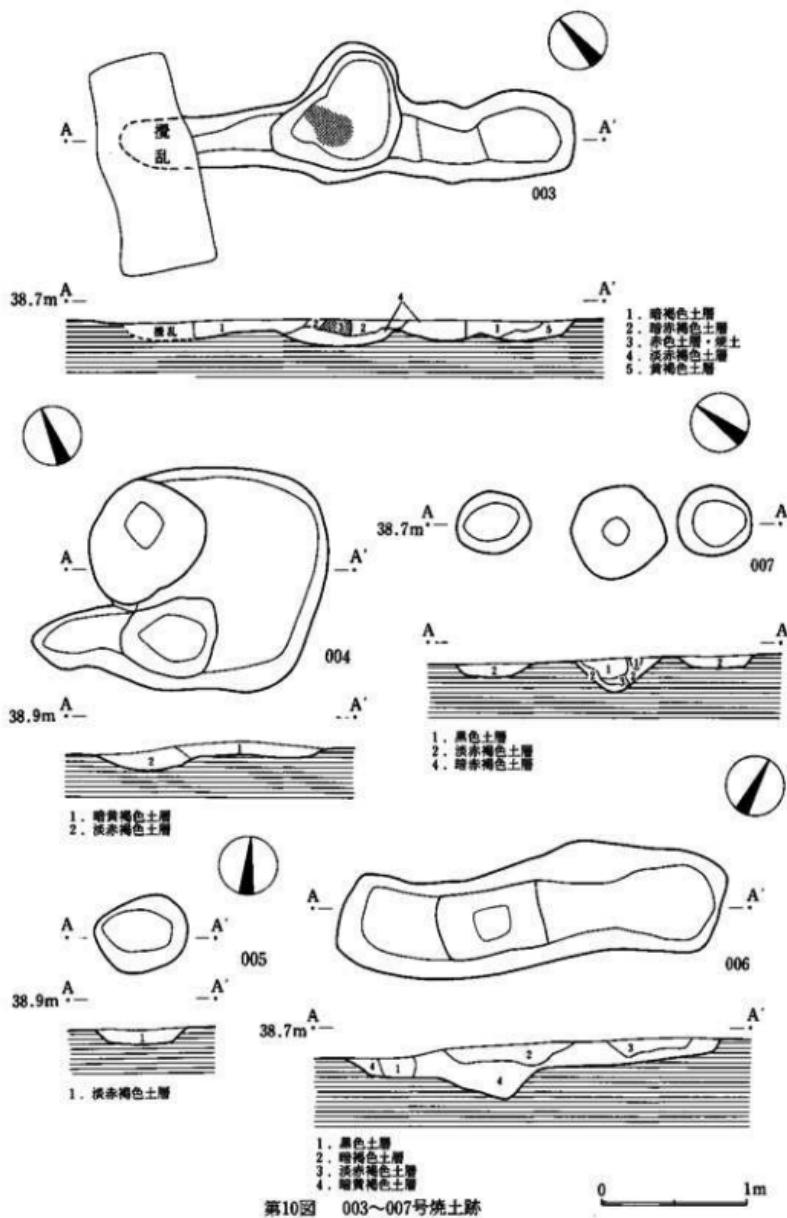
016号跡の南7mに位置する。プランは $1.25 \times 0.7\text{m}$ の不整な楕円形を呈する。深さは0.1mを測り、底面はほぼ平坦である。覆土は3層に分けられ、第2層に焼土粒を含む。遺物は若干の縄文土器が検出されており、1点図示することができた。

018号焼土跡

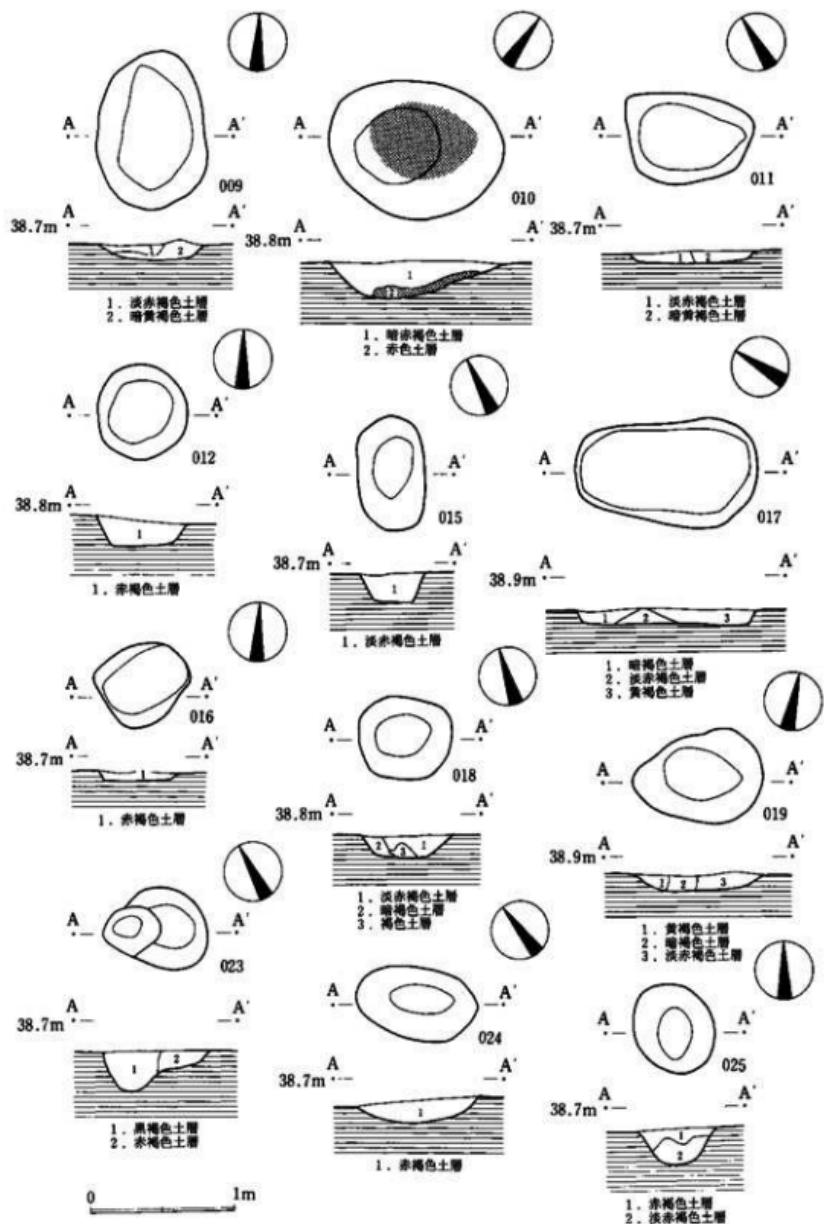
012号跡の北東8mに位置する。プランは径約 0.6m の不整な楕円形を呈する。深さは0.15mを測り、底面はほぼ平坦である。覆土は3層に分けられ、第1層に焼土粒を含む。遺物は検出されなかった。

019焼土跡

018号跡の南6mに位置する。プランは $0.9 \times 0.6\text{m}$ の不整な楕円形を呈する。深さは0.1mを測り、底面はほぼ平坦である。覆土は3層に分けられ、第3層に焼土粒を含む。遺物は若干の縄文土器が検出されており、1点図示することができた。



第10圖 003～007號燒土跡



第11図 009~012, 015~019, 023~025号焼土跡

0 2 3 号焼土跡

011号跡の東3mに位置する。プランは径0.6mの不整な梢円形を呈し、さらに西側が円形に深く掘り込まれている。深さは0.1~0.3mを測る。覆土は2層に分けられ、第2層に焼土粒を含む。遺物は検出されなかった。

0 2 4 号焼土跡

023号跡の南東0.5mに位置する。プランは $0.85 \times 0.5m$ の梢円形を呈する。深さは0.15mを測り、断面形は皿状を呈する。覆土は焼土粒を含む赤褐色土の單一層であった。遺物は検出されなかった。

0 2 5 号焼土跡

024号跡の南西2mに位置する。プランは径約0.6mのやや不整な円形を呈する。深さは0.25mを測り、断面形は擂鉢状を呈する。覆土は2層に分けられ、第1層に焼土粒を含む。遺物は検出されなかった。

(3) 土壙 (第12図)**0 0 8 号土壙**

007号跡の南1mに位置する。プランは $1 \times 0.65m$ の不整な梢円形を呈する。深さは0.25mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は暗褐色土の單一層であった。遺物は若干の繩文土器が検出されており、1点図示することができた。また、スクレーパーが1点出土している。

0 1 3 号土壙

008号土壙の東5mに位置する。プランは $1.1 \times 0.9m$ の不整な梢円形を呈し、西側が円形に深く掘り込まれている。深さは0.3mを測る。覆土は3層に分けられた。遺物は検出されなかった。

0 1 4 号土壙

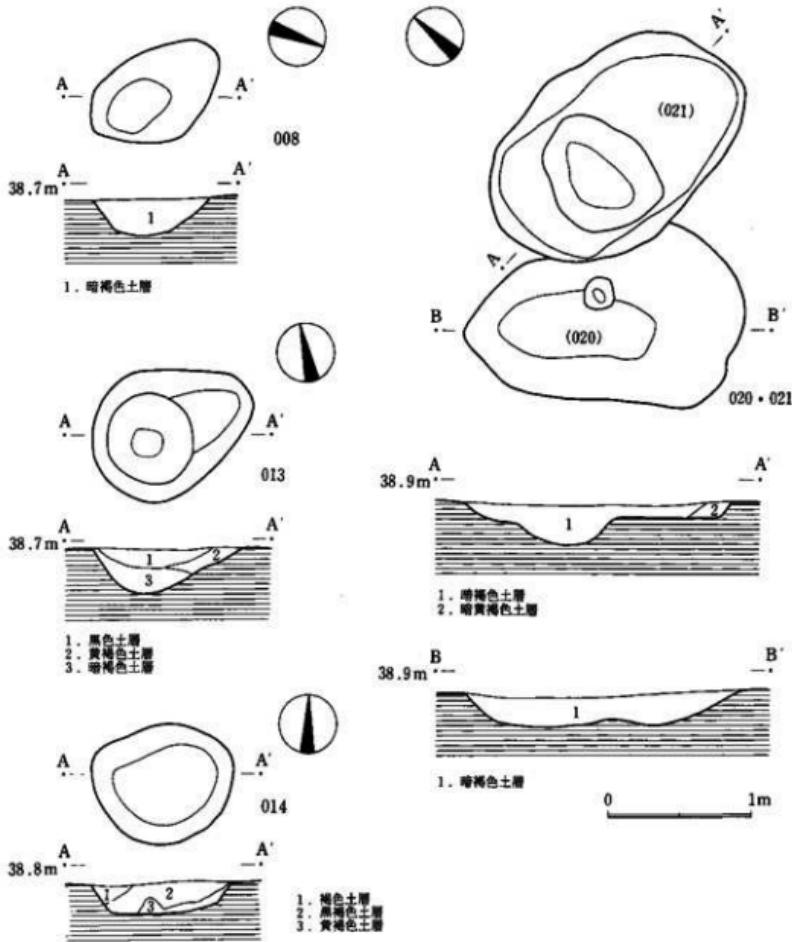
013号跡の南西3mに位置する。プランは $1 \times 0.8m$ の不整な梢円形を呈する。深さは0.2mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は3層に分けられた。遺物は検出されなかった。

0 2 0 号土壙

013号跡の北東10mに位置する。東側で021号跡と重複する。プランは $1.9 \times 1.1m$ の不整な梢円形を呈する。深さは0.2mを測る。東側で深さ0.05mの浅いピットが1本検出された。覆土は暗褐色土の單一層であった。遺物は繩文土器が検出されており、1点図示することができた。

0 2 1 号土壙

020号跡の東側で重複する。プランは $1.9 \times 1.3m$ の不整な梢円形を呈し、中央部が一段深く掘り込まれている。深さは中央部で0.25m、その他では0.1mを測る。覆土は2層に分けられた。遺物は検出されなかった。



第12図 008, 013, 014, 020, 021土壤

(4) 焼土跡及び土壤出土遺物(第13図1~6, 第30図1, 図版4, 図版11)

003号焼土跡(4・5)

本焼土跡から、第I群第3類4種土器に相当する土器が僅かに出土している。器形を窺うことができるものはない。4・5は同一個体の破片である。胎土は砂粒子を多く含み、焼成が良好である。また、植物繊維の混入はない。器面の調整は内外面共にミガキである。

017号焼土跡(3)

本焼土跡から第I群第3類4種土器に相当する土器が出土している。口縁部は平縁で僅かに外反する。胴部がないため全体の器形は不明であるが、おそらく深鉢形土器となろう。推定口径19.5cmを測る。口唇部形態は外そぎ状を呈し、口唇部には扁平な竹管を用いて結節沈線文を施している。胎土中には砂粒子が多く混入され、微量の植物繊維が含まれている。また、スコリア粒子の混入も目立つ。器面の調整は内外面共にミガキであり、良好な調整である。

019号焼土跡(6)

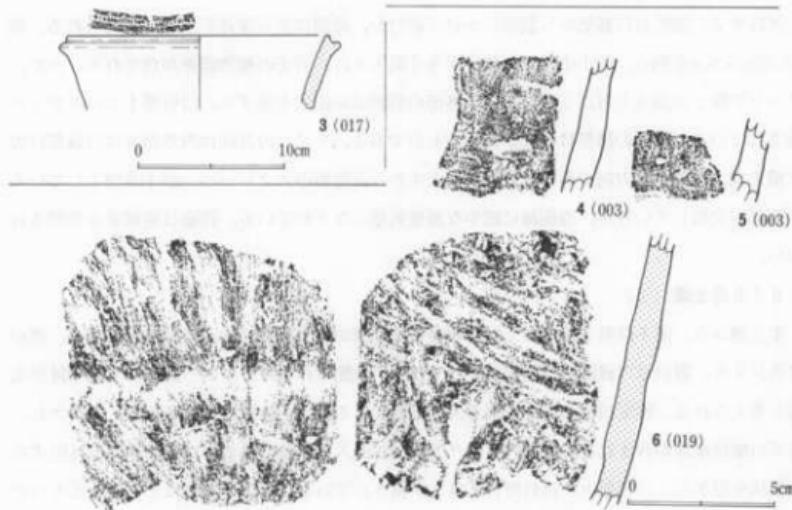
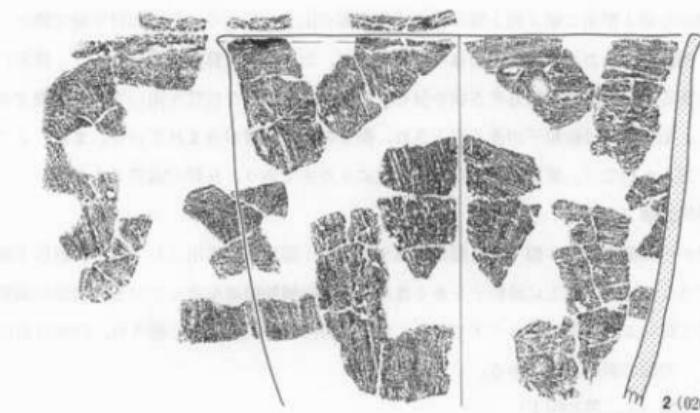
本焼土跡からは第I群第3類4種土器に相当する大型土器片が1点出土している。器形を窺うことはできない。6は胎土に砂粒子を多く含み、若干の植物繊維を含んでいる。器面の調整は刷毛目状工具によると思われるナデである。ナデの方向は外面が縦位に施され、内面は斜位に施される。内面の調整は雑である。

008号土壤(1, 第30図1)

本土壤から、第I群第3類4種土器に相当する土器が出土している。口縁部は平縁で、僅かに外反する。器形は口縁部から胴部にかけて直行し、底部に至る深鉢形土器と考えられる。推定口径25.0cmを測る。胎土中には砂粒子が多く混入され、若干の植物繊維が含まれる。また、スコリア粒子の混入も目立っている。口唇部の形態は尖頭状を呈する。口唇部上にはキザミが施されている。器面の調整はケズリによるものである。ケズリの方向は内外面共に口縁部付近で横方向、胴部で縦方向である。また、覆土中から頁岩製のスクレーバーが1点出土している。先端部が欠損しているが、両側縁に細かな調整剝離がなされている。詳細は観察表を参照されたい。

020号土壤(2)

本土壤から、第I群第3類4種土器に相当する土器が出土している。口縁部は平縁で、僅かに外反する。器形は口縁部から胴部にかけて緩やかな膨らみを持ちながら底部に至る深鉢形土器と考えられる。推定口径33.5cmを測る大型土器である。胎土中には砂粒子が多く混入され、若干の植物繊維が含まれる。また、スコリア粒子の混入も顕著である。口唇部形態は外肥する角頭状を呈する。口唇部上には貝殻背圧痕文が施されている。器面の調整はナデによるものである。ナデの方向は内外面共に口縁部付近で横方向、胴部で縦方向である。



第13図 焼土跡・土壤内出土土器

(5) 包含層出土の遺物 (第16図～第31図、図版5～図版11)

1. 包含層出土土器の分布 (第14図、第15図)

林北遺跡本調査区の土器の取り上げについては2mグリッドを設定し、その枠内で出土した遺物を一括で取り上げた。第14図、第15図に図示した分布図は土器を分類した上でグリッド別に図示したものである。なお、表面採集資料や大グリッドのもの等は含まない。

第I群第1類土器及び第2類土器については破片数が少なく、まとまりを示さなかったので図示しなかった。これらは本調査区に数点認められたが、その他は確認トレンチ内で検出されている。第3類土器は1種から3種を有文土器、第4種を無文土器としてそれぞれ分けて図示した。有文土器の中で、1種土器が調査区の東側、O-5グリッドを中心とした地点に集中し、2種・3種土器はL-6, 7・M-5, 6, 7グリッドに集中していた。無文土器は調査区全体に土器の分布が認められ、大きくはL-6, 7・M-5, 6, 7グリッド・N-4グリッド・N-4グリッド・O-5グリッドに集中する傾向がみられる。下層の遺構に照らし合わせると003号、006号、011号、012号、016号、019号、025号焼土跡や008号、013号、020号、021号土壤の上面で多くの無文土器が出土していることになる。無文土器の分布から有文土器2地点の土器組成の違いを確認することができなかった。第II群土器は本調査範囲外の13トレンチより出土したもので、広がりは確認できなかった。

第III群土器はN-5グリッドを中心に周間に広がりを示している。また、調査区西側に薄い広がりを示している。第IV群土器はN-4, 5グリッドが中心で第III群土器に比べると若干北に片寄る傾向にある。M-5, 6グリッドやP-5グリッドに薄い広がりを示している。浮島式・興津式・諸磯式等分布を作成してみたが顕著に分かれなかった。

第V群から第VII群土器は出土量が少ないため一括して図示した。N-5グリッドを中心に晩期の範疇で捉えられる無文土器が比較的集中する傾向にあった他は、遺物のまとまった分布として捉えることができなかった。

2. 繩文土器 (第16図～第28図)

包含層から出土した土器は細部観察により、施文原体・施文技法・調整製作技法・胎土・器形等の諸特徴から分類が可能である。本報告においてはこれらの諸特徴を加味し、群・類・種別を行い、代表例を掲載することとする。

第I群土器 早期中葉の沈線文系土器

第V群土器 中期の土器

第II群土器 早期後葉の条痕文系土器

第VI群土器 後期の土器

第III群土器 前期前半の織維土器

第VII群土器 晩期の土器

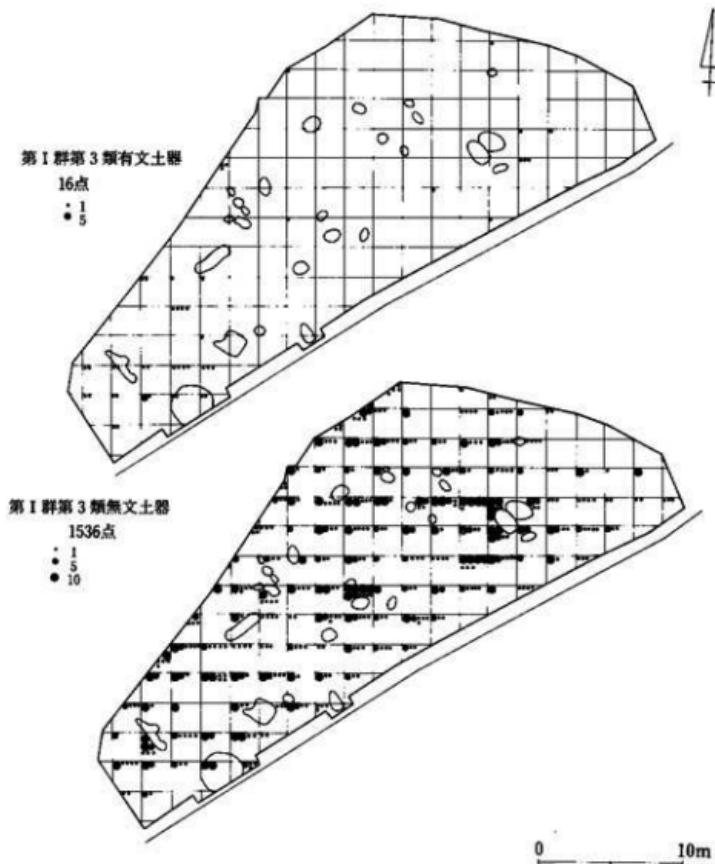
第IV群土器 前期後半の竹管文系土器

第Ⅰ群土器（第16図1～189）

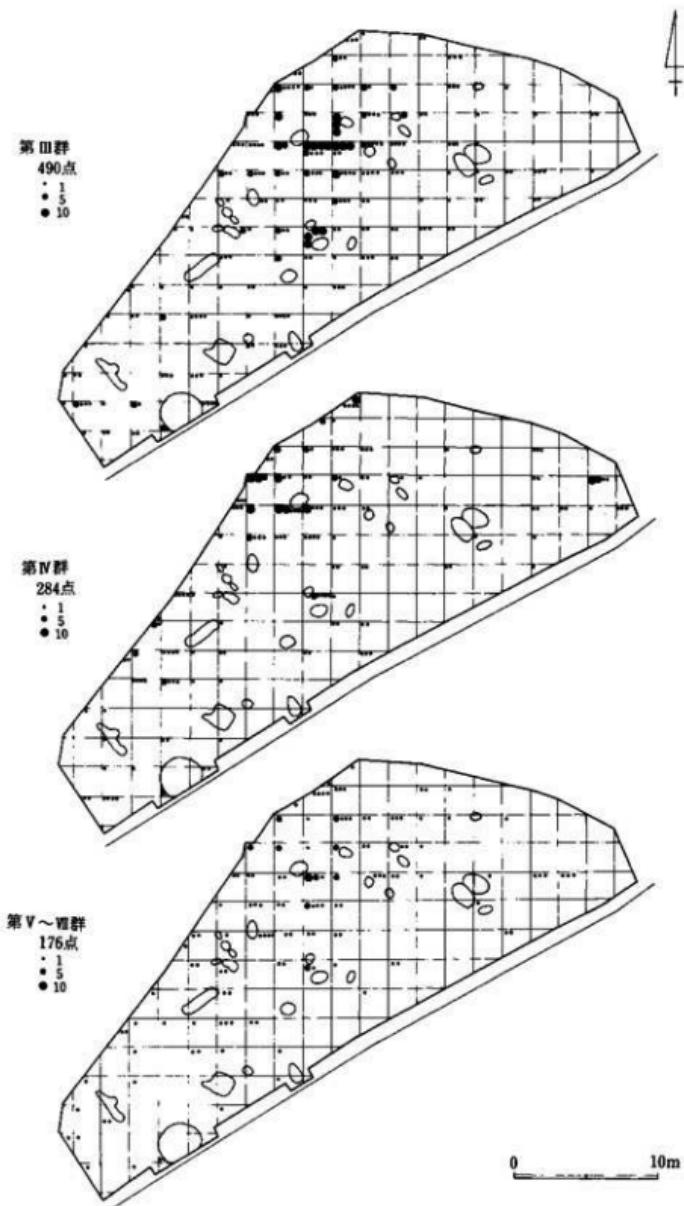
早期の沈線文系土器と考えられる土器を一括する。沈線文系土器は三戸式土器・田戸下層式土器・田戸上層式土器とに分けられ、その名の通り沈線を主体文様として文様帯を構成するものである。

第1類（1～6）

三戸式土器である。出土総数6点である。三戸式土器にはその文様要素が細沈線文・太沈線文・条痕文等があるが、本遺跡からは細沈線文土器と条痕文土器のみが出土した。



第14図 包含層出土繩文土器分布図(1)



第15図 包含層出土縄文土器分布図(2)

1種（1，2）

細沈線文を施すものである。1は口縁部の破片で、口唇部形態が角頭状を呈する。胎土には砂粒子を多く含み焼成が良好である。器面の調整はミガキである。文様は口縁部直下から横位平行細沈線を巡らす。2は口縁部直下の破片である。文様は1と同様・横位平行細沈線である。胎土に砂粒子を多く含み、器面の調整はミガキである。

2種（3～6）

3～6は条痕文を施すものである。条痕文土器の文様には格子目のものが多く、その他に斜位のものや横位のものが認められる。また、口唇部形態は内そぎ状を呈するものが多く、口唇部にはキザミが施される場合が多い。3～6は全て胸部の破片で、口唇部形態等は不明である。胎土には砂粒子の他、スコリア粒子をやや多く含んでいる。文様は4にみられる様に格子状文を施すものである。

第2類（7，8）

田戸下層式土器に含まれるものである。出土総数2点である。7は胸部の破片で、刺突文と沈線文が認められる。刺突文は■状の刺突である。沈線は横位に太沈線を巡らし、太沈線間に斜位細沈線を用いて綾杉文を作出する。8は口縁部の破片で、口唇部形態が外そぎ状を呈する無文土器である。胎土・調整等から本類と考えられる。

第3類（9～189）

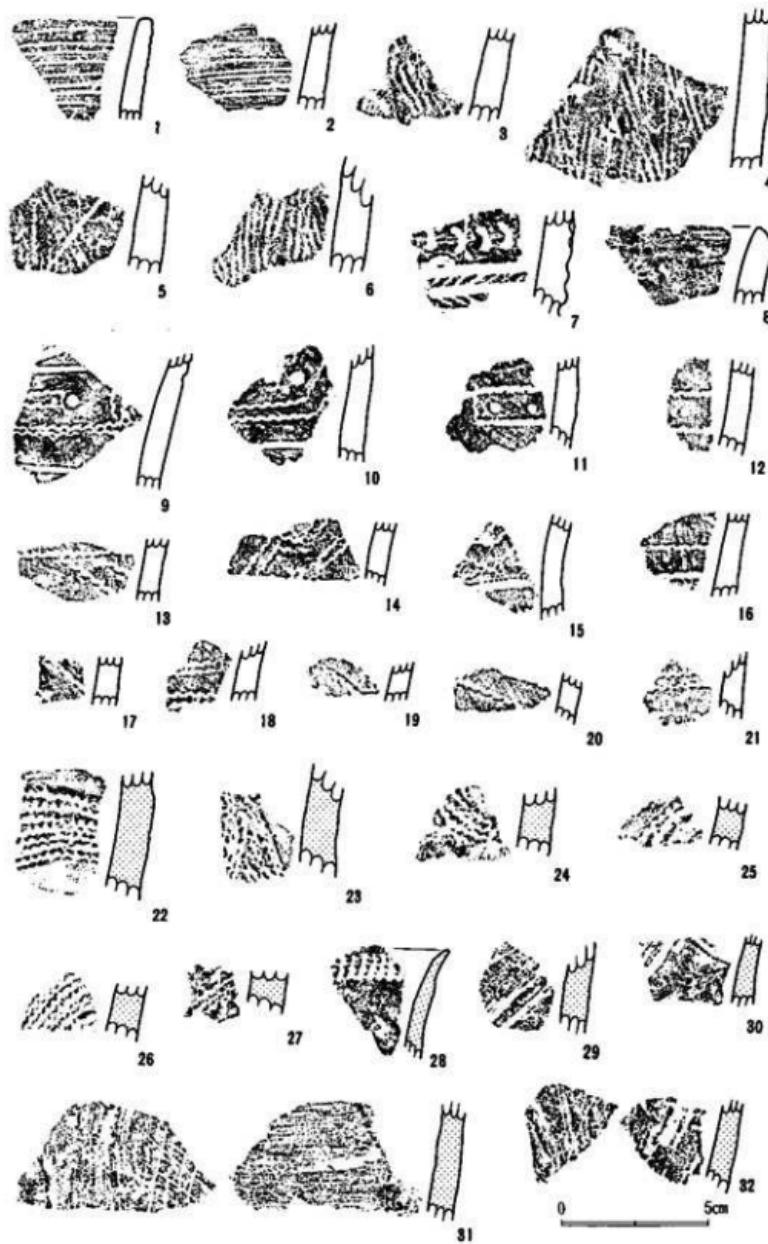
田戸上層式土器に含まれるものである。出土総数1737点である。文様は貝殻腹縁文・沈線文・刺突文等で構成される有文土器と無文土器に分けられる。胎土に砂粒子を含むものと微量の植物纖維を含むものがある。有文土器は貝殻文・刺突文・沈線文を施すもの、貝殻文を施すもの、沈線文を施すものの3種に分けられる。本遺跡の田戸上層式土器の有文土器は、貝殻文を主体的な文様としている。

1種（9～21）

9～21は同一個体である。口縁部や底部の破片が無いため器形・口唇部形態等不明である。また、破片が細片である事と破片数が少ないため全体的な文様の構成を窺う事ができない。胎土は砂粒子を多く含み、焼成が良好である。器面の調整は内外面共にミガキで、丁寧な調整を呈す。文様は貝殻腹縁文・細沈線文・刺突文が認められる。9・10は3つの文様要素を持つものである。9にみられる様に細沈線文間に貝殻腹縁文による区画を施し、部分的に円形刺突文を施しているものもある。11・12は貝殻腹縁文による区画内に刺突文を施す。15・16には貝殻腹縁文と細沈線文が施される。その他は貝殻腹縁文が施されている。これらの文様は規則的に施文されているものである事が細片の中から窺うことができる。

2種（22～28, 33）

22～27は同一個体である。1種土器と同様口縁部や底部の破片が無いため器形・口唇部形態



第16図 包含層出土繩文土器(1)

等不明である。また、破片が細片である事と破片数が少ないため全体的な文様の構成を窺う事ができない。胎土には微量の植物繊維・軽石の様な軟質の微粒子・スコリア粒子を含み、焼成はやや良好である。器面の調整は内外面共にミガキである。文様は貝殻腹縁文のみである。22にみられる様に幅の広い隆帯状の盛り上がりを作出する。その隆帯状の盛り上がりは全体的に幾何学文を構成していると考えられ、その上に貝殻腹縁文を施している。23の様に貝殻腹縁文を山形状に施す部分もある。28は口唇部形態が尖頭状を呈し、口縁部が若干外反する。胎土には微量の植物繊維を含む。文様は口縁部直下に幅2cmの貝殻腹縁文を巡らすものである。33は器形を窺うことができる資料である。口唇部形態が尖頭状を呈し、口縁部から胸部・底部へと移行する砲弾型を呈すると考えられる。口径25.5cmを測る。胎土には植物繊維を微量に含んでいる。内外面の調整はナデによるもので粗い調整がなされている。文様は口縁部直下に貝殻背圧痕文を2段に巡らしている。貝殻背圧痕文はその施文が浅く、また、口唇部にも貝殻背圧痕文を施している。子母口式土器に類似するが、本遺跡の土器の特徴から田戸上層式土器として捉えたい。

3種 (29~32)

29~32は沈線文を文様としているものである。何れも胸部の破片で口唇部形態・器形等は不明である。胎土には微量の植物繊維を含む。調整は内外面共にナデによるものである。文様は直線的なもの (29・32) と波状のもの (30) と格子目状のもの (31) がある。

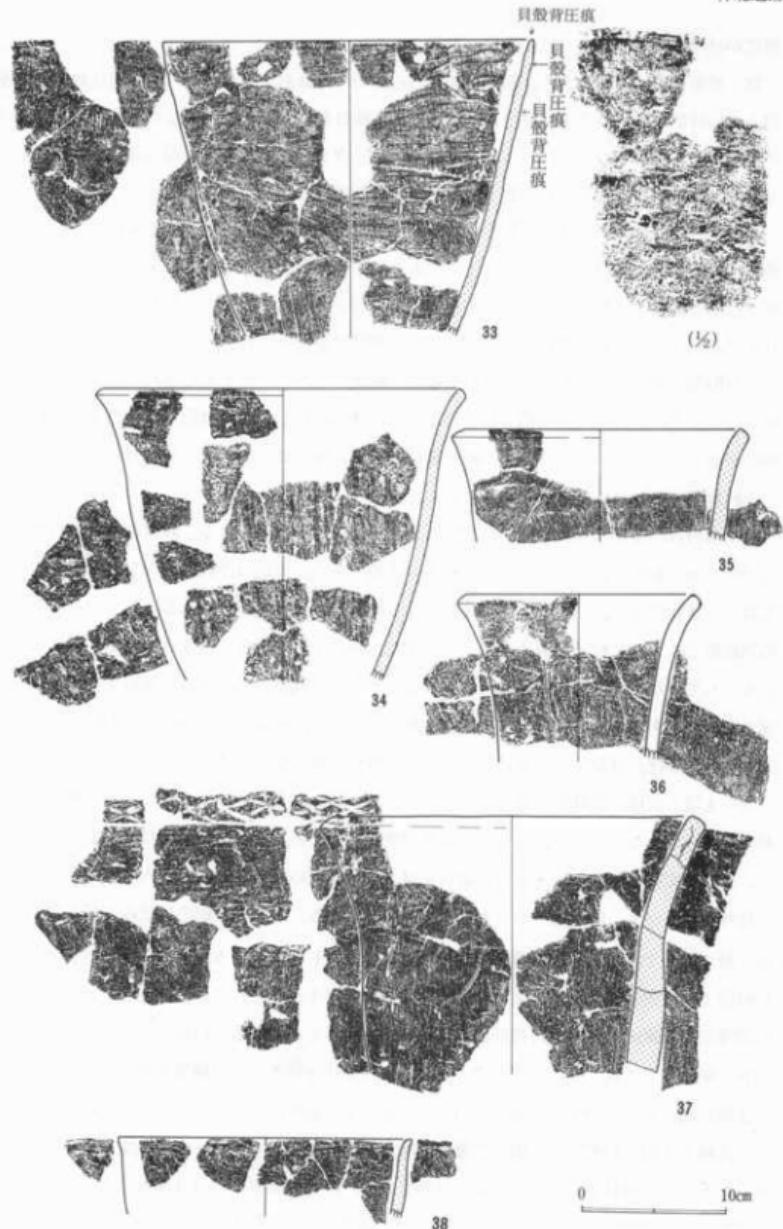
4種 (34~189)

田戸上層式土器の範疇に含まれる無文土器を一括する。文様が口唇部のみに施されているものもあるが胸部に文様が無いため無文土器として取り扱うことにする。出土総数1691点で全体の約59.4%を占める。推定復元が可能なものは遺構出土土器を含めて20個体である。本群の土器の特徴は文様が口唇部に集約されているため、専ら器形・口唇部装飾・土器の調整によって分類しなければならない。本報告では器形に主眼を置き分類するものである。胸部破片については器形が不明の場合が多いため一括して取り扱う。

a. (34~37, 50~63)

口縁部は平縁で外反する。頸部から胸部にかけて緩やかな膨らみを持ちながら底部に至る砲弾形を呈する深鉢形土器である。底部は確認されていないのでどのような形を呈するか不明である。推定復元が可能なものは、008号焼土跡・017号焼土跡・020号土壙から出土した3個体の他、包含層から出土した4個体があげられる。

34：器形は口縁部が外反し、胸部で膨らむ砲弾形の深鉢形土器である。推定口径約25.5cmを測る。口唇部形態は外そぎ状を呈し、口唇部の装飾はない。胎土中には砂粒子が多く混入されており、微量の植物繊維が含まれる。また、スコリア粒子の混入も目立つ。器面の調整は内外面共にミガキである。外面は口縁部直下で横方向、胸部で縱方向である。内面は口縁部から胸



第17圖 包含層出土繪文土器(2)

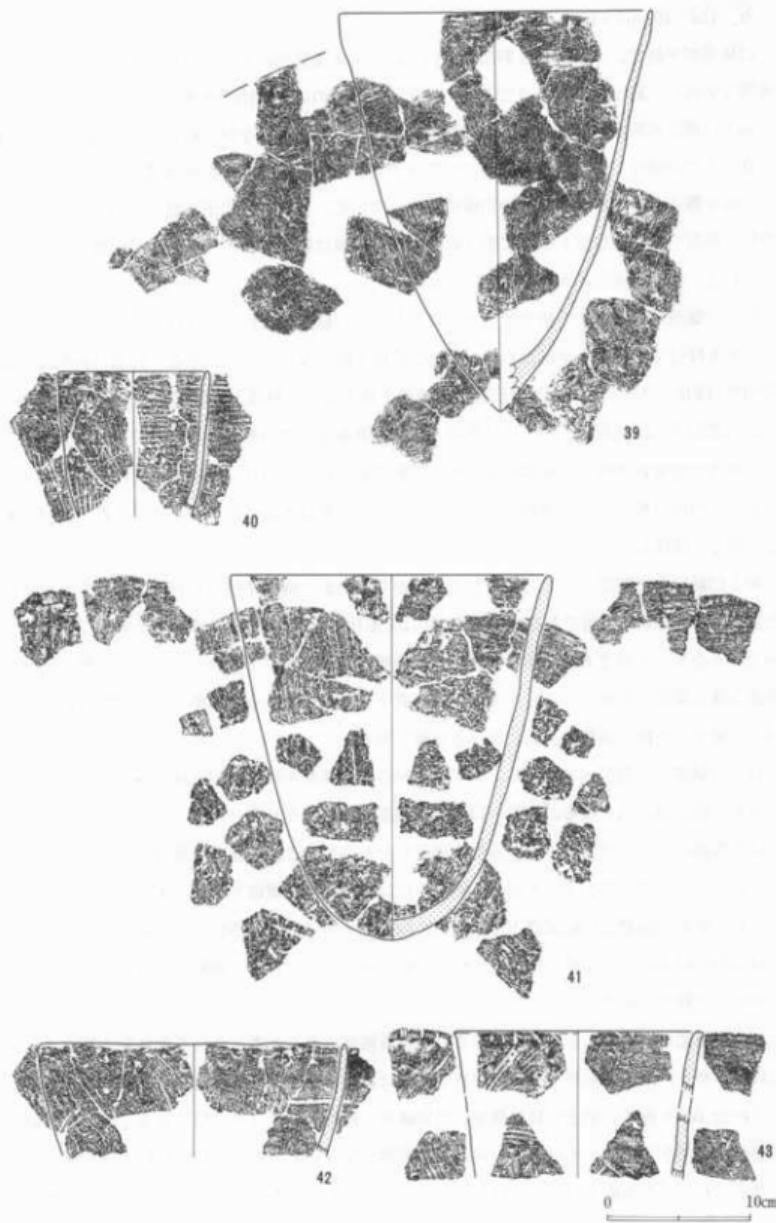
部にかけて横方向である。比較的雑な調整である。

35：器形は口縁部が外反し、胴部で膨らむ砲弾形の深鉢形土器である。推定口径約20.5cmを測る。口唇部形態は外そぎ状を呈し、口唇部の装飾はない。胎土には微量の植物纖維とスコリア粒子の混入が目立つ。34にみられた砂粒子は多く含まれていない。器面の調整は内外面共にミガキである。内外とも口縁部直下で横方向、胴部で縦方向である。

36：器形は口縁部が外反し、胴部の底部寄りの部分で僅かな膨らみを持つ深鉢形土器である。推定口径約16.7cmを測るやや小形な土器である。口唇部形態は外そぎ状を呈し、口唇部には外面と内面とにキザミを有する。胎土にはスコリア粒子の混入が著しく、砂粒子もやや多く含まれるが、34ほど多く混入されていない。器面の調整は器面の荒れが著しく判断が難しいが、外面には胴部に砂粒子の移動による擦痕が縦位に観察でき、ケズリと考えられる。また、胴下半部にはミガキによって擦痕が消されている部分が認められる。内面は胎土中に含まれる粒子の移動が認められず、一部にミガキの跡も確認できる。外面は一部に炭化物の付着が認められ、二次的焼成を受けているものと考えられる。

37：器形は口縁部が外反し、胴部で膨らみを持つ深鉢形土器である。断面の厚さが口縁部付近で約1cm、胴部で約2cmといへん厚手の土器である。推定口径約26.5cmを測る。口唇部形態は外そぎ状を呈し、口唇部上には沈線による格子目状の文様が施される。胎土中には微量の植物纖維とスコリア粒子の混入が目立つ。また、砂粒子がやや多く含まれているが34ほど多く混入されていない。器面の調整は内外面共にミガキで、調整の方向は口縁部直下で横方向・胴部で縦方向である。たいへん丁寧な調整を施しているが、外面に比べ内面の調整は雑である。

50～63：口縁部が外反する土器の破片である。器形を窺う事のできるものはないが、おそらく、上記の土器と同様、深鉢形土器と考えられる。50～53は胎土に砂粒子を多く含み、植物纖維の混入が認められないもので、口唇部の装飾が無いものである。口唇部形態は50が外そぎ状を呈し、51は尖頭状を呈し、52・53は角頭状を呈する。器面の調整は50～51は内外面共にミガキで、53は外面がミガキ、内面はナデによるものと考えられる。内面には刷毛目状の工具を用いて調節を持つものである。54は口唇部上に棒状の工具を押し付けたようなキザミが施される。55は口唇部上に貝殻背圧痕文を施文する。内外面共にミガキがなされている。56～63は土器の胎土に微量の植物纖維を含み、口唇部の装飾が認められるものである。口唇部の形態は57・61が丸頭状、60が外そぎ状、62が尖頭状で、その他は角頭状を呈する。口唇部の装飾は56が格子目状の沈線が施される。58・59は横位・斜位の沈線による装飾を施す。60は斜位の結節沈線文・縦位の沈線文・円形刺突文等を用いて幾何学的な文様を構成している。63は刺突による装飾が認められる。その他は全てキザミによる装飾である。器面の調整は57は外面がミガキ、内面がナデである。その他はナデによるもので58・59に顕著に認められる。



第18圖 包含層出土繩文土器(3)

b. (38~46, 64~100)

口縁部が平縁で、口縁部から胴部へ直行し、そのまま底部に至る深鉢形土器である。底部は鈍角な尖底と丸底とがあるようである。復元可能なものは9個体である。

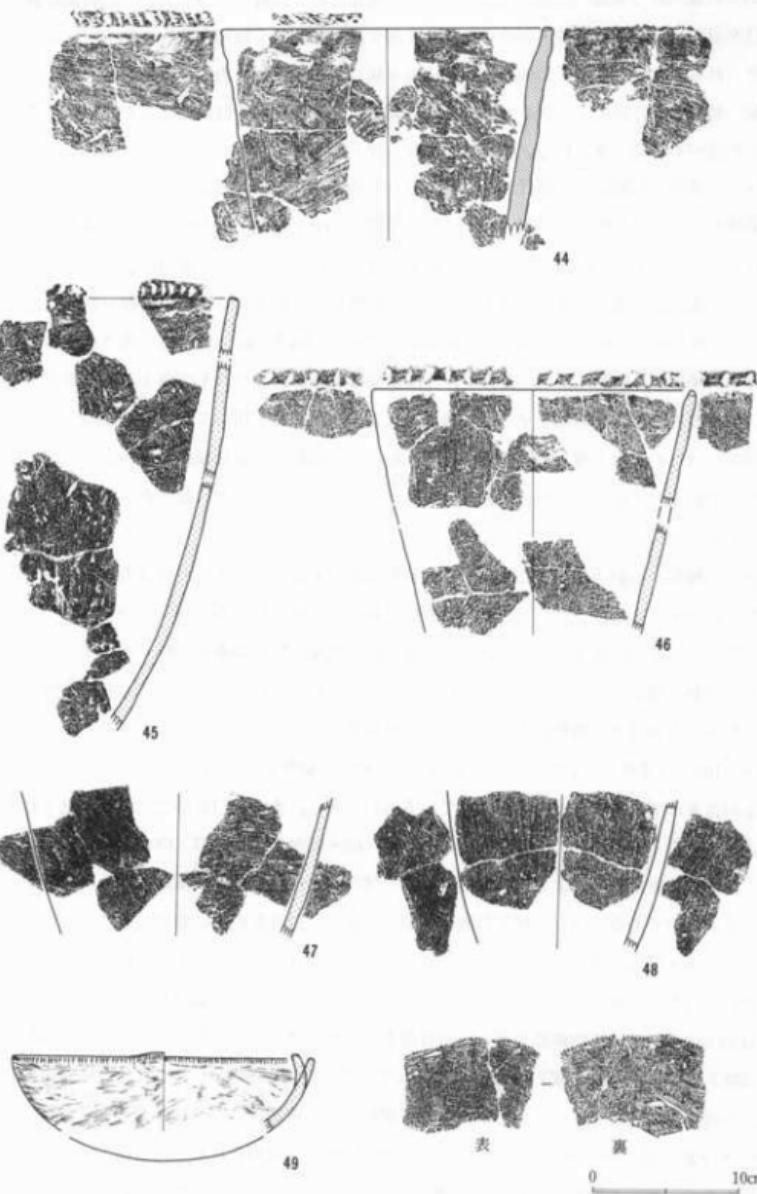
38：口唇部形態が角頭状を呈し、口縁部から胴部へと直行しながら底部へと移行する。口縁部直下までの破片しかないと底部の形態等不明である。口唇部の装飾は認められない。口径20.5cmを測る。胎土には微量の植物纖維を含んでいる。また、砂粒子の混入が目立つ。器面の調整は外面が浅い擦痕文が縦位に施される。この擦痕は刷毛目状の工具を用いて調整したと考えられる。内面は横位のナデ調整がなされる。

39：口縁部から底部まで接合できた資料である。口縁部が直行し、口縁部から胴部にかけてそのまま移行する。胴下半部からは緩やかな湾曲を持ちながら底部に至る。底部は鋭角な尖底で角度は約80°である。口唇部の形態は尖頭状を呈する。口唇部上の装飾はない。口径約22.0cm、器高約27.5cmを測る。胎土には微量の植物纖維を含んでいる。また、砂粒子の混入が目立つ。器面の調整は外面が口縁部直下で横位、胴部から底部にかけては縦位、底部は横位にナデによる。内面は横位にナデ調整がなされる。内面の調整は外面に比べるとかなり難で擦痕が顕著に残る。焼成の良好な土器である。

40：口縁部から胴部へと直行し、胴下半部から緩やかな湾曲を持ちながら底部に至る深鉢形土器である。底部は不明である。口唇部形態は尖頭状を呈し、口唇部上に装飾がない。口径10.5cmを測る小形な土器である。胎土中には微量の植物纖維と砂粒子を含んでいる。調整は外面は器面全体に条痕文を縦位に施した後、口縁部直下をミガキによって調整する。内面は横位の条痕文を施す。内面の調整は外面に比べると難である。

41：口縁部から胴部へと直行し、胴下半部から急な湾曲を持ちながら底部に至る深鉢形土器である。底部は丸底となる。なお、口縁部・胴部・底部はそれぞれ接合しなかったので口縁部の径と底部および底部直上の径から推定復元したものである。口唇部形態は丸頭状を呈する。口径約22.5cm、器高約25.0cmを測る。胎土中には微量の植物纖維と砂粒子・スコリア粒子を多く含む。外面の調整は口縁部直下で横方向、胴部でケズリによる調整がなされている。内面は口縁部から胴部にかけて横方向、底部付近で縦方向のケズリによる調整がなされる。内外共に砂粒子の移動が顕著に残り擦痕が著しい。

42：口縁部から胴部へと緩やかな膨らみを持ち底部に至ると考えられる深鉢形土器である。口縁部がやや内湾する形態をとる。口唇部形態は尖頭状を呈し、口唇部の装飾は認められない。口径約22.0cmを測る。胎土中には微量の植物纖維と砂粒子・スコリア粒子を多く含む。外面の調整は口縁部から胴部にかけて斜方向のナデ調整がなされている。これは砂粒子の移動が顕著に認められないので刷毛目状の工具を用いて施されたものと考えられる。内面の調整は横方向のナデである。



第19圖 包含層出土攔文土器(4)

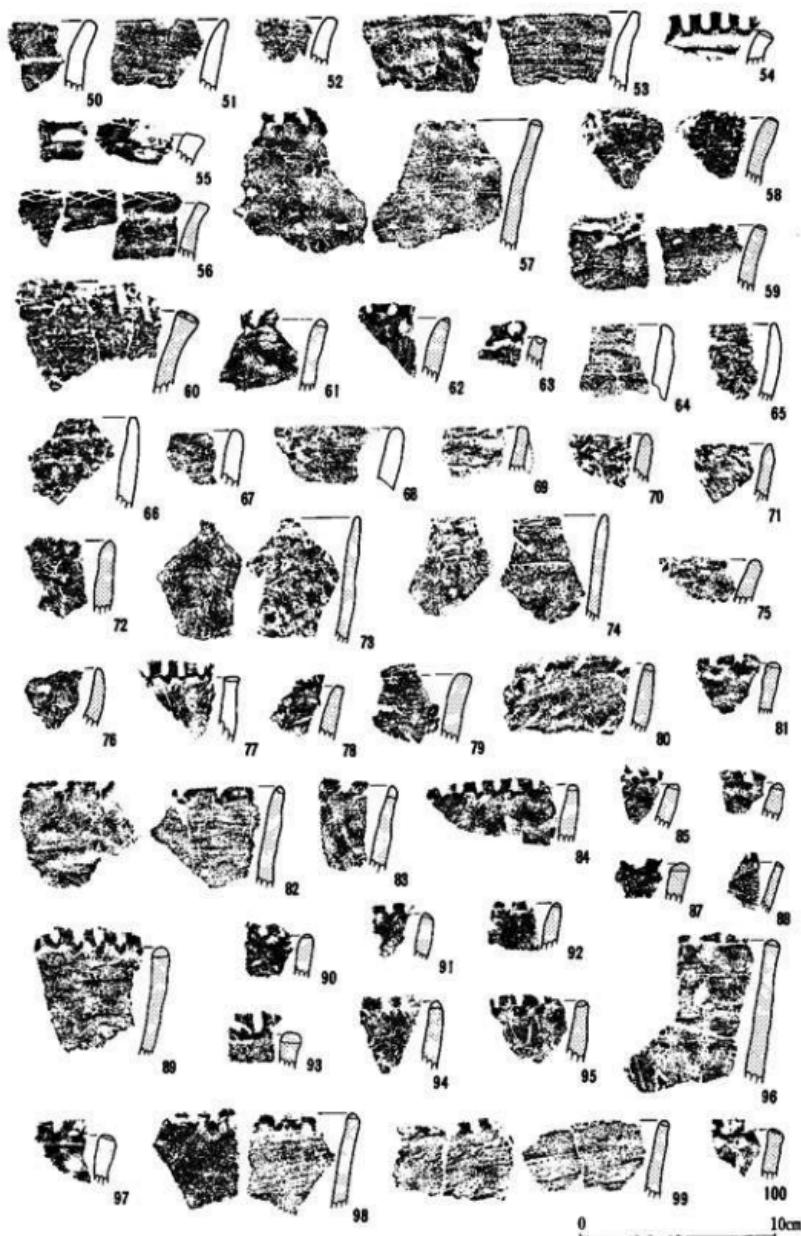
43：口縁部から胴部へと直行し底部に至ると考えられる深鉢形土器である。口唇部形態は丸頭状を呈し、口唇部に縦位・斜位のキザミを施す。このキザミは規則正しく施されるものと考えられる。また、キザミの他、貝殻背圧痕を施している。口径約17.5cmを測る。胎土中には微量の植物纖維と砂粒子が含まれる。外面の調整はナデで、刷毛目状の工具を用いたと考えられる擦痕が不規則に施される。内面は丁寧なミガキである。

44：口縁部から胴部へと直行し、底部に至ると考えられる深鉢形土器である。口唇部形態は角頭状を呈し、口唇部上にキザミを施す。口径約23.0cmを測る。胎土中には植物纖維をやや多く含んでいる。また、砂粒子・スコリア粒子の混入も目立っている。器面の調整は外面がナデである。また、一部には刷毛目状工具を用いて調整したと考えられる浅い擦痕が斜位に認められる。内面は刷毛目状工具の擦痕が口縁部直下で横位に縦位に施されている。

45：口縁部から胴部にかけて直行し、底部に移行するに従って若干湾曲する深鉢形土器である。口唇部の形態は角頭状を呈し、口唇部上にはヘラ状工具を用いて刺突文を連続させる。破片が少ないため器形の復元は出来なかった。胎土中には微量の植物纖維を含み、スコリア粒子の混入が目立つ。器面の調整は内外面共にミガキであるが、外面の口縁部直下の一部分はケズリである。

46：口縁部から胴部にかけて直行する深鉢形土器である。口唇部の形態は丸頭状を呈し、口唇部上にはキザミが施される。キザミは縦位と斜位が認められ、規則正しく施されているものと考えられる。口径約22.5cmを測る。胎土中には微量の植物纖維と砂粒子が含まれている。器面の調整は外面がナデによって行われ、一部に刷毛目状工具を用いたと考えられる擦痕が認められる。内面はナデ調整によるもので、口縁部直下の一部分にケズリの跡を残している。

64～100：口縁部から胴部にかけて直行する土器の口縁部破片である。64～68は胎土中に植物纖維が含まれず、砂粒子が多く含まれているものである。また、口唇部上に装飾が施されていないものである。口唇部の形態は64が外そぎ状、65・66が尖頭状、67・68が丸頭状を呈している。器面の調整はナデによるものである。69～76は胎土に微量の植物纖維を含み、口唇部に装飾がないものである。69は口唇部形態が角頭状を呈し、口縁部直下に瘤状の貼り付けがなされている。70・75は口唇部形態が丸頭状を呈する。その他は尖頭状を呈する。器面の調整はナデ調整によるものが多く、73・74に特に顕著に認められる。76は口縁部が若干内湾ぎみとなる。77は胎土中に微量の植物纖維を含み、口唇部上に装飾が認められるものである。口唇部形態は角頭状を呈し、口唇部に縦のキザミが施されている。78～100は胎土中に微量の植物纖維を含み、口唇部上に装飾をもつものである。口唇部形態は、角頭状のもの（78・79）・丸頭状のもの（80・81・84～87・89～99）・外そぎ状のもの（88・100）が認められる。口唇部の装飾はキザミが最も多く、キザミの施し方も一定の規則によっているものと考えられる。78・79は貝殻背圧痕を口唇部上に施している。84は器面の調整が内外面共にミガキである。98は器面の調整が内



第20図 包含層出土縄文土器(5)

面がナデ、外面がミガキである。その他は内外面共にナデによる調整がなされている。特に82に顕著なナデ調整を窺うことができる。

c. (49)

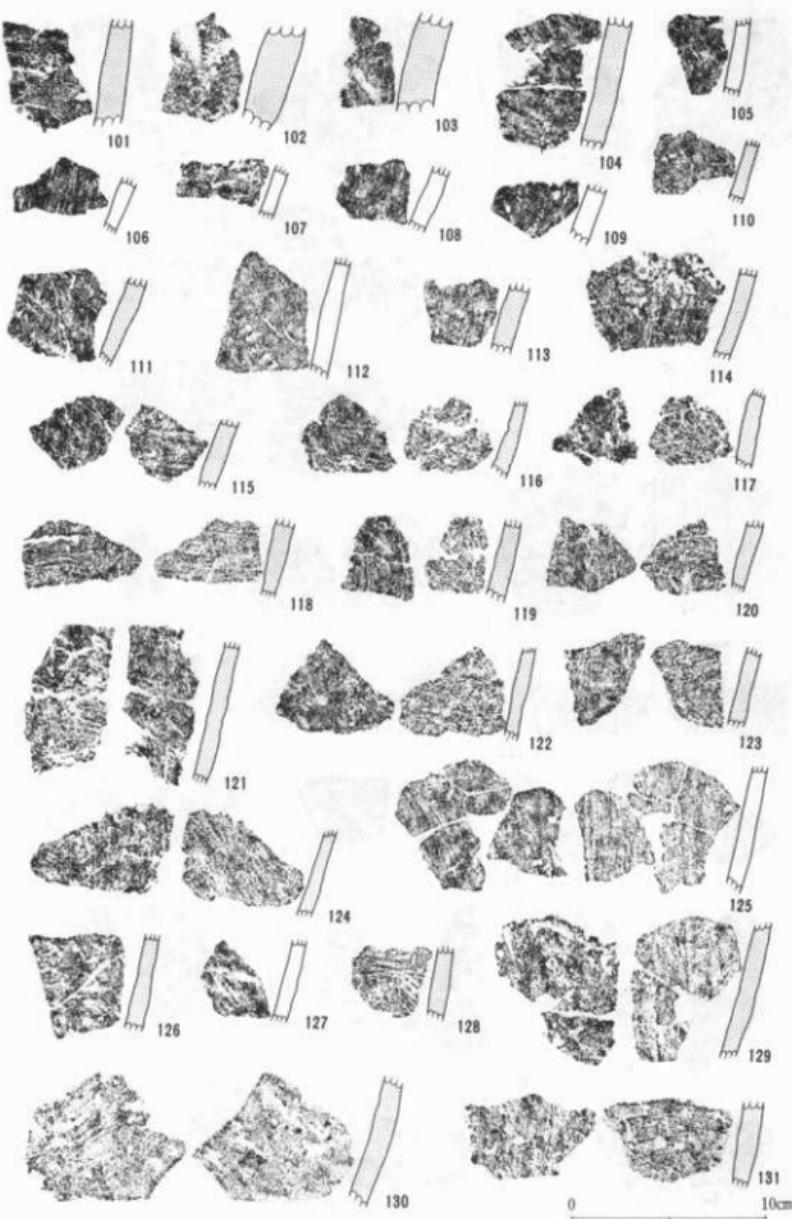
浅鉢形土器である。本遺跡から出土したのは49にみられる土器1個体である。口縁部が内湾し、胸部で大きく屈曲しそのまま底部に至ると考えられる。底部は無いため丸底となるかは不明である。破片からの推定でしかないが、口縁部の径と胸部の屈曲から浅鉢形土器(椀形土器)と考えた。口唇部形態は角頭状を呈し、口唇部内外に細かなキザミを施している。また、口縁部の一部に指頭等によって内側に内湾させる部分がある。胎土には微量の植物纖維を含む他、スコリア粒子・砂粒子の混入が目立つ。器面の調整は内外面共に刷毛目状工具によるナデが行われる。器面に擦痕が顕著に認める事ができる。

d. (46, 47, 101~189)

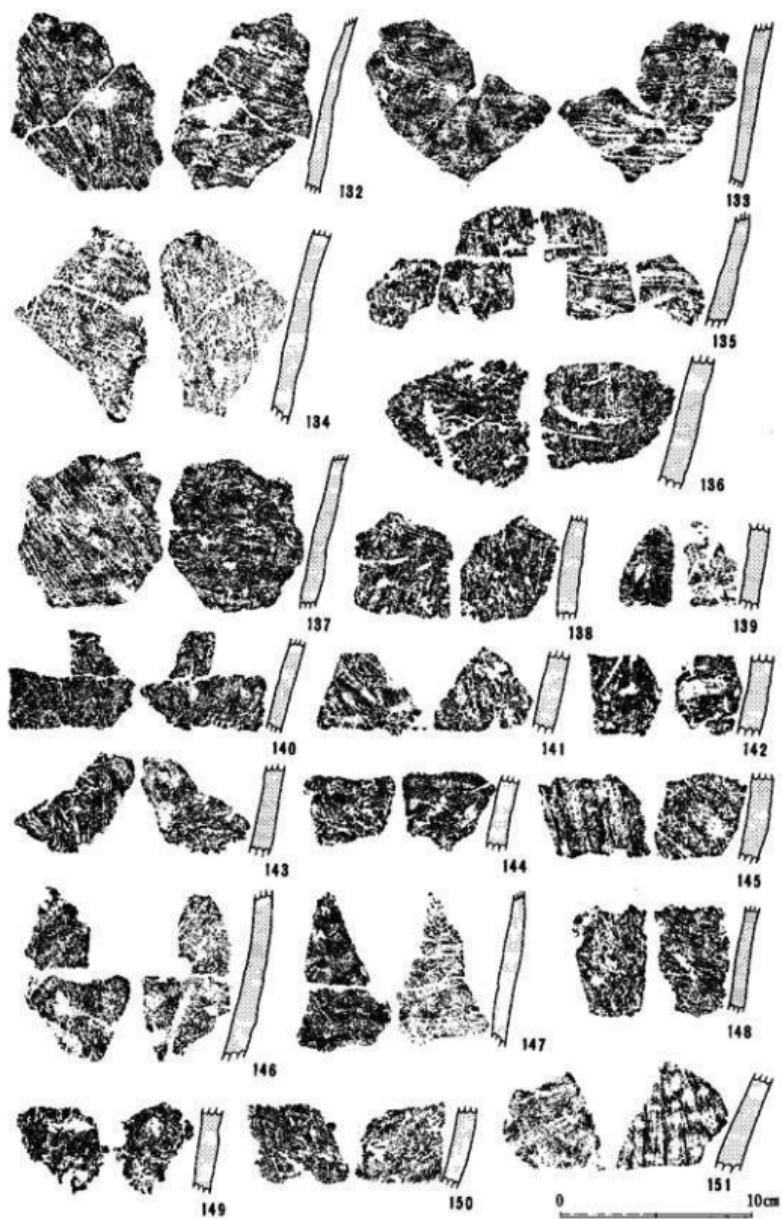
第1種土器・第2種土器の胸部破片及び底部の破片を一括する。口唇部形態や器形が不明であるため、器面の調整に主眼を置き分類した。101~114は内外面共にミガキが施されるものである。101~104は断面が非常に厚い。105~110は胎土に植物纖維が含まれていない。47,115~124は外面の調整がミガキで内面がナデのものである。全て胎土中に微量の植物纖維を含んでいる。125は外面の調整がミガキで内面がケズリのものである。胎土には植物纖維は認められず、砂粒子が多く含まれる。46,26~170は内外面共にナデによる調整がなされているものである。127には胎土に植物纖維が認められないがその他は全て微量の植物纖維を含んでいる。また、砂粒子の混入が目立つものが多い。132~151は内外面に刷毛目状工具による擦痕が顕著に認められる。171・172は外面の調整がナデによるもので、内面には貝殻条痕文が施されるものである。胎土には微量の植物纖維を含む。172の条痕はかなり深く施文されている。173~179は外面に条痕文が施され、内面はナデ調整がなされるものである。全て微量の植物纖維を含む。180~187は外面に条痕文を施すものである。188・189は底部の破片で188は丸底、189は平底風の底部である。底部はあまり出土していないため形態等不明な点が多い。

第II群土器（第24図190~220）

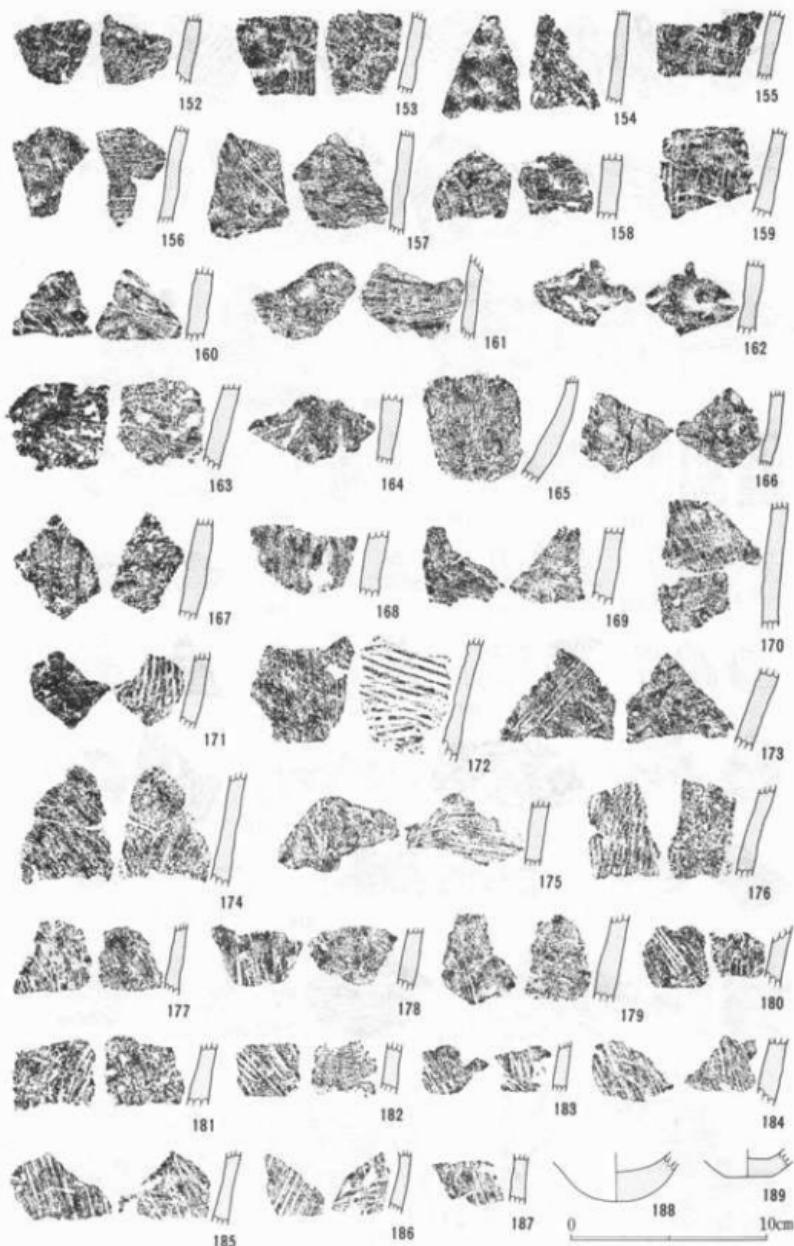
早期終末の条痕文系土器を一括する。文様が貝殻条痕文だけであるため型式の断定はできない。器形を窺う事ができるものは全く無く、全て破片である。これらは、本調査区域外のトレントより出土しており、第I群土器の分布と異なっている。190~220はすべて胎土中に植物纖維を多量に含み、内外面に貝殻条痕文を施すものである。190~193は口縁部の破片で、190には突起が付けられている。191は小波状口縁部で、貝殻条痕文も口縁部とは逆の波状文を施している。193は波状口縁部である。194~209は内外面に深い貝殻条痕文を施す。210~220は内外面の条痕が浅く、条痕の施文方向が一定ではない。



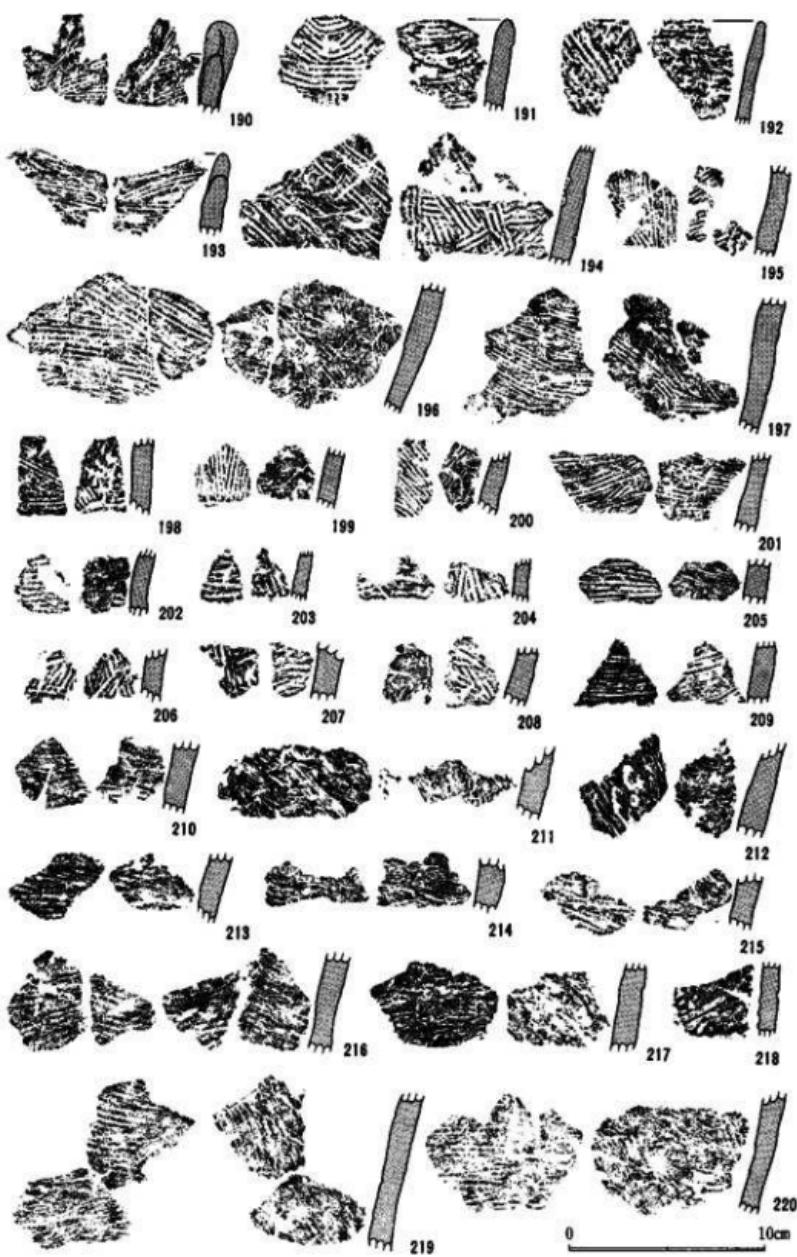
第21圖 包含層出土圓文土器(6)



第22図 包含層出土繩文土器(7)



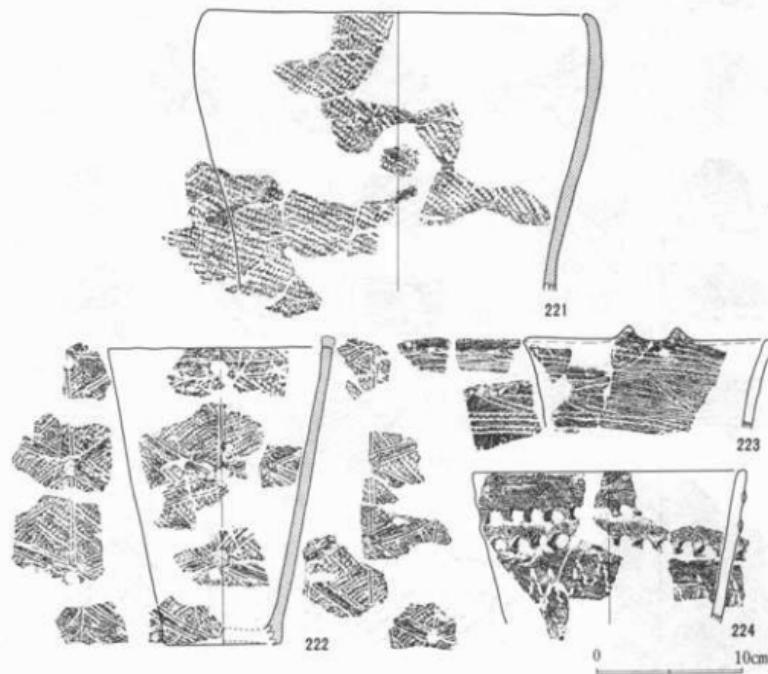
第23図 包含層出土繩文土器(8)



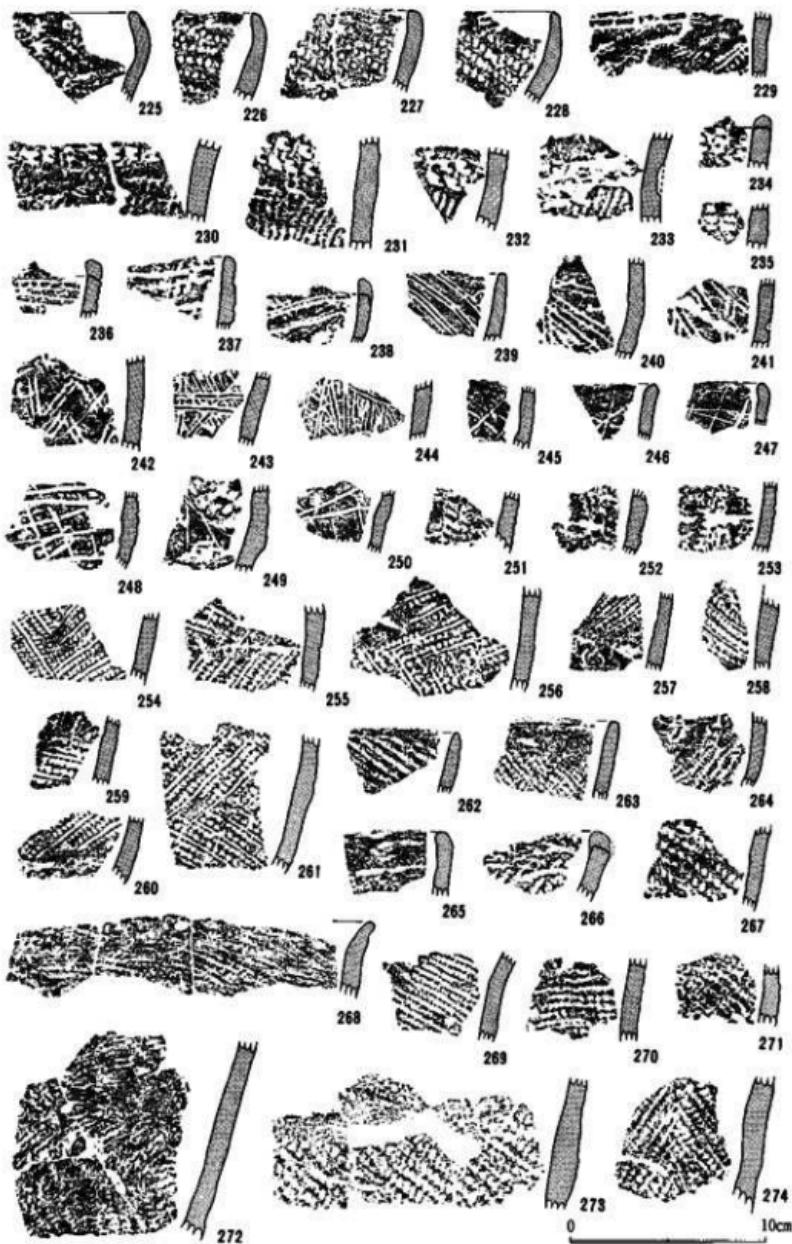
第24図 包含層出土縄文土器(9)

第III群土器（第25図221・222、第26図225～274）

前期前半の黒浜式土器を一括する。胎土に植物繊維を多量に含み、内面が丁寧に磨かれている。文様は縄文を地文として刺突文・半截竹管文・貝殻腹縁文等を施す。225～228は口縁部の破片で、単節縄文(RL)を地文として【状の刺突文が口縁部直下に巡らされている。222は地文として附加条縄文を施した後、半截竹管により口縁部に横位の平行沈線文を施し、器面全体を縦位分割する。できあがった分帯に2条1単位の沈線を稲妻状に施す。縦位の沈線との接点には指頭等による押捺がなされ、全体として幾何学的な文様を作出する。口径約15.5cmを測る。229は胴部の破片で半截竹管を押し引きして結節文を施している。230～233は胴部の屈曲部に【状の刺突文を巡らし、口縁部文様と胴部文様を区画する。234・235は口縁部直下に刺突文を施すものである。236～250は沈線文を施すものである。236・237は口縁部の破片で、半截竹管を結節させる。238～244は半截竹管により平行沈線文を施すものである。245～250は多截竹管による沈線文が施されている。251～253は貝殻腹縁文を施すものである。貝殻腹縁文は波状貝殻文を作出するものである。221、254～274は縄文のみが文様とされるものである。254～261は附加条縄文が器面に施され羽状縄文を作出している。254は縦位の羽状縄文で、その他は横位に施



第25図 包含層出土縄文土器



第26圖 包含層出土繩文土器(II)

文される。221は口縁部が内湾し、口縁部直下で最大径を持ち胴部へと移行する。口径約27.5cmを測る深鉢形土器である。262～274は単節縄文を施すものである。274は縦位の羽状縄文が施されるものである。

第IV群土器（第25図223・224、第27図275～314）

前期後半の竹管文系土器を一括する。型式的には浮島式土器・興津式土器・諸磯C式土器である。出土总数305点で、全体の約10.7%を占める。

第1類（223・224・275～285）

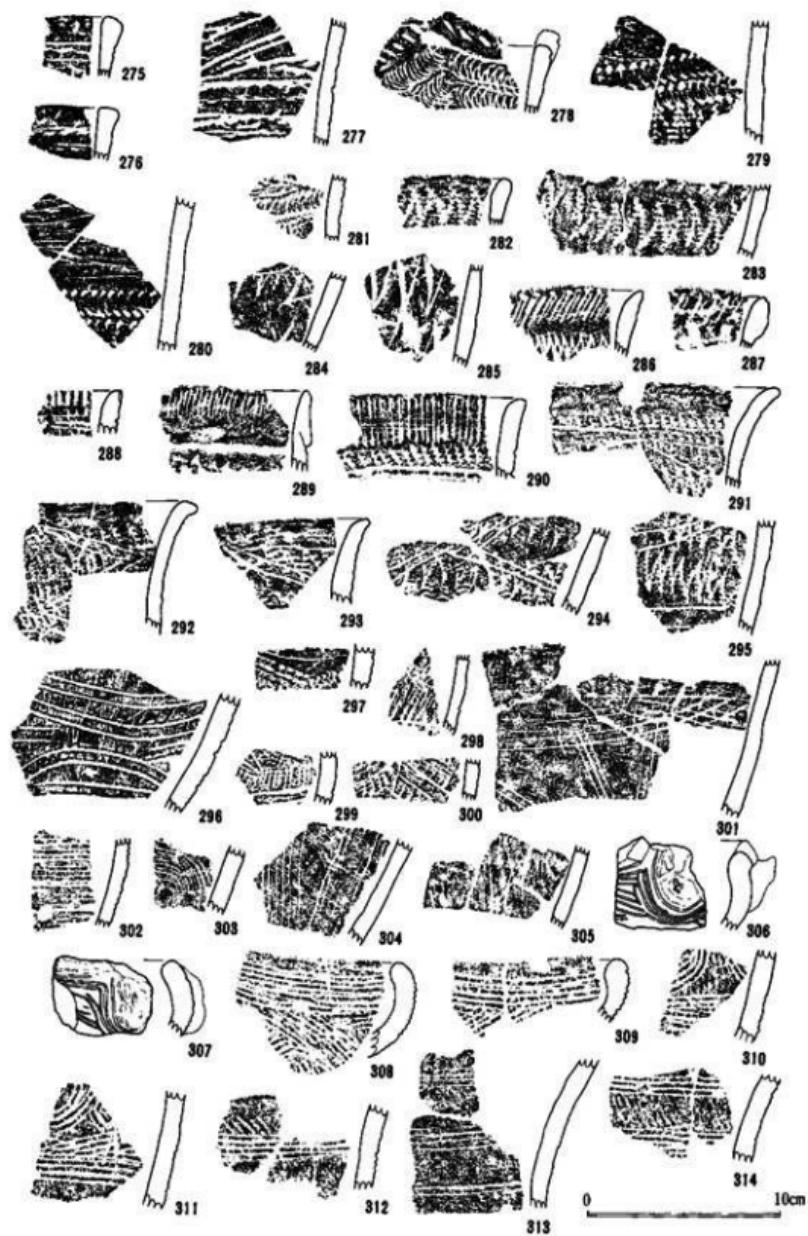
平行沈線文・変形爪形文・波状貝殻文等を文様要素とするものである。223・275～281は平行沈線文及び変形爪形文を施すものである。223は口縁部が外反し、口唇部に小突起を2つ施す深鉢形土器である。口径約17.5cmを測る。文様は口縁部直下と胴上半部に細い半截竹管によって変形爪形文を施し、区画された口縁部文様帯に同一の半截竹管によって平行沈線文を施すものである。275～277も変形爪形文と平行沈線文の組み合わせによって文様を作出する。278は波状口縁部の破片で、口縁部に沿って変形爪形文を波状に施す口唇部にはキザミが施される。279～281は平行沈線文・変形爪形文・波状貝殻文を組み合わせ文様を作出するものである。279・280は同一個体である。224は指頭圧痕と波状貝殻文との組み合わせによって文様を作出するものである。口縁部から胴部へと直行する器形を呈する深鉢形土器である。口径約19.0cmを測る。文様は口縁部直下に指頭圧痕を2段に施し、胴部はサルボウ・ハイガイ等の貝殻を用いた波状貝殻文を施す。282～285は波状貝殻文を施すものである。282は口縁部の破片である。これらは全て浮島II式土器の範疇に含まれるものである。

第2類（286～305）

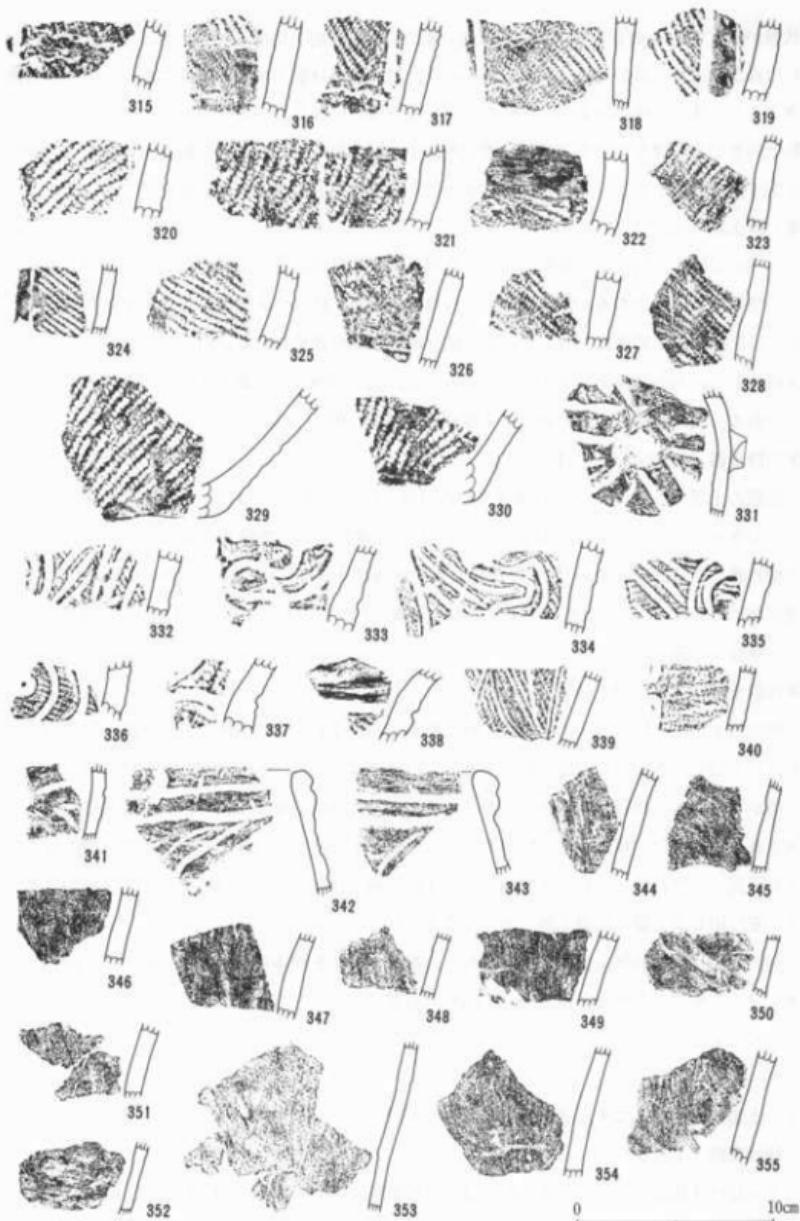
平行沈線文・貝殻腹縁文・条線文等を文様とするものである。286～290は口縁部直下に平行沈線による短沈線を施すものである。286は斜位の短沈線文と波状貝殻文を施す。288は太い短沈線と平行沈線文の組み合わせによるものである。290は縦位の短沈線文と貝殻腹縁文が施される。291～296は貝殻腹縁文及び波状貝殻文と平行沈線文の組み合わせによるものである。291～294は同一個体で口縁部が外反する形態をとる。296は波状貝殻文が浅く施文され、平行沈線文は深く弧状に施される。297～300は磨消貝殻文を用いるものである。沈線間の貝殻文は丁寧に磨り消されている。301～305は条線文を施すものである。条線文は櫛状工具を用いたと考えられる。302は横位の条線文が認められ、303は弧状となる。その他は縦横無尽に器面全体に施されると考えられる。これらは興津II式土器の範疇に含まれると考えられるものである。

第3類（306～314）

主体的な文様が半截竹管による平行沈線文のみのものである。306～314は同一個体である。口縁部が内湾し、所謂、キャリバー状を呈する深鉢形土器である。口縁部には部分的に貼り付けがなされ、306にみられる様に波頂部に獸面把手と思われるものを貼り付ける。土器の遺存



第27図 包含層出土繩文土器(2)



第28圖 包含層出土繩文土器(3)

状態が極めて悪く、破損しているが、貼り付け部分の中央に刺突文が4ヶ所に認められる。306～309は口縁部の破片、310・311は胴上半部の破片、312～314は胴下半部の破片である。これから推測すると全体の文様は地文として繩文を施文した後に口縁部直下に横位の半截竹管文を施し、胴上半部では曲線を多用する半截竹管文を施す。胴下半部では一定の間隔をもつ横位の半截竹管文を施すものである。これらは西関東に広く分布域をもつ諸磧C式土器と考えられる。

第V群土器（第28図315～330）

中期の土器を一括する。器形の窺える資料は022号住居跡出土の土器2個体だけである。その他は全て破片である。口縁部の破片は無く、胴部と底部の破片である。出土総数81点である。315～318は単節繩文（RL）を施す。燃紐の末端が認められる。317～320は縦位の沈線で区画された区画帯に単節繩文（RL）が施される。321～328は単節繩文（RL）のみが施されるものである。329・330は底部の破片で文様に単節繩文（RL）が施される。

第VI群土器（第28図331～341）

後期の土器を一括する。331は沈線文のみが施されているものである。クレーター状の貼り付けがなされている。332～340は繩文を地文として沈線によって曲線文を描くものである。339は半截竹管による沈線文であるが、その他は太い沈線によって文様を描く。336には同心円状の文様が認められる。これらは堀ノ内I式土器の範疇に含まれるものと考えられる。341は沈線文による綾杉文が施される。

第VII群土器（第28図342～355）

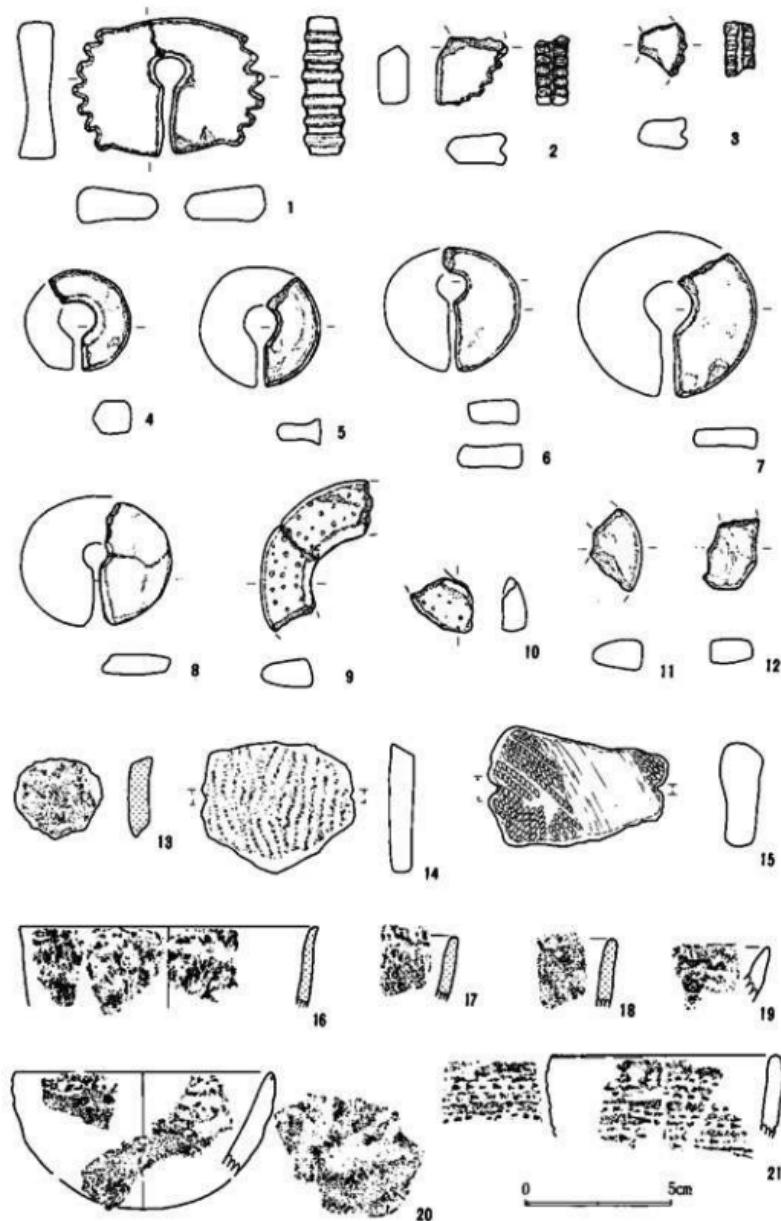
晩期の土器を一括した。出土総数92点である。342・343は同一個体で、口縁部に粘土紐の貼り付けを施し、外肥する口唇部形態をとる。口縁部は内湾し、胴上半部で最大径を持ち、胴下半部から底部へと移行する深鉢形土器である。胎土に砂粒子が多く含み、内外面共にミガキが施される。文様は口縁部直下の肥厚部分に太沈線を1条施す。口縁部と胴部の境には太沈線による区画がなされる。それ以下は斜位の太沈線が施される。器形・口唇部形態・文様から考えると安行IIIb式土器の粗製土器であると考えられる。

344～355は晩期の無文土器と考えられる。器形を窺える個体はなかった。胎土中に砂粒子が多く含み、焼成の良好な土器である。内面の調整は丁寧なミガキである。外面はミガキのものとナデによるものが認められる。350はナデによるものである。

3. 土製品およびミニチュア土器（第29図1～21）

抉状耳飾（1～12）

1～12は抉状耳飾である。平面形態は梢円形を呈するもの（1）円形を呈するもの（2～11）長方形を呈するもの（12）に分けられる。調整はたいへん丁寧なミガキである。1～3は周辺にキザミを施すものである。4は断面がかなり厚みを帯び、環状を呈する。9・10は同一個体



第29図 包含層出土土製品・ミニチュア土器

と考えられ、環状を呈し、表面・内面に刺突文が施される。その他は装飾が認められない。1は最大長4.75cm、最大幅6.60cm、厚さ1.20~0.70cm、重さ43.5gを測る。4は最大長3.35cm、厚さ1.10cmを測る。6は最大長4.1cm、厚さ0.8cmを測る。

土製円盤（13）

13は早期無文土器の破片を用いた土製円盤である。周囲は丁寧に磨いてはおらず、周囲を打ち欠いて円盤状に加工している。胎土に微量の植物纖維を含む。

土器片鱗（14・15）

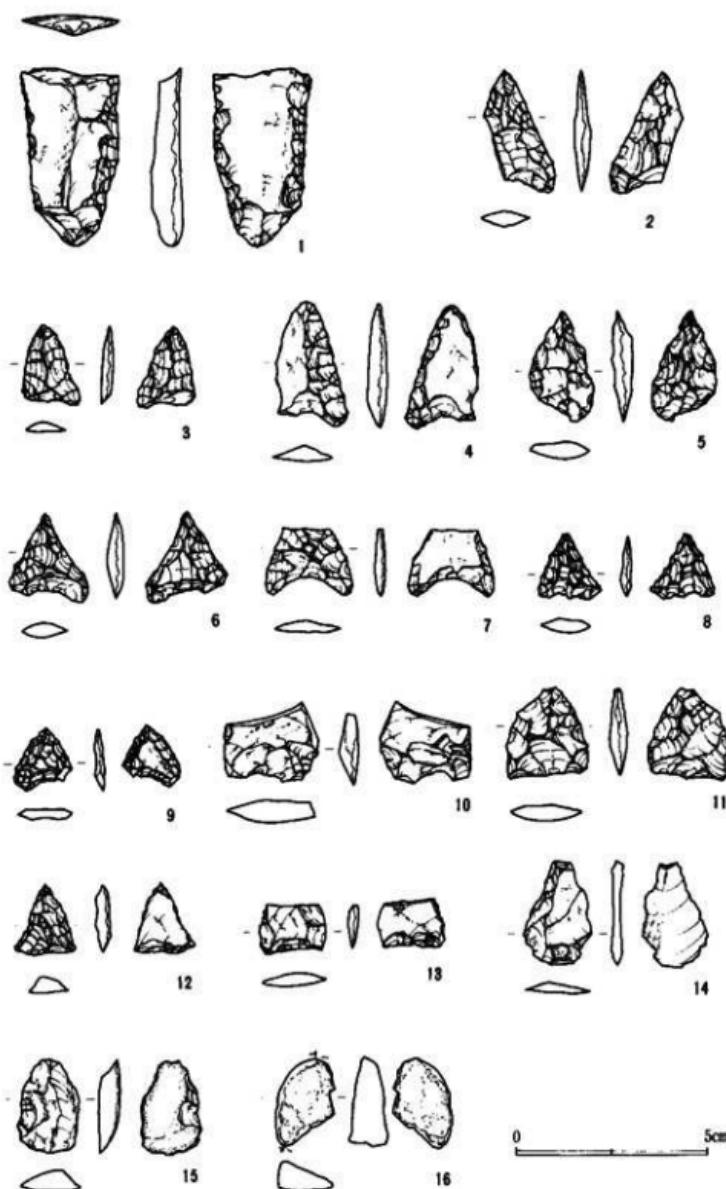
14・15は土器の破片を用いた土器片鱗である。14は土器の周囲を荒削りし、長軸にキザミを施すものである。長軸5.4cm、短軸4.4cm、厚さ0.85cm、重さ22.9gを測る。15は長方形を呈する。土器の周囲を荒削りし、長軸にキザミを施すものである。長軸6.2cm、短軸4.1cm、厚さ1.4cm、重さ35.6gを測る。両方とも中期の加曾利E式土器を用いている。

ミニチュア土器（16~21）

16~21は早期・前期のミニチュア土器である。16は胎土中に微量の植物纖維を含む。口唇部の形態が丸頭状を呈する。推定口径10.3cmを測る。17・18は細片のため推定復元ができなかつた。口唇部形態が丸頭状を呈し、口唇部上には細かいキザミが施される。土器の類似から第1群第3類4種土器と考えられる。19~21は胎土中に纖維を含まないミニチュア土器である。19は無文である。20は口唇部形態が尖頭状を呈し、口縁部直下に刺突文を巡らす。調整は粗く、ナデによっており、器面の凹凸が激しい。口径9.1cmを測る。21は口唇部形態が丸頭状を呈する。口縁部直下から半截竹管による結節沈線を器面全体に施す。推定口径8.0cmを測る。

4. 石器（第30図、1~16、第31図17~24）

本遺跡の調査区から出土した石器はスクレーバー1点、石鏃11点、石鏃未製品3点、滑石製品1点、礫器1点、磨石及び敲石7点である。その他に剝片や礫が出土している。剝片は石質が流紋岩・黒色緻密質安山岩・チャート・黒曜石・その他に分けられ、流紋岩・黒色緻密質安山岩の石材が大多数をしめる。これらの石材は石鏃の石材と共に共通し、石鏃の未製品や製作途中に破損したと考えられるものがあることから製作跡が存在した可能性が高い。本遺跡の石材の分布が前期の土器の分布とよく似た広がりを示している。また、礫は広く調査区に分布する傾向にあるが量が少なくまばらである。礫は全て焼成を受けて赤く変色し、脆いものになっている。焼土跡との関係が問題となろう。関東地方において縄文時代早期中葉の沈線文系土器群から焼礫が出土する傾向にある。例えば、戸場遺跡が良好な例と言えよう。スクレーバーは008号土壌から出土したものである。石鏃（2~15）は形態的には基部に抉りをもつ二等辺三角形のものが大部分を占める。また、先端部や翼部の一部が欠損しているものが多く、完形品は5・6・8・11だけである。5・6は翼部の一部が欠損したために再度加工が施されたものと考え

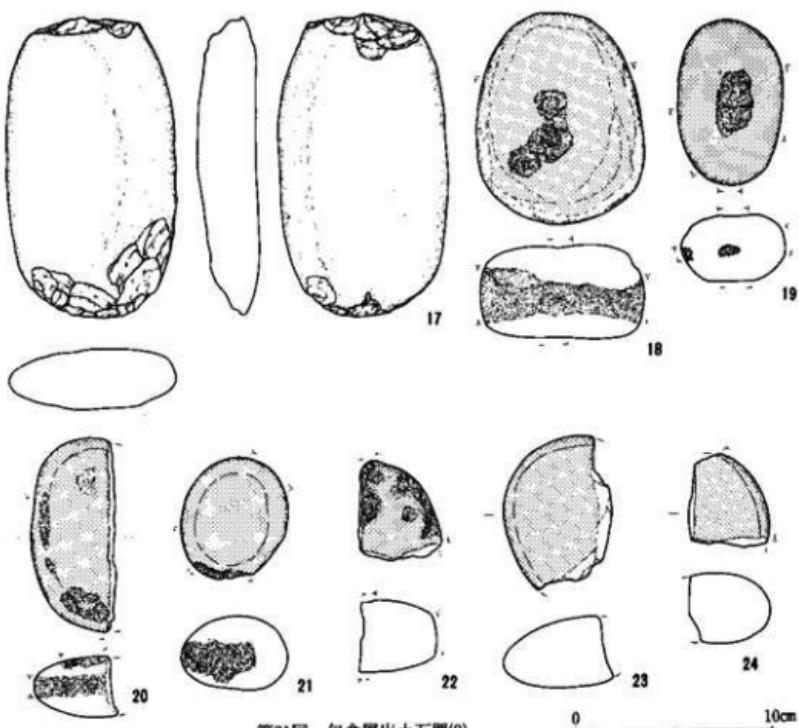


第30圖 包含層出土石器(1)

られる。滑石製品は欠損しており、また、穴が穿けられた形跡がなく不明であるが、垂飾品として用いられたものであろう。礫器は基部と刃部に簡単な加工を施したもので、側縁及び表裏面共に使用された形跡がなく自然面をそのまま残している。磨石及び敲石は完形品が2点と少なく、その他はすべて破片である。何れも表・裏面を磨石として用い、側縁を敲石として利用している。17・18には表・裏面の中央部に円形の凹部が残されている。21は一部の側縁を敲石として使用している。23・24は磨石としてのみ利用され敲石としての機能はない。詳細は観察表を参照していただきたい。

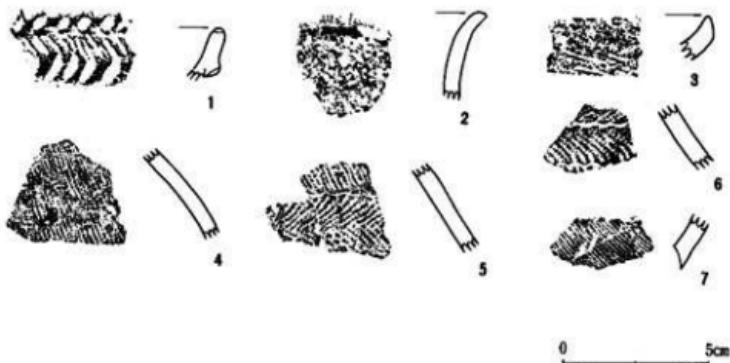
石器観察表

標	器種	法量(cm・g)			石材	調整	出土位置	番号	
		長さ	幅	厚さ					
1	スクレーパー	4.66	2.44	0.62	9.67	頁岩	底長の削片を用いて、両側縁部。及び、基部に加工を施す。先端部が欠損し、断面が三角形を呈する。地中より出土したものである。	008	0001
2	石 砕	3.41	1.34	0.4	1.82	安山岩	抉りが小さく、二等辺三角形を呈する。主要剝離面を残さず、調整が全面に及ぶ。最終的な調整は両側縁部に集中する。一方の翼部を欠損する。	N 5-9	0006
3	石 砕	2.06	1.47	0.33	0.72	流紋岩	主要剝離面を残さず、調整が全面に及ぶ。最終的な調整は両側縁部に集中する。基部を欠損する。	N 5-7	0003
4	石 砕	3.16	1.87	0.43	2.2	安山岩	抉りが小さく、二等辺三角形を呈する。主要剝離面を両面に残す。細部の調整は、図上左側右側縁に集中する。	N 4-21	0001
5	石 砕	2.78	1.62	0.56	2.22	チャート	抉りがなく、三角形を呈する。主要剝離面を残さず、調整が全面に及ぶ。最終的な調整は両側縁部。及び、基部に集中する。	M 5-15	0003
6	石 砕	2.07	1.97	0.45	1.29	流紋岩	抉りが小さく、不等辺三角形を呈する。主要剝離面を残さず、調整が全面に及ぶ。最終的な調整は両側縁部に集中する。	O 5-6	0005
7	石 砕	1.70	2.26	0.29	1.10	安山岩	抉りが小さく、二等辺三角形を呈する。裏面に主要剝離面を残す。先端部を欠損する。	19トレンチ	0003
8	石 砕	1.60	1.78	0.20	0.62	流紋岩	抉りが極めて小さく、不等辺三角形を呈する。主要剝離面を残さず。調整が全面に及ぶ。	N 5-1	0009
9	石 砕	1.71	1.54	0.25	0.59	黒曜石	抉りが小さく、正三角形を呈する。主要剝離面を裏面に残す。最終的な細部調整は、両側縁に集中する。一方の翼部を欠損する。	21トレンチ	0001
10	石 砕	1.88	2.46	0.63	2.90	流紋岩	抉りが極めて小さく、調整が基部のみに集中する。石器未製品と考えられる。	N 5-10	0001
11	石 砕	2.41	2.08	0.47	2.04	流紋岩	抉りが殆んどなく。調整は全面に及ぶ。細部の調整は殆んど行われていない。	N 5-2	0005
12	石 砕	1.78	1.55	0.58	0.98	黒曜石	正三角形を呈し、裏面に主要剝離面を残す。細部の調整は、表面に集中し、裏面は殆んど行われていない。	N 5-11	0003
13	石器未製品	1.16	1.72	0.33	0.81	流紋岩	主要剝離面を多く残す。基部のみに細部調整がなされている。製作途中で先端部が欠損したものと思われる。	N 6-4	0004
14	石器未製品	2.64	1.64	0.33	2.20	流紋岩	主要剝離面を裏面にそのまま残す。調整は、図上左側左側縁のみに集中する。	N 5-9	0005
15	石器未製品	2.41	1.54	0.58	2.40	安山岩	主要剝離面を残し、裏面は原石面を残す。調整は図上左側右側縁の一部に認められる。	N 5-4	0001
16	滑石 製品	2.40	1.43	1.06	3.10	滑石	滑石を用いて、周囲を丁寧に磨いている。大部分が欠損するため、形状等については不明である。	N 6-16	0001



第31図 包含層出土石器(2)

括弧 番号	器 様	法 量 (cm · g)				石 材	調 研 級	出土位置	遺 物 番 号
		長さ	幅	厚さ	重さ				
17	鎌 剣	15.4	8.54	3.0	640.0	流紋岩	偏平な楕円形の自然石を用い基部、及び、刃部に簡単な加工を施す。側縁の調整は全く行われず、自然面をそのまま残す。	I3トレンチ	0002
18	磨 敲 石	11.1	8.45	—	700.0	安山岩	楕円形の自然石を用い、表・裏共に入念にミガキがなされる。磨石の側縁は敲石として使用され、表裏にも鋸いた痕跡を残す。	N 6-11	0003
19	磨 敲 石	8.46	5.35	—	218.3	安山岩	楕円形の自然石を用い、表・裏共な入念なミガキがなされる。磨石の側縁は敲石として使用され、中央に凹面を残す。	N 4-18	0003
20	磨 敲 石	9.59	4.29	—	196.0	砂 岩	楕円形の自然石を用い、表・裏共に磨いている。側縁には敲かれた部分がある。	O 5-7	0003
21	磨 敲 石	6.22	5.22	—	167.0	花崗岩	円形の自然石を用いた磨石である。表・裏共に磨かれ、側縁の一部が敲石として使用されている。	M 5-24	0003
22	磨 敲 石	4.74	4.10	—	103.2	花崗岩	片が現存する磨石である。破損した後も敲石として使用されたと考えられ。破損部にも使用痕が認められる。	N 5-7	0004
23	磨 石	7.26	5.30	—	182.4	砂 岩	約半分が現存する。磨石のみに用いられた敲石としての使用はない。	M 6-15	0003
24	磨 石	4.76	4.18	—	91.6	砂 岩	約半分が現存する。磨石のみに用いられた敲石としての使用はない。	M 5-20	0003



第32図 グリッド出土弥生土器

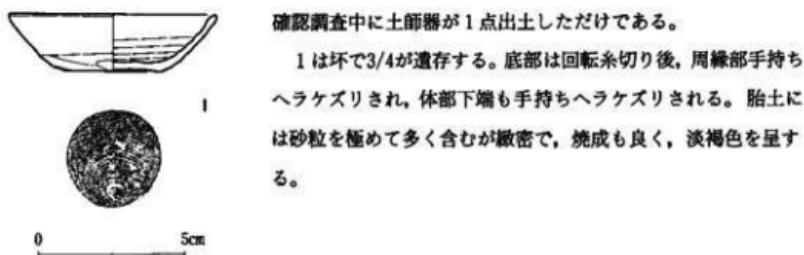
弥生時代（第32図）

林北遺跡では弥生時代の遺構は検出されず、表土中から若干の弥生土器が出土したにすぎない。これらの土器はいずれも弥生時代後期に属するもので、長山遺跡との関係で注目される。

1は壺の口縁部で複合口縁となる。地文は撚糸文（R）で、口唇部と口縁部下端には単節繩文の押捺が加えられる。2は甕の口縁部で、単節繩文（？）が施文されるが器面の遺存状態は悪い。3は甕の口縁部で撚糸文（R）が施文される。4は甕の胴部で撚糸文（R）が施文される。5は甕の胴部で、下半はS字状結節文を有する単節繩文（LR, RL）が羽状に施文される。上半にはS字状結節文を有する単節繩文（LR）を施文した際、原体の端末のほどけた圧痕（0段の条）が認められる。6は甕の胴部で、S字条結節文を有する単節繩文（LR, RL）が羽状に施文される。7は甕の胴部で、撚糸文（R）が施文される。

平安時代（第33図）

今回の調査では平安時代と考えられる遺構は検出されず、D-18グリッド内の発掘区において確認調査中に土師器が1点出土しただけである。



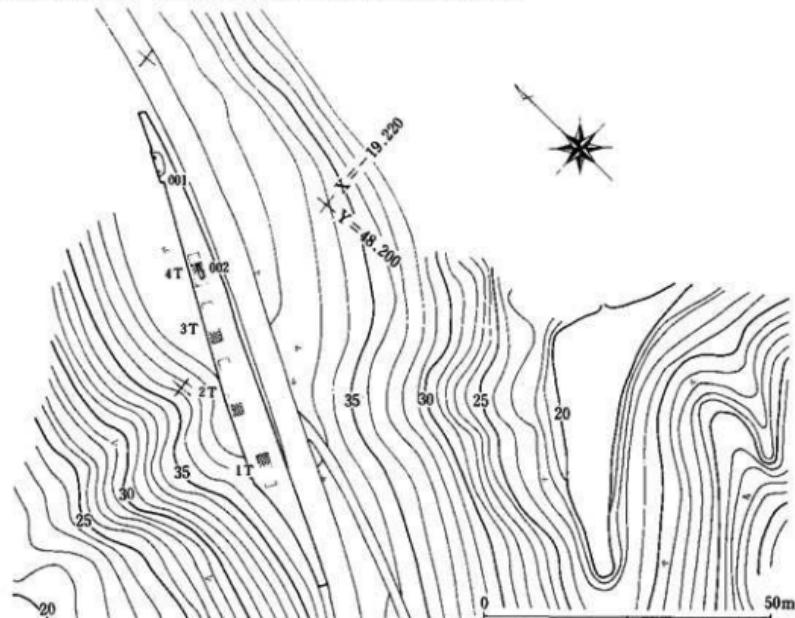
第33図 グリッド出土土師器

IV. 長山遺跡の調査

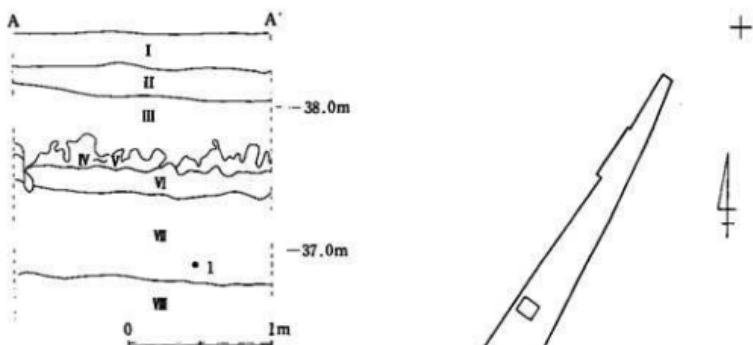
1. 遺構・遺物の概要（第34図）

長山遺跡からは旧石器時代から弥生時代後期までの遺構・遺物が出土している。旧石器時代の遺物は第VII層より石器が1点出土している。縄文時代では早期の沈線文系土器から条痕文系土器までの各期の遺物が断片的に出土し、第4トレンチからは早期後半の陥し穴が確認された。その他には、前期の竹管文系土器が斜面部を中心として断片的に出土した。石器は局部磨製石斧と石鎌がそれぞれ1点ずつ出土している。弥生時代は竪穴住居跡が調査区の北側から検出されたが、西側半分が調査区外にかかっていたために完掘できなかった。また、長山遺跡は平坦な場所が少なく、瘦せ尾根状の台地である。このような台地上に集落を形成する例はあまりなく、利根川下流域における弥生時代後期の様相を知る上で重要な遺跡と考えられる。

一方、出土遺物は、縄文土器が總破片数211点で、早期の三戸式土器8点、田戸下層式土器13点、条痕文系土器125点、野島式土器2点、条痕文土器16点、前期の浮島式土器9点、興津式土器15点であり、早期後半の条痕文系土器の占める割合が多い。これらの縄文土器は調査区中央から南側調査区の谷部にかけて多く出土しており、廃棄ブロックが谷部に集中していると思われる。また、弥生時代後期の土器片が27点出土している。



第34図 長山遺跡確認トレンチ配置図及び遺構配置図 (1/1000)

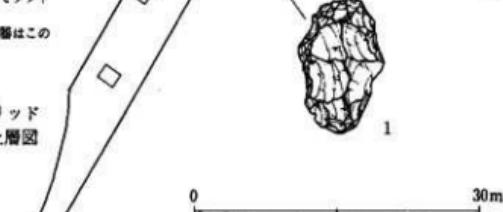


第35図 旧石器時代石器出土グリッド
東壁土層図

I層 棕土層
II層 赤褐色土層
炭火物、焼土粒子を若干含む。
縄文時代早期～弥生時代後期の土器片を含む。
III～VI層 黄褐色土層。いわゆるソフトローム層と
ハードローム層に対応する。V層までソフト
化している。
VII層 第2黒色帶に相当する層である。石器はこの
層の下部より出土した。
VIII層 立川ローム層の最下部にある。

X = -19.220

X = -19.260

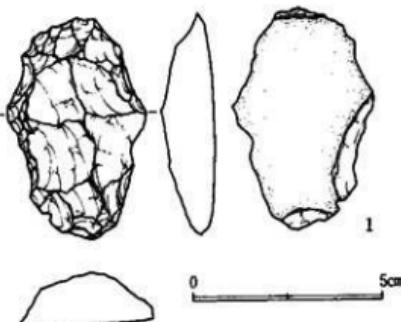


第36図 旧石器時代確認グリッド配置図及び遺物
グリッド位置図

2. 検出された遺構と遺物

旧石器時代 (第35図～第37図)

第3トレンチ確認調査中、第VII層下部から第37図に示した石器が1点出土したが遺物の広がりは確認できなかった。1は一面のみに調整を施す石器である。裏面に自然面を残し、表面は両側縁から加工を施している。製作する段階での加工が粗い。細部の調整は、図上左侧左側縁に集中している。石材はホルンブ
エルス、最大長5.75cm、最大幅3.7cm、厚さ1.35
cm、重さ29.0kgを測る。



第37図 出土石器

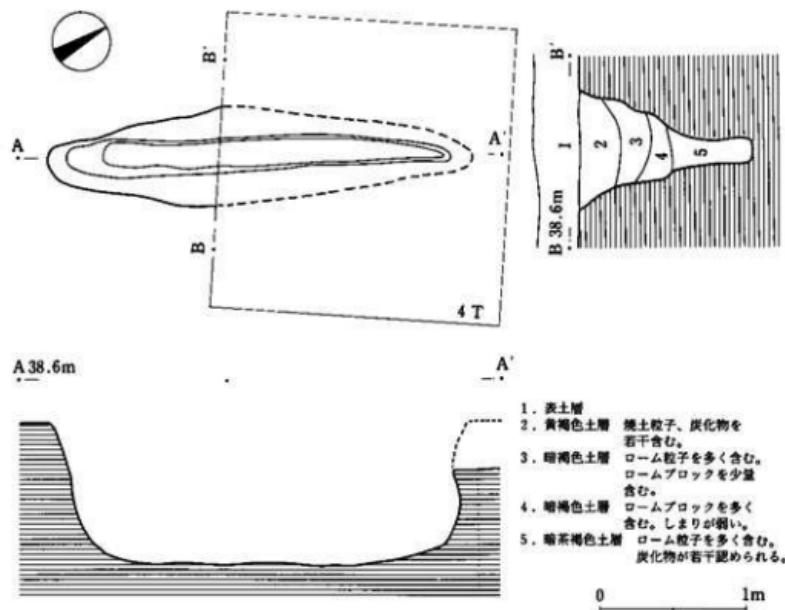
縄文時代

(1) 陥し穴 (第38図、第39図1~9)

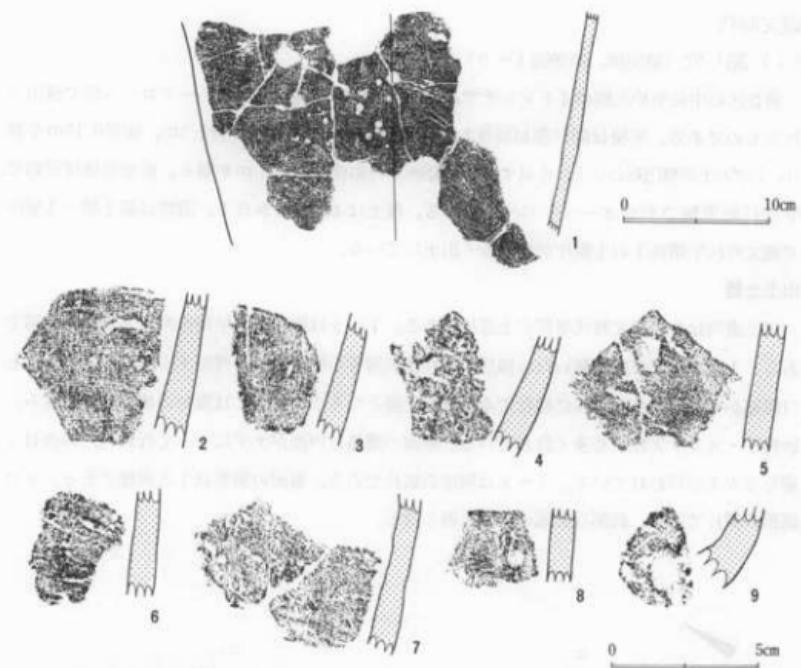
調査区の中央やや北側の4トレンチで、旧石器時代の確認調査中にハードローム面で検出されたものである。規模は開口部が長径2.9m、短径0.6m、底部が長径2.3m、短径0.15mを測り、いずれも長楕円形のプランを呈する。確認面からの深さは約1mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は長軸東側でややオーバーハングしている。覆土は4層に分かれる。遺物は第2層~3層中で縄文時代早期後半の土器片がやや多く出土している。

出土土器

出土遺物は全て縄文時代早期の土器片である。1~9は縄文時代早期後半の条痕文系土器である。1は口縁部破片が無いため器形・口唇部形態等不明であるが、残存する器形から考えると口縁部から底部に直行ぎみに移行する深鉢形土器となろう。胎土には微量の植物纖維を含み、砂粒子・スコリア粒子を多く含んでいる。器面の調整は内面がナデによって行われ、外面は丁寧なミガキが行われている。2~8は胴部の破片である。器面の調整は1と同様である。9は底部の破片である。底部は丸底の尖底土器となる。



第38図 002号陥し穴



第39図 002号陥し穴出土土器

(2) 包含層出土の遺物

1. 繩文土器 (第40図 1~44)

第I群土器 (1~14)

縄文時代早期の三戸式土器である。1~5は三戸式土器の条痕文土器である。1は口縁部の破片で、口唇部形態が尖頭状を呈し、口唇部上にキザミを施す。条痕は斜位に施される。2は格子目状を呈する条痕文が施される。3~5は斜位の条痕文が認められる。

縄文時代早期の田戸下層式土器である。6は口縁部に縦位の細沈線を施すものである。7は口唇部が角頭状を呈し、竹管を押捺している。文様は口縁部直下に横位の太沈線を2条施し、それ以下を細沈線による格子目文を施す。8は7の口縁部直下の破片と考えられ、格子目文の後には半月状の刺突文を巡らしている。以下は横位細沈線文が認められる。9は細沈線と太沈線が巡らされるものである。10~14は胴部の破片で、12には沈線文の他に貝殻腹縁文が認められる。14は底部に近い破片で、細沈線文と刺突文が認められる。

第II群土器 (15~31)

15~20, 29, 30は子母口式土器である。胎土中に微量の植物繊維を含み、焼成の良好な土器



第40図 包含層出土縄文土器

である。器面の調整はナデ・条痕によるものである。15・16は口縁部の破片で口唇部形態は15が角頭状、16が尖頭状を呈する。15は口唇部に刺突文を施す。17は器面の調整が外面が条痕・内面がナデである。文様はタガ状の隆帯を貼り付け、隆帯上に縦条体圧痕をV字状に施す。18は貝殻腹縁文を施すもので、内面には条痕が横走する。他に比べると纖維の含む量が多い。19・20は器面の調整がナデによるものである。19には一部に条痕が認められる。29・30は底部の破片で、鈍角な尖底土器である。

21・22は野島式土器である。胎土中に植物纖維が少量含まれるもので、文様に細隆起線文が認められるものである。

23～28、31は条痕文土器である。胎土に多量の植物纖維を含み、内外面に条痕を施すものである。23～28は胸部の破片で、条痕が縦横無尽に施される。31は底部で、鋭角な尖底である。

第三群土器（32～44）

32～39は浮島II式土器である。32・33は半截竹管文による沈線文と変形爪形文を施すものである。39は口縁部直下に太沈線を斜位に施し、以下、変形爪形文を施している。34～38は波状貝殻文を施すものである。

40～44は興津II式土器である。40は口縁部直下に半截竹管による継位の短沈線を施す。41は波状貝殻文を施し、沈線によって区画している。42は貝殻腹縁を引きずるように施文する。43・44は条線文を施すものである。44は口唇部形態が折り返し状となる。

2. 石器（第41図1・2）

長山遺跡からは第41図に図示した局部磨製石斧と石鎌がそれぞれ1点ずつ出土している。1は局部磨製石斧である。縦長の石材を用いて二方向から打撃を加え基部と刃部を作りだす。刃部の一部に研磨を加えるものである。石材は砂岩で、最大長4.8cm、最大幅2.0cm、厚さ1.4cm、重さ17.6gを測る。2は石鎌である。平面形態は二等辺三角形を呈し、基部に抉りがはいる。最終的な調整は両側縁に集中する。石材は黒曜石で、最大長1.6cm、最大幅1.4cm、厚さ0.45cm、重さ0.6gを測る。



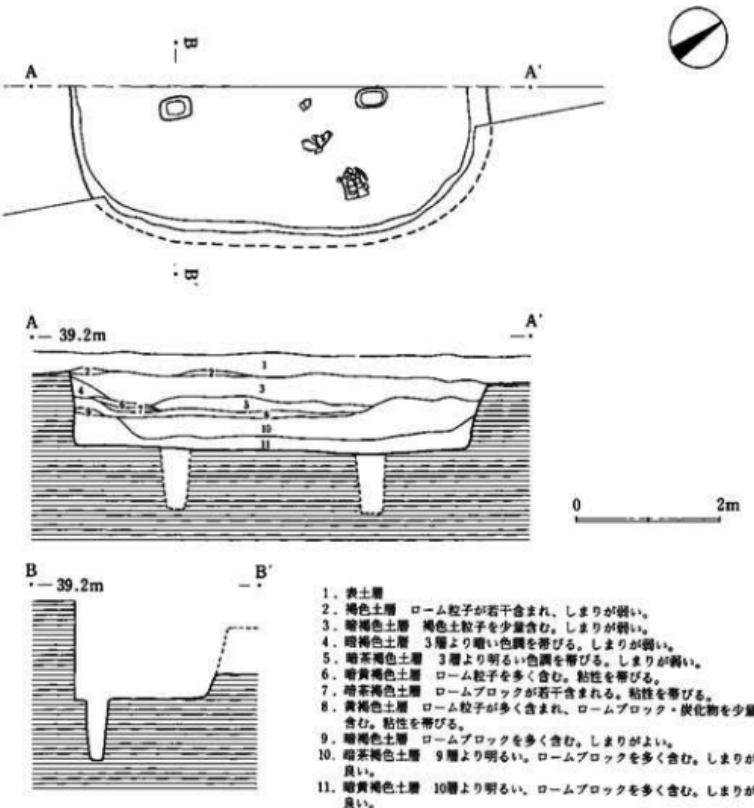
第41図 包含層出土石器

弥生時代

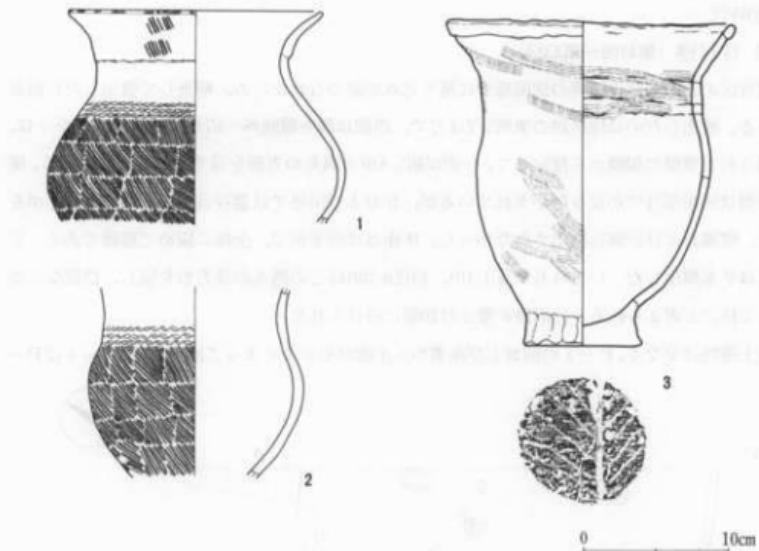
(1) 住居跡 (第42図～第43図)

調査区の北側部分の道路の法面部分に落ち込みが認められたため、精査して検出した住居跡である。検出したのは住居跡の東側1/2ほどで、西側は調査範囲外へ広がっている。プランは、検出された東壁の規模から推定して、一辺が約5.8mの隅丸の方形を呈するものと思われる。壁は東側は法面部分でかなり削平されているが、北および南壁では遺存は良く、壁高は約1mを測る。壁溝および炉跡は検出されなかった。床面はほぼ平坦で、全体に極めて堅致である。ピットは2本検出した。いずれも長径0.4m、短径0.3mほどの隅丸の長方形を呈し、位置などからして柱穴と考えられる。住居跡の覆土は10層に分けられた。

出土遺物は少なく、P-1の南および南東から土器がやまとまって出土している。1はP-



第42図 001号住居跡



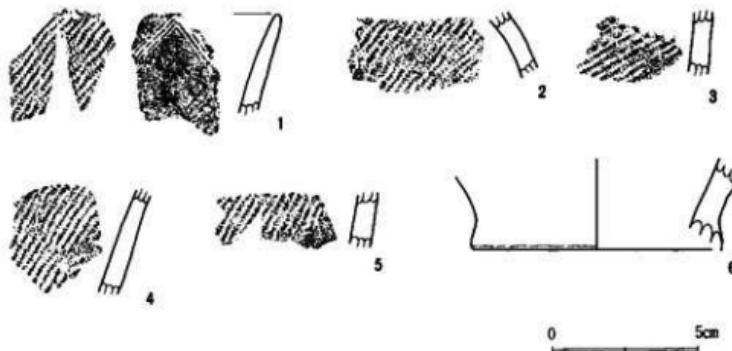
第43図 001号住居跡出土土器

1 の東側、壁の近くで覆土下層からややまとめて出土した壺で、覆土中のその他の破片と接合し、図示した範囲で3/5まで復元することができた。胸部下半から底部を欠失する。頸部には輪積み痕を一段残す。胸部上半はS字状結節文が3段施文され、それ以下は附加条縄文が施文される。また頸部上半にも部分的に附加条縄文が施文される。口唇部には縄文原体による押捺が加えられる。施文部以外はナデが加えられる。胎土は細砂粒を多く含むが密で、焼成も良好である。淡褐色を呈する。2はP-1の南側で、ほぼ床面直上から出土した壺で、口縁部と底部を欠損する。頸部下半にはS字状結節文が3段施文され、それ以下は附加条縄文が施文される。施文部以外はナデが加えられる。胎土は細砂粒を多く含むが密で、焼成も良好である。暗褐色を呈する。器面は内外面共遺存状態がやや悪い。3はP-1の東側で、ほぼ床面直上から出土した壺で、4/5が遺存する。口縁部はわずかに複合口縁状を成す。外面はヘラケズリの後、粗いハケ状工具によるナデが加えられ、後全面にナデが加えられる。胸部下端はナデが加えられた後指頭によるオサエが加えられる。内面上半は外面と同じ粗いハケ状工具によるナデが加えられ、後ナデが加えられる。下半はヘラナデされる。底部には木葉痕を有する。なお外面上半には煤状の付着物が認められる。胎土は細砂粒を多く含むが密で、焼成も良好である。淡茶褐色を呈する。

(2) 包含層出土土器 (第44図)

長山遺跡ではトレンチ内から若干の弥生土器が出土しているが、遺構の量を反映してか量は極めて少ない。いずれも弥生時代後期に属するものである。

1は甕の口縁部で、内面には4本1組の櫛描山形文が施文され、外面には単節繩文(LR)が施文される。2~5は甕の肩部で、いずれも単節繩文(LR)が施文される。6は甕の底部破片で、内外面共ナデが加えられる。



第44図 グリッド出土弥生土器

V.まとめ

(1) 繩文時代

林北遺跡出土の第I群第3類土器（田戸上層式土器）について

繩文時代に土器が出現してからその土器に付けられる装飾（特に文様）は、時代や時期を反映して様々なモチーフが描かれている。繩文時代早期において、燃糸文系土器の終末から繩以外の施文具が登場し、沈線文系土器・条痕文系土器になり種々の工具により幾何学文が作出され、土器に施される文様にバラエティーがみられるようになる。ところが、それぞれの様式転換期には土器に文様が施されない所謂無文土器が盛行するようである。本節では第I群第3類土器を中心にその特徴と沈線文系土器終末期の様相をまとめてみたい。

1. 林北遺跡出土田戸上層式土器の諸特徴

林北遺跡から出土した田戸上層式土器の詳細な説明は本文中に記したので、ここでは本土器群の諸特徴をまとめる。なお、田戸上層式土器は本文中では第I群、第3類に属するものである。第3類土器は文様や器形等の諸特徴から4種に分けられた。1種は貝殻腹縁文を主体的に施文するもので、沈線文や刺突文が施されるものである。2種は貝殻文を施すものであるが、貝殻文の施文部位が口縁部に集約され、次段階の子母口式土器に類似する事から1種とは区別して捉えた。3種は沈線文を主体的に施文するものである。4種は本遺跡出土土器総数の大半を占める無文土器である。当無文土器は形式的に3つに分けられる。即ち、深鉢形土器・浅鉢形土器・ミニチュア土器である。なお、深鉢形土器は器形の特徴から更に口縁部が外反するもの（a）と口縁部が直行するもの（b）とに分けられる。以下、1種から3種の土器を有文土器、4種を無文土器として捉え、土器の諸特徴をまとめる。

有文土器

器 形：器形を窺う事ができるものは、2種土器中に1個体存在する。口縁部が直行し、底部へと移行する深鉢形土器である。底部は無いが、おそらく、尖底土器となろう。田戸上層式土器の有文土器の基本的な器形は、新東京国際空港No.7遺跡（西川他 1984）にみられるように口縁部がキャリバー状を呈し、口縁部と胴部との境に屈曲をもつ。更に胴部で緩やかな膨らみを持ちながら底部へと移行する。底部は一般的に尖底であるが、僅かに平底も存在するようである。尖底は田戸下層式土器にみられる様な鋭角な尖底（所謂、天匂の鼻状の尖底）とは異なり、丸底状のものが多い。口縁部は平縁のものと波状（緩やかな波状）のものが認められるが、後者がより多く認められる。

胎 土：当遺跡出土の田戸上層式土器には2種類の胎土が存在する。つまり、胎土中に砂粒

子を多く含むものと砂粒子の他に微量の植物纖維を含むものである。前者は1種土器の貝殻腹縁文と沈線文・刺突文をもつ土器に認められる。後者の胎土をもつものはその他の有文土器に認める事ができる。新東京国際空港No.7遺跡や中山遺跡（石橋他 1988）等のでも同様な胎土が存在する。戸場遺跡（小葉 1984）では胎土中に植物纖維を含まず、含んでいても極くわずかなものばかりであるという。ただし、白色の柱状物質である「海綿体骨針」が含まれるもののが1割りを占めているという。海綿体骨針の混入は田戸遺跡（赤星 1935）報告の際にも白色微細物として指摘されており、田戸式土器の特徴として取り上げられている。

口唇部形態と口唇部装飾：口縁部の破片が少ないため口唇部形態や口唇部装飾について述べるのは難しいので、ここでは一般的な口唇部形態と口唇部装飾について記述する。先ず、口唇部形態であるが、第16図28や第17図33に認められるように尖頭状のものがある。（本文中でも述べたが2種土器は子母口式土器に近い様相を示している。）一般的な田戸上層式土器の口唇部形態は内肥するもの・内湾するもの・角頭状・外そぎ状等が認められる。新東京国際空港No.7遺跡では内肥するものや内湾するものが多く認められる。次に、口唇部装飾であるが、一般的には前記した口唇部の内面にキザミを施すものが多い。（このキザミはヘラ状の工具を用いたもので細かなものが多いようである。）また、口唇部の内外面にキザミを施すものも認められる。第17図33には貝殻腹縁文が施されている。口唇部の形態と口唇部装飾には密接な関係があり、三戸式土器に始まる沈線文系土器からの流れの中で捉える必要がある。

器面調整：器面調整の方法として基本的に考えられるものは、ナデ・ケズリ・ミガキ・その他（条痕等）である。本遺跡の器面調整としてミガキが多く土器に認められる。2種土器や3種土器には内外面にナデ・ケズリを施すものが認められる。ナデやケズリはミガキに比べると胎土内の砂粒子の移動が激しく、しばしば擦痕状の筋がつけられる。

文様：本遺跡の田戸上層式土器は3種に分けられる。1種は貝殻腹縁文を主体的に施文するもので、一部に沈線や刺突が施されるものである。2種は貝殻文を施すものであるが、貝殻文の施文部位が口縁部に集約され、次段階の子母口式土器に類似する事から1種とは区別して捉えた。3種は沈線文を主体的に施文するものである。当遺跡の田戸上層式土器の文様要素は、貝殻文・沈線文・刺突文等である。戸場遺跡にみられる様な隆蒂文や貼り付け文の類は認められない。今回の分類は文様施文技法にみられる文様要素からの分類であるため、文様帶を基準とした分類ではないことを付け加える。田戸上層式土器の文様を捉えるには文様帶からの分類・文様要素からの分類・文様施文技法にみられる文様要素からの分類と大きく3つの視点があり、それぞれを混同して解釈してはならない。

無文土器

器形：器形を窺うことができる資料は、遺構出土土器を含めて20個体ある。その内、口縁部から底部まで器形を窺えるものは1個体である。波状口縁部は全く無く、全て平縁である。

無文土器は形式的に 3 つに分けられる。即ち、深鉢形土器・浅鉢形土器・ミニチュア土器である。なお、深鉢形土器は器形の特徴から更に口縁部が外反するものと口縁部が直行するものとに分けられる。大きさは口径 20cm 前後のものが多く認められ、020 号土壤出土の土器が最大径を測る。深鉢形土器は、有文土器の器形と比べるとかなり異なる事が指摘できる。つまり、上記したキャリバー状の口縁部をもつ土器は有文土器に限られて認められる事である。また、田戸上層式土器の無文土器を出土した遺跡として夏島貝塚（杉原・芹沢 1957）・向ヶ岡遺跡（桐生 1983）・城之台北貝塚（吉田 1955、平野・領塚 1988）があげられるが、これらの遺跡の土器には、口縁部が外反し胴部で僅かな膨らみをもつ深鉢形土器や口縁部が直行しそのまま底部に至る深鉢形土器が認められる。深鉢形土器の特徴として 2 種類の器形が存在する事を指摘したが、更に、もう一つの特徴を指摘しておきたい。第 17 図 37 にみられるように胴部で非常に厚みをもつ土器の出現である。37 の土器の厚みは約 2cm あり、他の土器の厚さの 2 倍である。城之台北貝塚（吉田 1955）第 4 類中に若干の類例がある他はあまり知られていない。今後の類例の増加をまって再度検討したい。次に浅鉢形土器であるが、城之台北貝塚の第 4 類、第 5 類中に若干認める事ができる。第 4 類中の土器は椀形土器とされており、器面に沈線文や隆帯文・刺突文が施される。第 5 類中には浅鉢形土器と椀形土器が示され、文様を持たない無文土器が図示されている。口唇部にはキザミが施される。当遺跡の浅鉢形土器は形態的には椀と考えられ、城之台北貝塚第 5 類中の土器に類似している。なお、城之台北貝塚第 5 類土器は子母口式土器として報告されているが、中には子母口式土器というよりはむしろ田戸上層式土器として捉えられるものもある。本遺跡の浅鉢形土器は田戸上層式土器として捉えたい。最後にミニチュア土器であるが、類例が少なく、やはり、城之台北貝塚第 4 類中に認められる。口径が 10cm 前後の土器が若干認められ、口唇部にキザミをもつものがある。

胎 土：有文土器と同様、胎土中に砂粒子を多く含むものと砂粒子の他に微量の植物纖維を含むものがある。胎土と器形との深い関係は認められず、深鉢形土器・浅鉢形土器・ミニチュア土器全てに微量の植物纖維を含んでいる。例えば、大多数の土器に微量の植物纖維を含むことが大きな特徴として指摘できる。城之台北貝塚第 4 類土器は殆どの土器に植物纖維を含まないとされ、第 5 類土器には纖維を含むものが少くないとされている。有文土器にも纖維を含むものと含まないもののが存在するため、無文土器の胎土のみで分類することは難しい。また、戸場遺跡のような海綿体骨針を含むものは全く認められない。海綿体骨針を含む土器は多摩地区や三浦半島周辺の西関東でより多く発見されており、微量の植物纖維を含む土器が多い東関東との地域性が指摘できる。

口唇部形態と口唇部装飾：口唇部の形態は、角頭状・尖頭状・丸頭状・外そぎ状を呈するものが認められる。角頭状・外そぎ状を呈するものには口縁部が外反し、胴部でやや膨らみをもつ深鉢形土器が多く認められるようである。また、尖頭状・丸頭状のものは口縁部から直行す

る深鉢形土器に多く認められるようである。有文土器にみられた内湾する口唇部形態や内肥する口唇部形態はない。次に口唇部装飾について述べたい。無文土器の口唇部装飾には、沈線文・貝殻文・刺突文・キザミが認められる。沈線文には格子目文・結節沈線文がある。貝殻文には貝殻背圧痕文が認められ、貝殻腹縫文はない。刺突文は円形竹管による円形刺突文がある。刺突文は沈線文とともに装飾され、単独では施文されない。キザミにはヘラ状の工具を用いた細かいものと棒状の工具を押し付けて施文する大きなキザミが認められる。また、貝殻背圧痕文とキザミの両者を持つものも認められる。キザミの方向性は縦位・斜位があるが、この施文方法にはある一定の規則性が予想される。例えば、口唇部を幾つかの単位に縦位のキザミを施し、その間に斜位のキザミを装飾するということである。あくまで予想であり、それを証明する資料はない。城之台北貝塚（平野・領塚 1988）では格子目状沈線文と縦位のキザミ（沈線といつてもよい）が施されるものがある。以上のように無文土器の口唇部装飾は有文土器に比べるとバラエティーに富んでおり、口唇部の装飾にはある一定の規則性があるものと予想される。

器面調整：器面調整の方法として基本的に考えられるものは、ナデ・ケズリ・ミガキ・その他（条痕等）である。内面と外面の器面調整とのそれぞれの組み合わせから16通りの調整が考えられる。その内で最も多く認められたものに外面ナデ・内面ナデという調整方法であった。その他に外面ミガキ・内面ミガキや外面ミガキ・内面ケズリという組み合わせも認められた。少ないものとしては外面ミガキ・内面条痕という例もあった。ミガキは器面上に砂粒子が沈み器面全体が光沢をもつ。ナデはミガキと同様砂粒子が沈んでいるが、ミガキのような光沢を持たず若干の筋ができる。ケズリは砂粒子の移動が比較的激しく、粒子の移動による筋が顕著に認められる。以上、ミガキ・ナデ・ケズリについて若干の説明を加えたが、器面調整の見分けかたはたいへん難しく、細部の観察を行わなければならない。（図版5参照）

2. 沈線文系土器群の終末

林北遺跡の田戸上層式土器について他の諸遺跡との比較から土器の諸特徴を述べてきた。ここでは、沈線文系土器群終末期の様相を考えてみたい。

林北遺跡の田戸上層式土器は先にも述べたとおり、有文土器と無文土器に分けられる。有文土器の文様要素としては、貝殻文が主体を占め、その他に、沈線文や刺突文が認められる。無文土器は胎土に微量の植物纖維を含むものが多く、口唇部に刺突文・沈線文・貝殻文・キザミが施される。無文土器の占める割合が97%を占める。

これらの土器群に類似する資料としては城之台北貝塚（吉田 1955）の第4類、第5類と戸場遺跡第II群がある。何れの遺跡も無文土器を多量に出土している。ただ、有文土器の在り方が多少異なっている。つまり、林北遺跡では貝殻文・沈線文・刺突文を文様の主体とするのに対しても、戸場遺跡では隆帯文を主体としている。また、城之台北貝塚ではそれら全ての文様要

素をもっている。更に、有文土器とともに無文土器を多く出土した遺跡として和田遺跡（小倉他 1982）や宮前遺跡（小倉他 1984）等の大宮台地の資料がある。これらの遺跡は沈線文を主体的な文様としており、貝殻文・隆帯文が僅かに含まれる。そこで問題となるのは、それぞれの文様要素の在り方である。時間的にそれぞれが位置づけられるか、あるいは地域的な特色として捉えるものなのか、現在の段階ではそれを証明する資料はなく断定できない。現状においては、それぞれの文様要素が遺跡自体の特徴として理解することの方がより妥当であると思われる。またこれとは逆に、有文土器を主体に出土する新東京国際空港No 7 遺跡が注目される。これは、横位の文様帯が整然と区画され、文様構成多段で胴部までおよんでいることや無文土器の比率が少ないとから上記した土器群より古い段階の土器と考えられる。

次に、それに後続する条痕文系土器とりわけ子母口式土器から検討したい。第I群第3類2種土器中に子母口式土器に類似した土器が存在する。貝殻腹縁文や貝殻背圧痕文を主体的な文様とするもので、口縁部直下に文様の集約が認められるものである。子母口式土器は、その基本的な文様の構成が口縁部直下に認められ文様の種類としては刺突文・貝殻文・沈線文・絡条体圧痕文・タガ状の隆帯文が認められる。特に、絡条体圧痕文は、口唇部やタガ状の隆帯上に施される場合が多く、絡条体圧痕文をもつ土器のみで型式組成を充足させる段階があるとは考えられない。第I群第3類2種土器に類似する例としては新東京国際空港No 7 遺跡に刺突文を口縁部直下に巡らすものが認められ、胎土や口唇部形態の類似から田戸上層式土器として捉える事ができる。また、タルカ作遺跡（田村 1985）や浅間神社遺跡（たけべら縄文研究グループ 1988）の子母口式土器に円孔文を巡らす土器が存在する。ただ、何れの遺跡も貝殻文（貝殻背圧痕文）を用いて口縁部直下に文様を巡らすものが認められず、本土器は貝殻文を主体とする田戸上層式土器のグループとして捉えたい。

田戸下層式土器に発展した太沈線文は田戸上層式土器になると細沈線文が主流を占め、貝殻文・刺突文・隆帯文が発達する。夏島貝塚・向原遺跡（佐々木 1982）・池上りI 遺跡（小林 1985）では器形的に田戸上層式土器に含まれる資料がみられるが文様要素としての太沈線文が盛んで田戸下層式土器の要素を多くもつ。また、無文土器が少なく、縄文土器が若干存在する。更に、次の段階に移ると新東京国際空港No 7 遺跡や岩富漆谷津遺跡（高橋他 1983）を代表するように、田戸下層式土器にみられた太沈線文は細沈線文にとってかわり、沈線の種類も複雑になり、刺突文・貝殻文・隆帯文が発展し、多くの文様が作出されるようになる。また、文様帯の横方向への転換がなされることも大きな特色となる。これらにはまだ無文土器が盛行せず、有文土器が主流を占める。沈線文系土器の終末段階において有文土器の文様帯は、口縁部直下に集約される兆しがみえ、林北遺跡第I群第3類2種土器を代表する土器が成立する。また、1個体の土器に盛りだくさんの文様要素を含んでいた土器が、それぞれの文様要素に分離し、主体的な文様要素を作りだす。つまり、戸場遺跡にみられる隆帯文を主体とする土器群・和田

遺跡にみられる沈線文を主体とする土器群・林北遺跡にみられる貝殻文を主体とする土器群が各々の遺跡単位で出現する。この段階において最も重要なのは無文土器の盛行であり、特に口唇部のみに文様が施される例が多くみられる。文様・文様帶の口縁部直下集約や無文土器の盛行は次の子母口式土器に受け継がれ、タルカ作遺跡・浅間神社遺跡等の波状口縁を持ち、刺突文をもつ土器が出現する。(あるいは刺突文を主体とする土器として前段階に平行できるかもしれない。)そして、刺突文・沈線文・貝殻文・隆帶文に新たな文様要素(絡条体圧痕文)が加わり、子母口式土器が成立すると推察される。

田戸上層式土器は沈線文系土器から次の条痕文系土器(特に子母口式土器)に移りかわる過渡的な段階にある。田戸上層式土器最終的な段階には無文土器が主体を占めるということが大きな特徴の一つとしてあげられる。また、有文土器の文様要素として絡条体圧痕文を除く全ての要素が成立し、それぞれが遺跡自体で主体的な文様として成立し、林北遺跡第1群第3類2種土器に代表される口縁部直下に文様の集約がなされ、次段階の子母口式土器に移りかわるのである。以上、田戸上層式土器から子母口式土器成立段階までの仮説をたててみた。これらの土器の変化には田戸下層式土器からの発展的な変化と共に、東北地方に広く分布する貝殻沈線文系土器の影響を考えねばならない。今回は限られた紙数のためそれを盛り込めなかったので稿を改めて論じたい。

引用参考文献(五十音順)

- 赤星直忠 1935 「横須賀市田戸先史時代遺跡調査報告」 「史前学雑誌」第7巻第6号
- 安孫子昭二 1982 「子母口式土器の再検討」 「東京考古」1
- 石橋宏克他 1988 「中山遺跡－繩文時代－」 「東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書－佐原地区(1)－」
(財)千葉県文化財センター
- 小堀一夫 1984 「戸塚遺跡」 町田市戸塚遺跡調査会
- 小倉均他 1982 「和田遺跡」 浦和市東部遺跡群発掘調査報告書第2集
- 小倉均他 1984 「宮前遺跡」 「吉場、西谷、宮前、大間木内谷、和田西遺跡発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会発掘調査報告書 第34集
- 橋生直彦 「向ヶ岡遺跡」 多摩市埋蔵文化財調査報告6 1983
- 小林清蔵 1985 「池上りI遺跡」 「主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅地開発事業)地内埋蔵文化財発掘調査報告書」 (財)千葉県文化財センター
- 佐々木藤雄他 1982 「向原遺跡」 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 1
- 杉原莊介・芹沢長介 1957 「神奈川県夏島における繩文文化初頭の貝塚」 明治大学
- 高橋誠他 1983 「岩富漆谷津・太田宿」 佐倉市教育委員会
- たけべら繩文研究グループ 1988 「浅間神社遺跡の研究」 「竹籠」 第4号
- 田村 隆 1985 「佐倉市タルカ作遺跡」 (財)千葉県文化財センター
- 西川博孝 1984 「No.7遺跡」 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IV」
- 平野功・嶋塚正浩 1988 「城ノ台北貝塚」 「小見川町内遺跡群発掘調査報告書」 小見川町文化財報告第13集
- 吉田格 1955 「千葉県城ノ台貝塚」 「石器時代」第1号

(2) 弥生時代

今回の2遺跡の発掘調査において明確に弥生時代の遺構としてとらえられるのは、長山遺跡において検出された1軒の住居跡にすぎない。この住居跡は完掘できなかったものの、弥生時代遺跡の調査例の少ない当地域において貴重な資料を提供することとなった。また、住居跡内から出土した土器は、当地域における弥生時代後期の様相を知る上で重要な手がかりを与えており、ここではこの住居跡及び出土土器について若干の検討を加えて、今回の調査の弥生時代のまとめとしたい。

長山遺跡の住居跡から出土したのは壺3個体である。これらの土器はいわゆる北関東系土器と呼ばれるものである。北関東系土器については、菊池義次氏以来^(註1)の研究の歴史があるわけではあるが、資料の増加によって、かえって混乱の途をたどってきたと言わざるを得ない。これは千葉県と接する茨城県南部の資料の不足だけでなく、資料の正しい分類、分析が欠けていたことによるものと思われる。

さて、近年茨城県南部の資料の増加に伴い、新しい方向を示す研究がいくつか見られるようになってきた。なかでも小高春雄氏は從来漠然としていた「北関東系土器」の内容について、整理・検討を加えた。まず「北関東系土器」の中から東葛地方で出土し、明らかに長岡式・足洗式等と考えられるものを除外した。さらに印旛沼以東から出土する位置づけの不明確な土器群を長岡・二軒屋式類似土器と折衷型土器とに分け、編年の位置づけを試みた。この中で折衷型土器とは、「頸部に輪積み痕を有し、胴部に異条縦文を施す」ものとされている。この折衷型土器は中期に出現し、久ヶ原期の中葉以降に広く普及し、前野町期には姿を消すもので、壺ではなく、南関東の壺が伴うものとされている。さらにその分布は印旛沼を中心とした東西の帶状の地域であり、弥生時代後期における北関東の土器の急激な南下によって接点地域に生まれたもので、これを下総型土器と称した。^(註2)

今回出土した土器のうち、第43図の1・2の土器は南関東の壺の器形に附加条縦文を施すもので、さらに1には頸部に輪積み痕を残している。この2点の土器は折衷型（下総型）土器と考えられる。この土器には南関東の土器は共伴しておらず、その編年の位置を考える際に参考となるのは南関東の壺の変遷である。南関東の弥生後期の壺には、「輪積み痕を残すタイプ」「押捺がされる段を持つタイプ」「ハケメのあるタイプ」の3通りがあり、從来時間差ととらえられてきた。しかし近年の出土例からすると、別系統として同時存在している可能性が高いと言われている。^(註3) そして確実に久ヶ原式と考えられるのは、「輪積み痕を残すタイプ」のうち最も古い段階の、丸い断面の輪積み装飾が5段以上あるもののみであるとされている。^(註4) したがって、今回出土した壺は、弥生町式併行と考えておきたい。

長山遺跡の位置する成田市は下総型土器の分布域である。しかし同じ成田市内でも、南部に位置する畠ヶ田花山遺跡では、検出された2軒の住居跡出土の土器には北関東の要素は認めら

れず、弥生町式と呼べるものである。一方東部に位置する空港予定地内No61遺跡の住居跡出土土器の一部には、長胴で口縁部が緩やかに外反する広口壺とも呼ばれる型で、器面全面にS字状結節文が施されるものも存在する。S字状結節文が南関東の要素であるとすれば、器形は北関東のものと言えるので、これも折衷の一種である。また西部に位置する成田ニュータウン内の遺跡、例えばLoc40^(註11)では、より北関東の要素の強い土器（小高氏の言う長岡・二軒屋式類似土器）が出土している。以上のことからすると、成田市周辺の弥生時代後期は、従来考えられていたよりも極めて複雑な様相を呈していたと考えられる。北関東系土器を考える上で成田市周辺は重要な地域である。

註

- (1) 菊池1961
- (2) 小高他1983・小高1986
- (3) 小高1986
- (4) 小高他1983
- (5) 笹森1984
- (6) 前掲註(5)
- (7) 久ヶ原式、弥生町式については現在様々な意見が出されており、再検討されている。なかでも代表的なものが、久ヶ原・弥生町併行論である。しかしこの併行論にも解決されるべき多くの問題点があるのも事実である。とりあえずここでは従来の編年を踏襲しておきたい。
- (8) 千葉県文化財センター1986年調査 1989年3月報告書刊行予定
- (9) 千葉県文化財センター1980~81年調査 未報告 筆者実見
- (10) 浜田1983註(2)
- (11) 白石・天野1981

引用・参考文献（五十音順）

- 大沢孝 1983 「下総地方における北関東系土器と称される後期弥生式土器について」『史館』14
大沢孝他 1987 「天神台遺跡発掘調査報告書」(財)印旛都市文化財センター
小高春雄他 1983 「道庭遺跡」道庭遺跡調査会
小高春雄 1986 「北関東系土器」の様相と性格』『研究紀要』10 (財)千葉県文化財センター
菊池義次 1961 「印旛・手賀沼周辺地域の弥生文化」『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査(本編)』千葉県教育委員会
齊藤主悦他 1988 「押烟子の神城跡発掘調査報告書」(財)印旛都市文化財センター
笹森紀己子 1984 「久ヶ原式から弥生町式へ」『土曜考古』9
白石竹雄・天野努 1981 「公津原 II」千葉県教育委員会・(財)千葉県文化財センター
谷句 1983 「成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書 II(関戸遺跡)」(財)千葉県文化財センター
田村言行他 1979 「江原台」江原台第1遺跡発掘調査団
浜田晋介 1983 「印旛沼周辺地域に於ける弥生時代後期の様相」『物質文化』41

写 真 図 版

林北遺跡



1. 遺跡近景



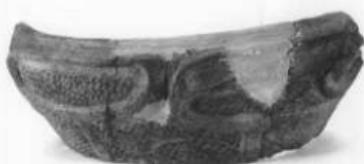
2. 遺跡全景



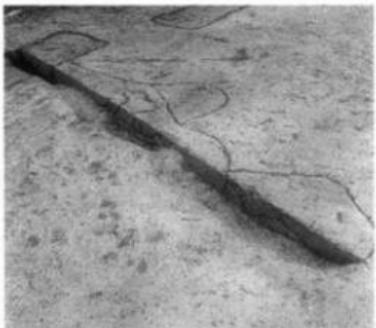
1. 002号住居跡



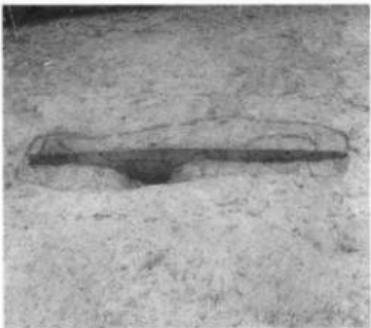
2. 土器出土状況及び出土土器



林北道跡



003号燒土跡



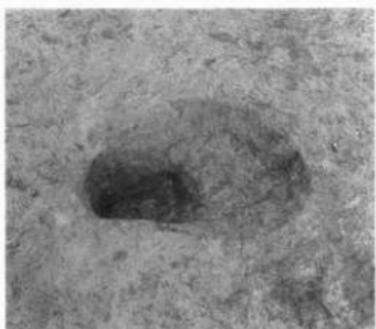
006号燒土跡



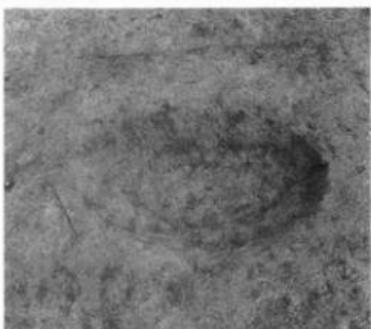
010号燒土跡



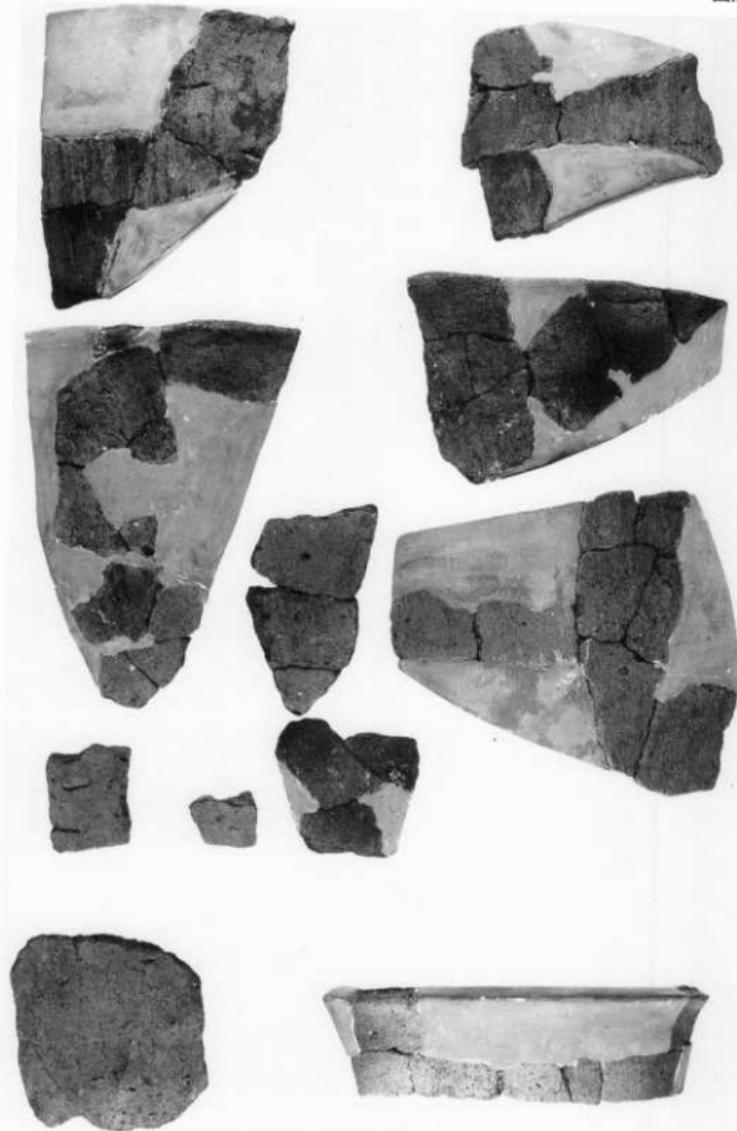
020号土壤



023号燒土跡
燒土跡・土壤

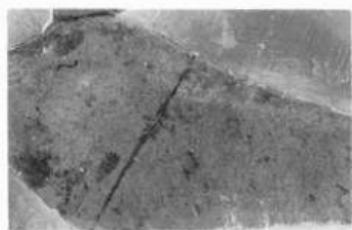


024号燒土跡



烧土迹·土壤出土土器

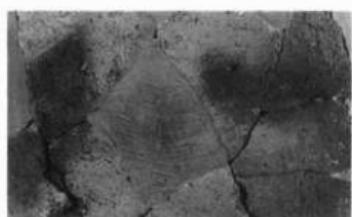
林北遺跡



ミガキ



ケズリ



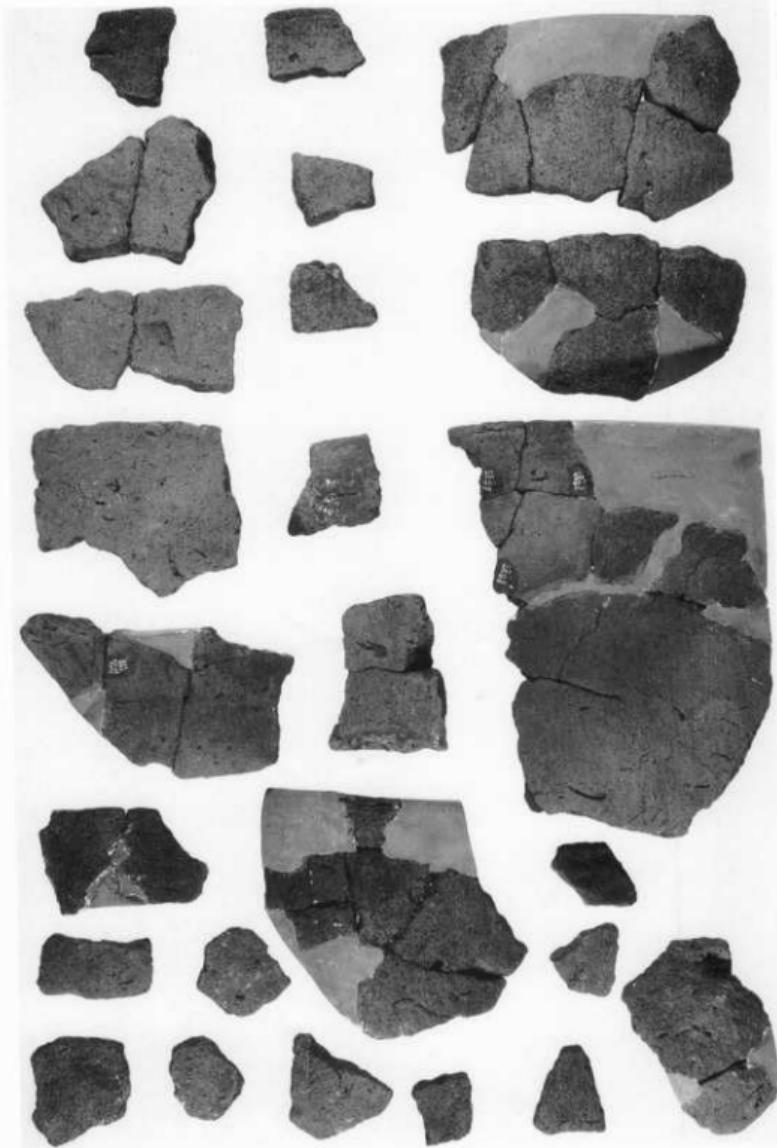
ナデ



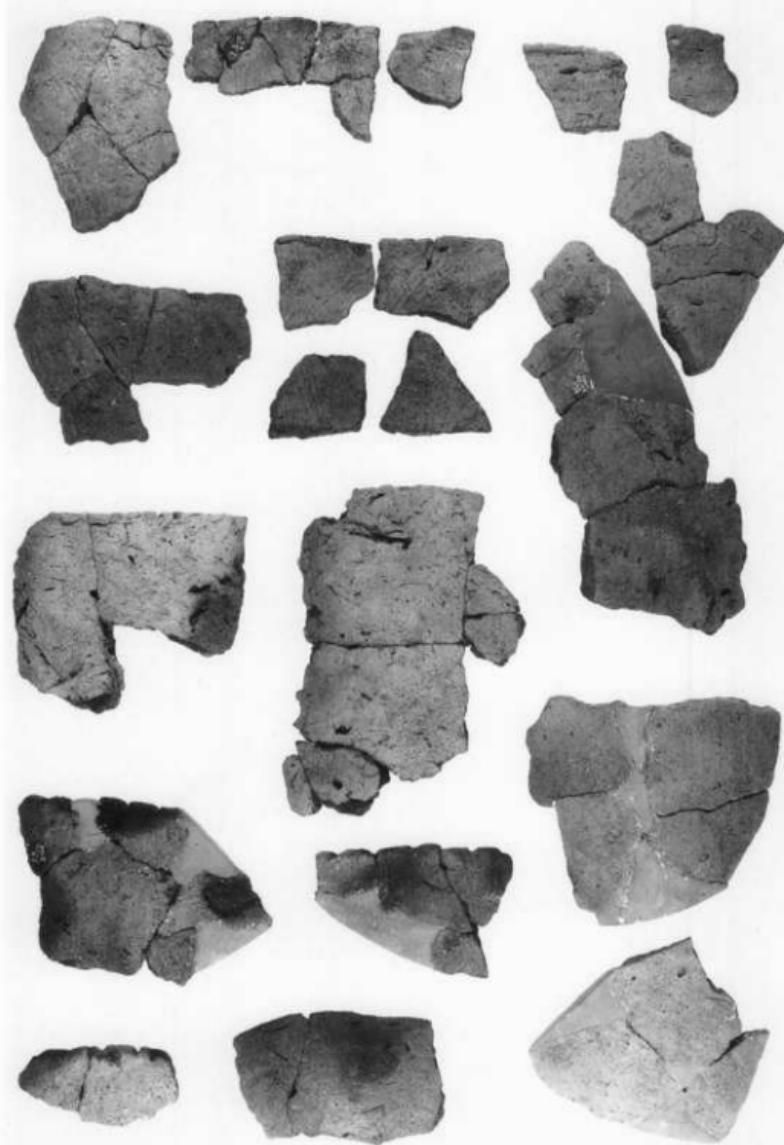
貝殻背圧痕文

包含層出土繩文土器

林北遺跡

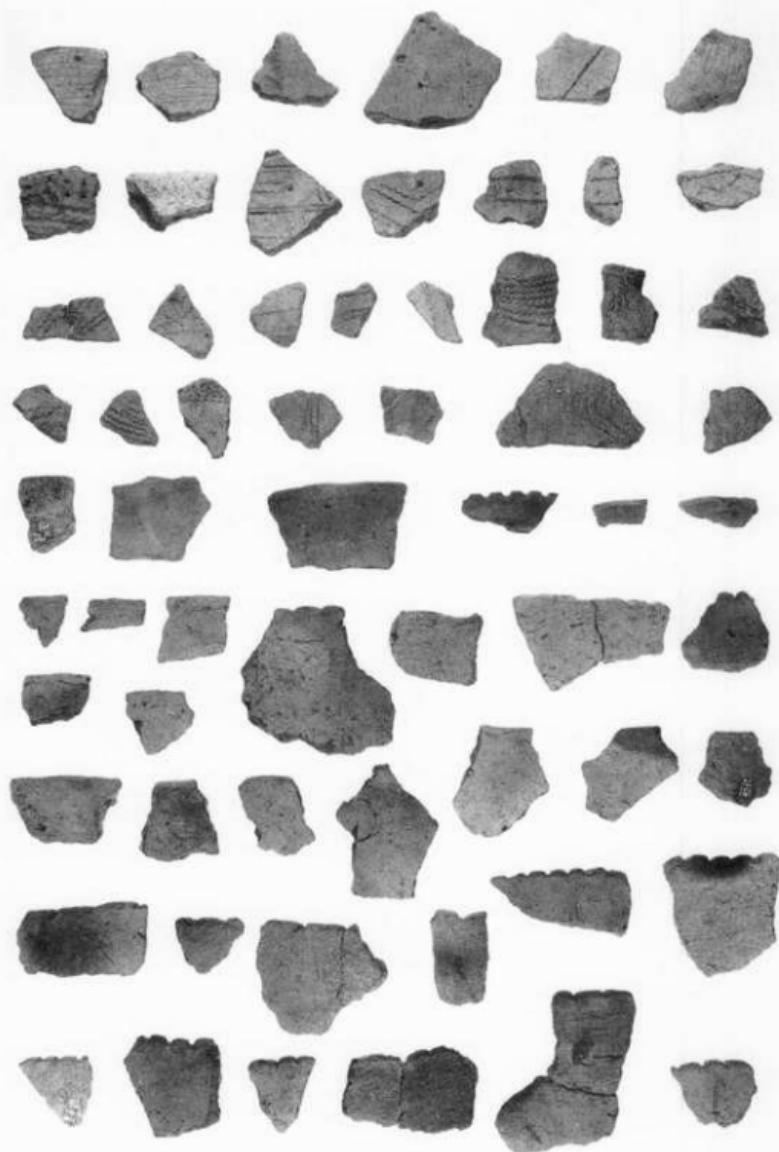


包含層出土繩文土器

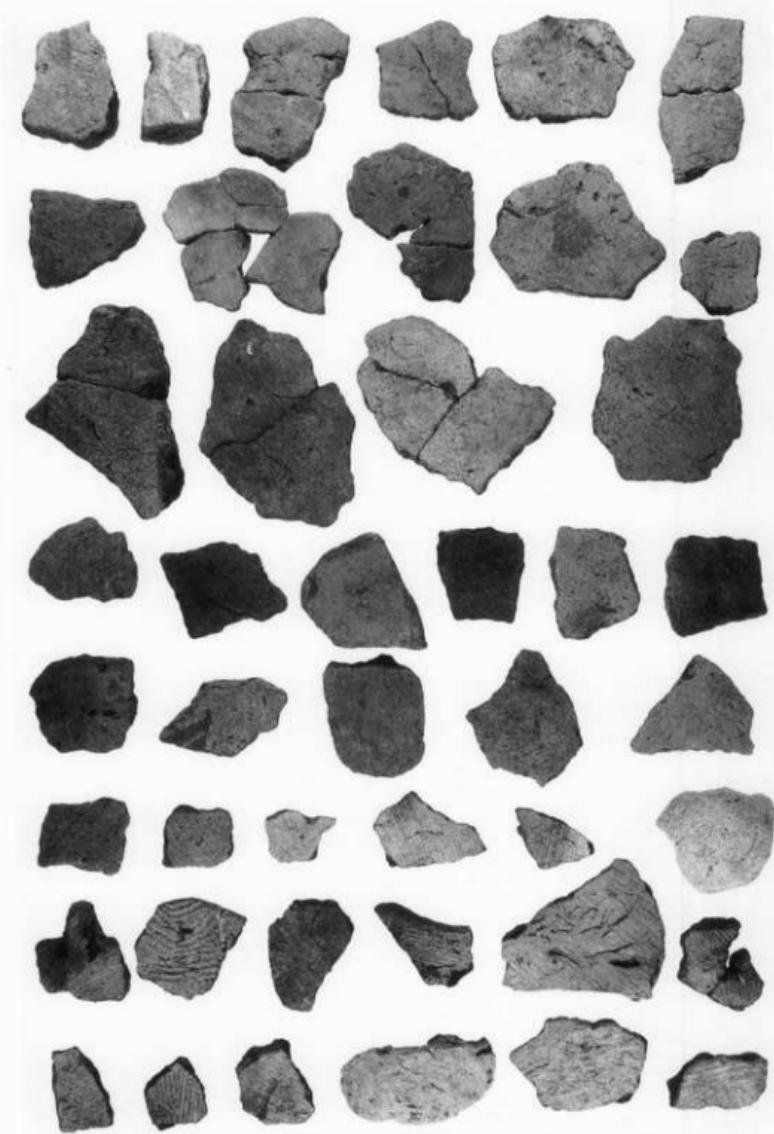


包含層出土繩文土器

林北遺跡

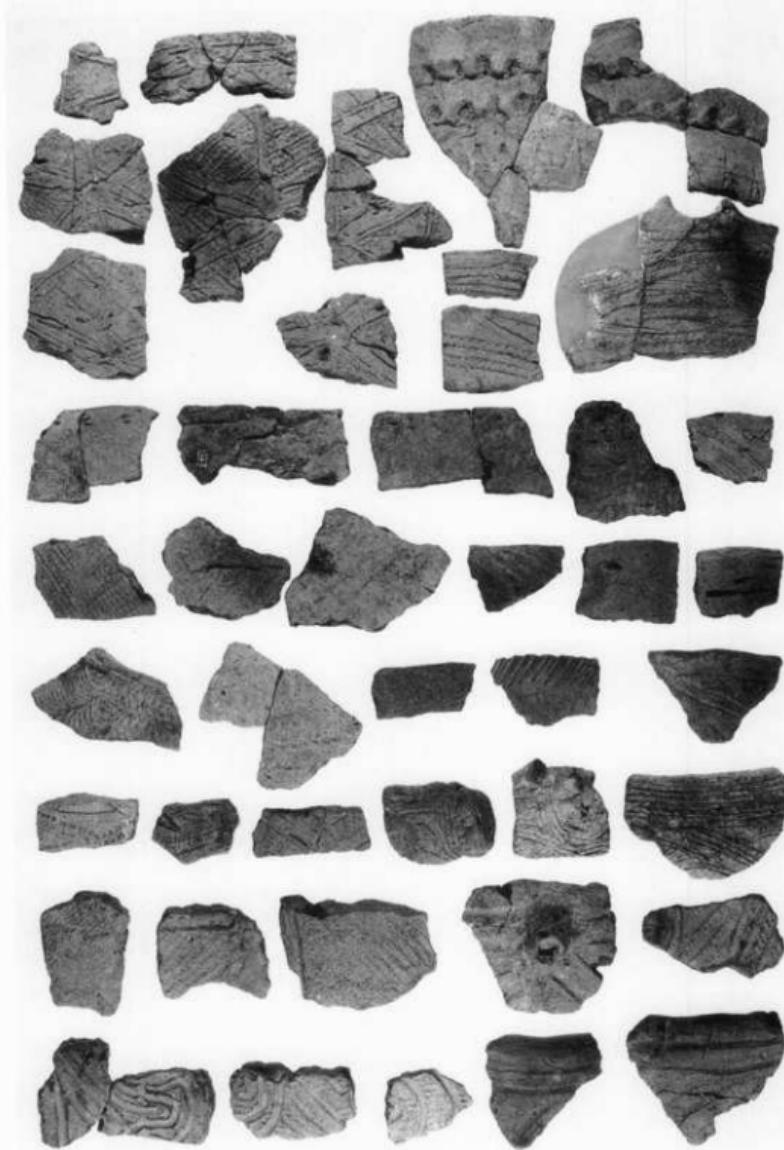


包含層出土陶土器



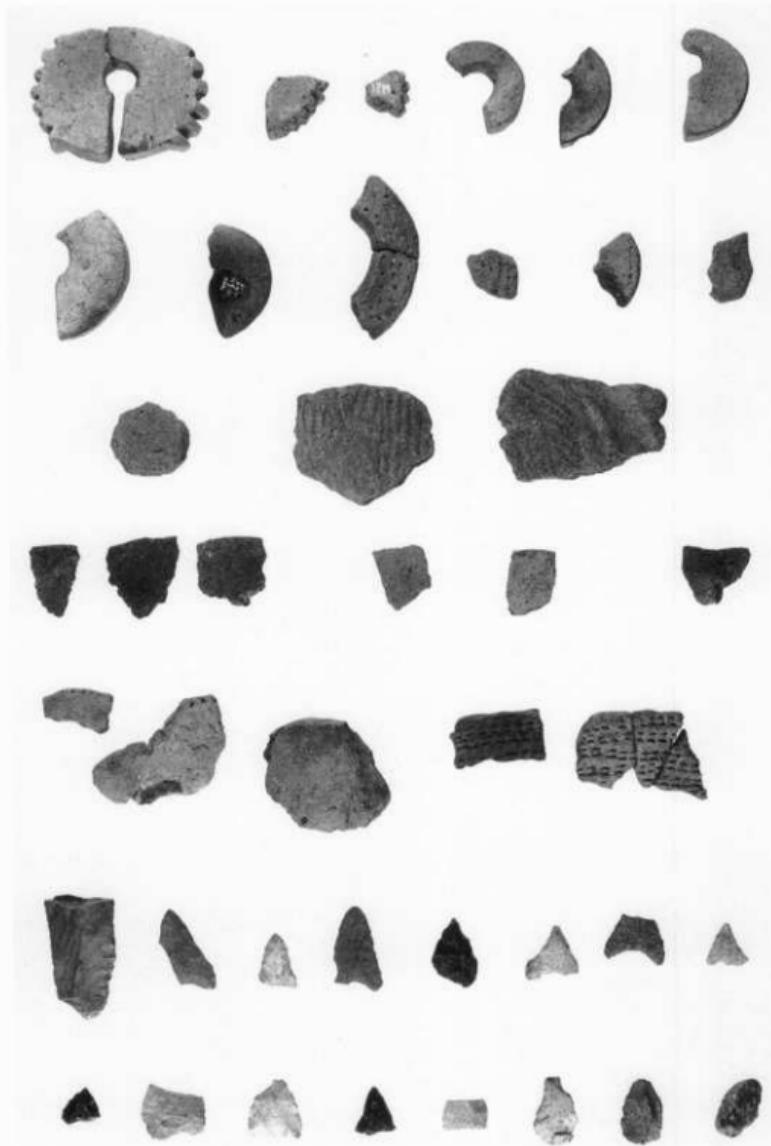
包含層出土縄文土器

林北遺跡



包含層出土縦文土器

林北遺跡



包含層出土土製品及び石器

長山遺跡



1. 遺跡全景

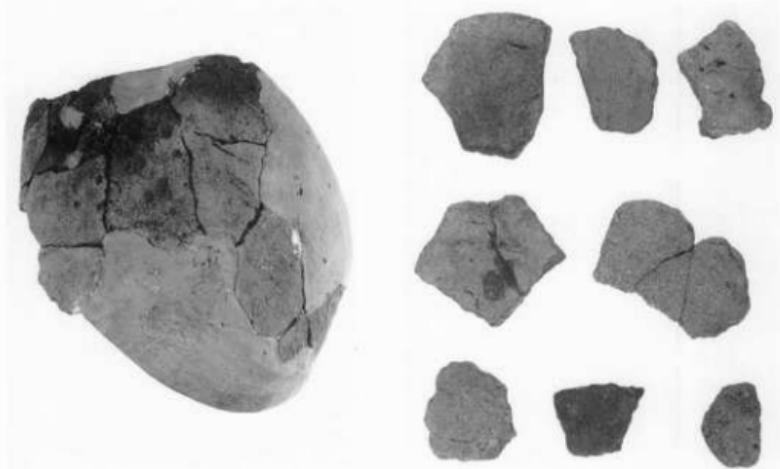


2. 旧石器時代確認グリッド

長山遺跡

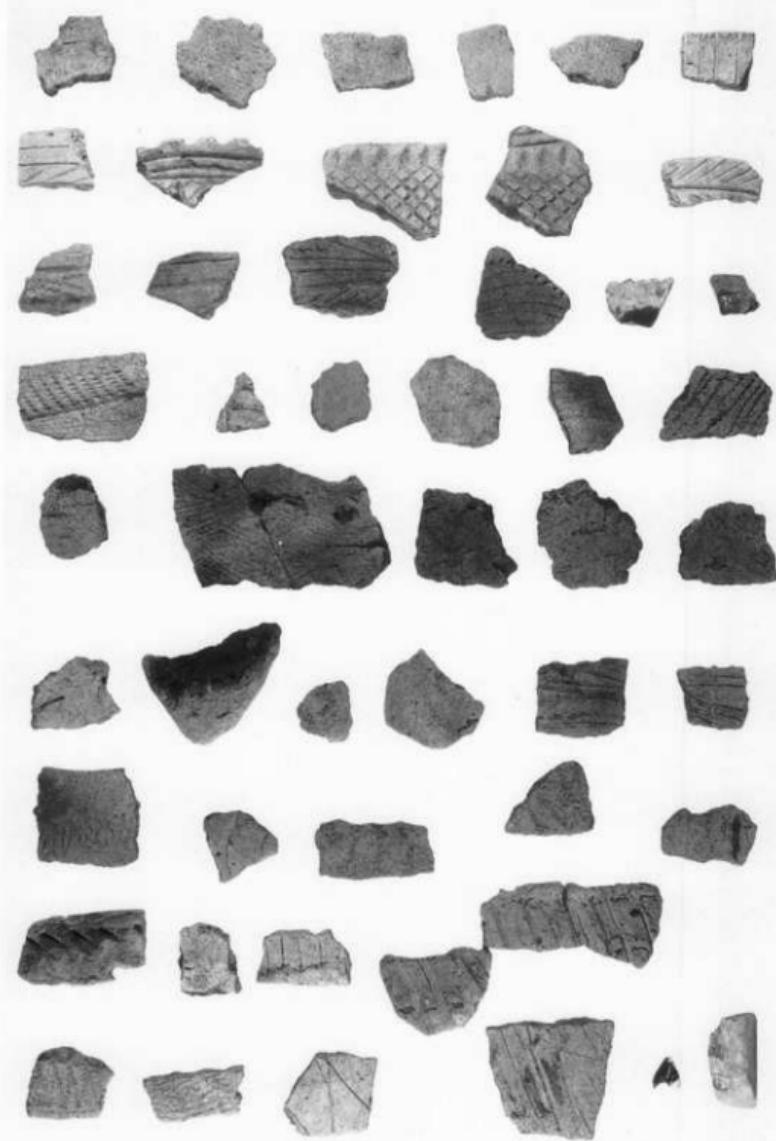


1. 002号陥し穴



2. 002号陥し穴出土土器

長山遺跡



包含層出土土器及び石器



1. 001号住居跡



2. 001号住居跡出土土器

千葉県文化財センター調査報告 第163集
成田市 林北遺跡・長山遺跡
—一般国道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書II—

平成元年3月30日 発行

発 行 千 葉 県 土 木 部
千葉市市場1丁目1番地

編 集 財團法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城2丁目10番1号

印 刷 有限会社 正 文 社
千葉市都町2丁目5番5号
